

正 (まんじ)

谷崎潤一郎

青空文庫

その一

先生、わたし今日はすっかり聞いてもらうつもりで伺いました
のんですけど、折角せつかくお仕事中のどこかまいませんですやろか？

それはそれは詳しいに申し上げますと実に長いのんで、ほんま
にわたし、せめてもう少し自由に筆動きましたら、自分でこの事
何から何まで書き留めて、小説のような風にまとめて、先生に見
てもらおうか思おもたりしましたのんですが、……実はこないだ中ひ
よつと書き出して見ましたのですが、何しろ事件があんまりこ
んがらがつてて、どういう風に何処どこから筆着けてええやら、とて

もわたしなんぞには見当つけしません。そんでやつぱり先生にでも聞いてもらうより仕様ない思いましてお邪魔に出ましたのんですけど、でも先生わたしのために大事な時間滅茶々々にしられておしまいになつて、えらい御迷惑でございますやろなあ。ほんまに宜しきりますか？わたし先生にはもう毎度々々おやさしいにしていただきますもんですから、つい御親切に甘える氣イになつて、御厄介(ごやつかい)にばつかりなりまして、どないに感謝してもしきれへんくらいや思てます。そいであのう、いつかも大へん御心配かけましたあの人のこと、あれからお話せんならんのんですが、あれはあの後に申し上げました通り、あないにいうて下さいましたのんで、自分でもしみじみ考えまして、あんなりぶつつり絶交

してしまいました。その当座は未練とでもいいますのんか、何かにつけて思い出されますもんですから、家にいてましてもまるでヒステリーのようになつてましたけど、そのうちにだんだんあの人がええことない男やつたいうことはつきり分つて来てまして、：主人も私が前は始終そわそわして音楽会や何かいうては出歩いてばっかりいましたのに、先生の御宅おたくい寄せてもらうようになりますから、すっかり様子変りまして、絵工書いたり、ピアノの稽古けいごしたりして、一日家に落ち着いてますもんですから、「この頃はお前も女らしなつたなあ」なんぞいいまして、蔭かげながら先生の御好意よろこんでました。もつと尤もわたし、あの人の事については何も主人にいいませなんだ。「夫に過去のあやまち隠しとくの

んようしゅうないから、——^{こと}殊に肉体上の関係なかつたのんなら告白しやすい訳やから、すべてを打ち明けておしまいなさい」と先生はいうて下さいましたけど、……けどどうも、……それはまあ、主人にしましてもあるいはうすうす氣イついてたかも分れしませんのですが、私の口からは何やいいにくうもありましたし、この後間違いないように自分きい注意してたらええのや思いました、何事も胸に収めてたのんです。ですから主人は私が先生からどんなお話伺うて来ましたやら、それは知りませんでしたけど、いろいろ為めになること教せてもらたに違ひない思^{おも}て、そういう心がけになつたのんはええ傾向やいうてましてん。

そんな訳で、そいから暫く^{しばらく}は大人^{おとな}しいに家い引^ひつ籠^{こも}つてました

もんですから、この様子やつたらまあ安心や思いましたもんか、
そうそう己おれも遊んではいられんからいうて、大阪の今橋ビルデ
イングに事務所借つて弁護士開業しましたのんが、あれが昨年の
二月頃でしたかしらん。——はあ、そうです。大学の方は独法や
りましたのんで、弁護士にならいつでもなれたのんです。始めは
何でもプロフェッサアになりたいようにいうてまして、ちょうど
私があの事件ありました時分には、引きつづいて大学院の研究室
の方かよ通かよてましたのですが、弁護士やる氣イになりましたのん
は別にこれちゅう理由あつたのんではあれしません。そういうま
でも私の実家の方に世話にばつかりなつてましては義理も悪いし、
私に対しても頭上あがらんと思うたのんですやろ。いつたい主人は大

学時代に秀才やいう評判で、たいへんにええ成績で卒業しました
もんですから、そういう人間ならばいうのんで、嫁に来たとはい
うもんの、婿むこを取るのも同様にして結婚したのです。そいでも
う私の親たちは主人を信用してまして、いくらか財産も分けてく
れまして、まあまああせるには及ばんから、学者になりたかつた
ら学者になるで、ゆつくり勉強するがええ。洋行もしたければ夫
婦で二、三年彼あつち方い行ってくるがええなどいうてくれまして、――
最初は主人も大そう喜んで、そんなつもりもあつたらしいのんで
すけど、――私があんまり我わが儘ままやのんと、実家の方笠かさに着て威
張るのんやいう風に取つて、それが癪しゃくに触さわつたのかも分れしませ
ん。しかし性質はだが学者肌はだに出来てまして、いつまでたつても書生

流のぶつきらぼう抜けしませんし、あいそは下手へたですし、それはそれは人づきあい悪い方ですから、弁護士なんぞになりましたところで一向仕事やかいあれしませんね。それでも毎日事務所いだけはきちんと出てましたが、そうなりましたら、私の方は一日家にぼんやりしてまして、しようないものですから、自然また、いろいろと、一旦忘れてたことが胸に浮かんで来るのんですね。前には暇ありますと歌作つたりしましたが、歌はかいって思い出の種になりますので、もうこの頃はせえしませんやろう？ そんで私、こうやつててはろくな事考えへんさかい、これは何とかせんといかん、何ぞ氣まぎイ紛れるようなことはと思いまして、——先生は御存知でしょうか、——あのう、天王寺てんのうじの方に女子技芸学校がっこう

いうのんありますねん。私立の詰まらん学校ですねんけど、絵工と、音楽と、裁縫と、刺繡ししゅうと、そいからまだ外にも何や、まあそんな風に科ア分れてまして、入学の資格なぞむずかしいことも何にものうて、大人でも子供でも自由に這はい入れます。わたし前にも日本画稽古けいこしてまして、下手ですけど、その方になら幾いくらか趣味持つてますもんですから、それ毎日、朝は主人と一緒に出かけるようにしまして、ともかくもまあ、通うことにしてんわ。尤も毎日とはいしましても、そんな学校ですから、休みたい時は勝手に休んだりしましたけど、――

主人は絵工や文学やにはてんと趣味ない方やのんですが、私が学校い行きますことは賛成してくれまして、それは結構や、ええ

思いつきやさかい精出して行くがええいうて、自分から勧めたら
 らいやのんでした。毎朝出かけますのんにも、私が行きますのん
 は九時のこともあり、十時のこともあり、自分の都合でいろいろ
 になることありましたけど、主人の方も事務所暇^{ひま}やのんですさか
 い、何時になろうと大概^{たいがい}待つてくれまして、阪神電車で梅田
 まで一緒に行き、そいから二人円タクに乗つて堺筋^{さかいすじ}の電車通
 りの今橋の角で主人おろしまして私はずっとその車で天王寺い行
 きます。主人はそういう風にして一緒に出かけますこと楽しみに
 してたらしいのん、「またもう一遍^{いつぶん}学生時代に復つたような
 気イするなあ」などいいますから、「夫婦づれで自動車で通う学
 生あつたらおかしいやないか」いいましたら、あはあは笑うたり

なんぞして上機嫌じょうきげんでした。午後に帰ります時分にもなるべく誘さそってくれるようないいますのんで、電話で打ち合わせしといて、事務所い寄つたり、難波なんばや阪神で待ち合わしたりして、一緒に松竹座なぞい行つたりしました。そういうような塩梅あんばいで主人との間は大変工合ぐあいように行つてましたのですが、あれは四月の半ば頃でしたか、わたしほんの詰まらん事で学校の校長さんと喧嘩けんかしてしまいました。それはあのう、妙なことですが、学校でモデル使つかて、それにいろいろの服装さしたりポーズ取らしたりしまして、——日本画の方は裸体のデッサンはやりませんけど、——それ写生する時間ありますねん。ところがちょうどその時分に使つかたのんが、Y子さんちゅう十九になる娘さんで、大阪では有名な

美人のモデルやそうで、それに楊柳観音の姿さしまして、——まあ、いくらかそんな風すると裸体に近うなりますのんで、多少裸体の研究も出来るいう訳やつたのんです。私それを外の生徒たちと一緒に写生しますと、或る日校長先生が教室い這入つて来られて、「柿内かきうちさん、あなたの絵工はちよつともモデルに似ておらんようですが、あんたは誰ぞ、外にモデルあるのんではありますか」いわれて、何やこう、意味ありげに笑われますねん。それが校長先生ばつかりでのうて外の生徒たちも、先生が笑われるあとからクスクス忍び笑いするのんです。わたし思わずはつとしまして顔あこ赧うなうなりましてんけど、どういう訳で赧うなつたのんかその時は自分で分れしませなんだ。今になつて考えますと確かに

にあの時赧うになつたような氣イしますねんけど、あるいはそうでなかつたかも分れしません。しかし「外にモデルがある」いわれましたら、そういわれるまでは自分では意識してえしませなんだのに、何やしらんはつと胸いこたえるもんありますん。でも、そんなら誰モ^{デル}にしたかちゆうことは、はつきりしてたのんではあれしません。ただ何やしらん頭の中にY子さん以外の或る人の印象刻みきざついてて、Y子さんを眼の前に見ながら、知らず識ら^しずその印象の方モ^{デル}に使つてた、——使うつもりものうて、自然と筆がその人の姿写してた、いうだけやのんです。

もう先生にはお分りになつておられますやろが、その、わたし^が無意識のうちにモ^{デル}にしてた人いうのんが、——どうせ新聞

にも出ましたのんですから、いうてしまいますが、——徳光光子さんやのんです。（作者註、柿内未亡人はその異常なる経験の後にも割にやつれた痕^{あと}がなく、服装も態度も一年前と同様に派手できらびやかに、未亡人というよりは令嬢の如くに見える典型的な関西式の若奥様である。彼女は決して美女ではないが、「徳光光子」の名をいう時、その顔は不思議に照り輝やいた。）けど私は、まだその時分には光子さんとお友達になつてた訳ではあれしません。光子さんが洋画の方習^{なろ}ておられて、教室も違^{ちが}てましたよつて、ものいう機会もなかつたはずです。ですから光子さんの方では私の顔知りなされしませなんだか、知つてなさつても別に氣に留めておられなんだのんですやろ。私の方にしましてもそれ

ほど光子さんに注意してたとは思われしませんのですが、でも何とのう好きそうな人やいう風に考えてたに違いないのんです。それもしかし、ものいうたことないくらいですよつて、性質やとか気だてやとか、そんなこと分れしませんとしてんけど、——まあ、何とのう、ただ全体の感じやのんですね、そういうえば私が案外早うから光子さんに氣イつけてました証拠には、もうその時分に誰から聞いたというでもなしに、光子さんの名前やお所を、——船場の方にお店のある羅紗問屋のお嬢様で、住まいは阪急の蘆屋川にあるのやいうようなことまでちゃんと知つてましてん。そいでわたし、校長さんにそんなこといわれましたのんで、あとでいろいろ考えてみたのんですが、なるほどその絵工光子さんに似

てますけど、故意に似さしたいうのんではなし、また故意に似させたにしたところが、ぜんたいモデルにY子さん使ういうのんはY子さんの顔写すのん目的とはちがいますねんやろ？ ただY子さんに観音さんみたいな姿さして、その体つきや、白衣の襞の工合研究して、なおその上観音さんの感じ出せたらええ訳ですやろ。Y子さんはモデル女の中では美人かも分れしませんけど、光子さんの方がもつと美人で、その絵工の感じに合うてるおたら、光子さんモデルにしても差支いないではあれしませんか。

——私そない思たのんですねん。

その二

ところがそいから二、三日たちますと、またモデルの時間に校長先生が這入つて来られて、私の絵工の前い立ち止まってにやにや笑われますねん。そして「柿内さん」いいなきつて、「柿内さん、どうもこの絵工変ですなあ。ますますモデルに似んようになつて来ますね。いつたいあんたは誰モデルにしておられるのんですか」と、冷やかすような眼つきで私の顔じいツと視つめなさるのんです。「おや、そうですかしらん。モデルに似てえしませんか」と、私癱しゃくにさわりましたもんですから、わざとにそないいうてやりましてん。そやかて校長先生は絵工の先生ではないのんで

すやろ?——はあ、日本画の方の受持ち筒井春江先生やのん
 で、常時お越しになる訳やのうて、ときどきやつて来られて、
 何処が悪いやとか此處をこないせえやとかいわれますのんで、常
 は生徒たちが勝手にモデル見て画いてますねん。校長先生いうの
 んは、随意科の方に英語ありますねん。校長先生いうの
 うですけど、学士でも何でもあれしませんし、何処の学校出られ
 たのんか、学歴やかいもろくろくないらしい人やのんです。それ
 は後になつてから分りましてんけど、教育家いうよりは学校商売
 上手な人やのんで、つまり一種のやり手やのんですねんなあ。
 そういう校長さんですから絵工のことなんぞ分るはずあれしませ
 んし、余計な嘴入れる必要はないのんです。それにまた、学科の

方はたいがい専門の先生たちに任しきりにしてめつたに教室見廻ることやかいあれしませんのに、その時間に限つてわざわざやつて来られて、わたしの絵工何や彼んやといいなさるのんですね。「へえ、そうですかなあ、あんたはこの絵工このモデルに似てるつもりなんですか」と、皮肉な口調でいわれましたもんできかい、こっちも空惚そらとぼけてやりまして、「はい、わたし絵工は下手へたですから、似てえへんかも分れしませんけど、でも自分では一所懸命モ_デルの通りに写しましたつもりです」いいますと、

「いや、あんたは下手ではありません。なかなか上手に画かけてます。しかしこの顔は、どうも誰ぞ外の人に似てるようと思われますね」と、またそないいなさるのんです。「ああ、顔のことで

すか、顔はわたし、自分の理想にかなうように書いてみたのんです」いいますと、「ではあんたの理想いうのは誰のことですか」と、えらいひつこいですねん。そいからわたし、「これは理想やのんですから、別に誰ちゅう実在の人間えが描いた訳ではあれしません。観音さんの顔にふさわしいようになるだけ清らかな感じ持ったのなんですが、そいではいきませんでやろか。顔までモデルに似さんと悪いのんですやろか」いいましてん。すると、「あんたはたいそうむずかしい理窟りくついいなさる。しかし理想通りのもんが思いのままに画けるようやつたら、此の学校い絵工習いに来るには及ばん。理想通りに画かれないからこそモデルについて写生するのんではありませんか。自分勝手の絵工画くくらいならモ

デル使う必要あれしません。ましてこの観音さんがモデル以外の
或る実在の人間に似てるとしたら、あんたの理想いうもんも甚だ
不真面目に思えますね」いわれるのんで、「わたしちよつとも不
真面目どちがいます。仮にこの顔誰ぞに似ても、その人の顔觀
音さんの感じ出すのに適してましたら、それ写しても芸術的に疚
しいことない思います」いいますと、「いや、それがいかんのん
です。まだあんたは一人前の芸術家ではありません。あんたがそ
の人の顔清らかであると感じられても、万人がそう感じるかどうか
か、それが問題です。そういうことからとかく誤解が起るのんです」
いう訳ですねん。「へえ誤解て、どんな誤解起りますかしら
ん? ゼンたい似てる似てるいうて、誰に似てるのんですか、ど

うぞいうて下さい」 いうてやりましたら、ちょっとどぎまぎして、「あんたは強情な人ですねえ」 いわれて、そんなり校長先生は黙つてしまいはりました。わたしの時は校長さんやり込めてやつたのんで、喧嘩に勝つたような氣にして、えらい痛快でしてんわ。けど大勢の生徒たちの前で議論したものですよつて、えらい評判になつてしまつて、間ものうけつたいな噂ひろまるようになります。つまりわたしが光子さんに対して同性愛捧げてる、光子さんと私が怪しいいいますねん。——それが前にもいいましたように、まだその時分は光子さんと物いうたこともなかつたほどでしたさかい、出鱈目も出鱈目、ひどい嘘やのんです。尤もわたしは、うすうすみんなが陰口 いうていることぐらい感づいてまし

たもの、それがそないに騒がれてようとは夢にも知りませんだ。何せ身^{なん}イに覚えないことやのんですから、何いわれても平氣なもんで、まあ、世間の人いうたらたいがいええ加減なことをいい触らすもんや。附き合うてもいえへん人同士怪しいやなんて、なんぼ作りごとにしたかてようまあそんな謔ばつかりいえたもんや^{おも}思て、あんまり馬鹿々々しいて腹も立てしませなんだ。ただ心配になりましたのは、わたしはそいでかめしませんけど、光子さんの方はどう思てなさるやら、さぞかしえらい係り合いになつて迷惑してはるに違ひない思いましたら、そいからはこう、学校の往^いき復^{かい}りなぞに出遭^{であ}うことありましても、何や氣イさして、前みたいに顔しげしげと見守ること出来しませなんだ。そうかいう

て、思い切りようこつちから話しかけて、あやまるいうようなことも、——それがかいってけつたいなことになりますし、なおさら迷惑しなさるかも分れしませんのんで、そないする訳にもいけません。そんでわたし光子さんに出遇であいますと、出来るだけあやまる心持外に現わすようにして、小ちいそうになつて、下向いて、
 こそこそ逃げるよう^{そば}に傍通り抜けましたが、そないしながらも、
 先様怒さきさんおこつてはれへんやろか、どんな眼つきしてはるか、やつぱり気がかりやもんですから、擦すれちがう拍子にそうツと顔色うかごうたりしました。ところが光子さんの様子前とちよつとも変つたようなどこのうて、別にこつちを不愉快に思てなさる風にも見えません。あ、そうそう、此處ここに写真持つて来ましたよつて、

これ見て下さいませ。これは揃いの着物出来ましたとき二人で記念に撮りましたのんで、新聞にも出たことある問題の写真やのんです。これでもお分りになるように、こうして並んでもましたら、わたしが引き立て役勤めてる形で、光子さんは船場あたりの娘さんの中でもちよつと飛びきりの器量やのんです。（作者註、写真を見ると、お揃いの着物というのは如何にも上方好みのケバケバしい色彩のものらしい。柿内未亡人は束髪そくはつ、光子は島田に結つてゐるが、大阪風の町娘の姿のうちにも、その眼が非常に情熱的で、潤うるおいに富んでいる。一と口にいえば、恋愛の天才家といつたような気魄きはくに充ちた、魅力のある眼つきである。たしかに美貌ほうめいの持主には違ひなく、自分は引き立て役だという未亡人の言は

必ずしも謙遜けんそんではないが、この点が果して楊柳觀音の尊容に適するかどうかは疑問である。）先生はこんな顔だちどないお考えになりますか？　日本髪よう似合うてますやろ？――はあ、お母おはな様あさん日本髪好きやとかいうことで、ときどき結いやはりまして、学校いもその頭で来やはりましてん。――何せそんな学校ですから、制服なんぞあれしませんし、日本髪の着流しでも何でもかめしませんのんですから、わたしなんか袴はかま穿いて行たことあれしませなんだ。光子さんも、たまに洋服着なさることありますけど、和服の時はいつでも着流しでしてん。この写真では髪のせえで私より三つぐらい若うに見えてますけど、ほんまは一つ歳とし下の二十
三、――生きておられたら今年二十四ですねん。しかし光子さん

の方が一、二寸せえ高いでしたし、それに綺麗な人いうもんは、自分では器量鼻にかけへんつもりでも、やつぱり何とのう自信のある様子態度に現われるもんですやろか、それともこつちに引け目ありますとそない見えますのんですやろか、その後親しいになりましたからでも、歳からいうとわたしの方が姉さんでありますから、いつでも妹みたいな氣イしてましてん。

で、その時分、——といいますのは、話前に戻りまして、まだお互いにものもいわんといてました時分、前にいいましたようなけつたいな噂立ちましたことは光子さんの耳いも這入つてえへんはずあれしませんのに、光子さんの様子はちよつとも前と変れしませんねん。わたしの方では疾うから綺麗な人や思て、噂立

ちません時分には、光子さんが通りなさると、それとのう傍い寄つて行つたりしましてんけど、光子さんの方ではてんと私やかい眼中にないような塩梅^{あんばい}で、すうツと通つてしまいはりますが、その通られた跡の空氣までが綺麗なような氣イするのんです。もしも光子さんが例の噂聞いてなさるとしたら、なんぼ何でも私いうもんに注意しなされへん訳あれしませんやろ。イヤな奴^やつちや思われるか、氣の毒や思いなさるか、何とか素振^{そぶり}に見えそうなもんですのんに、さっぱりそういう風しなされへんもんですから、私の方も段々ずうずうしいになりまして、また傍い寄つて顔のぞき込むようになりますてん。すると或る日、お午^{ひる}の休みに休憩所でばつたり出遭^{であ}うと、いつでもすうツと澄まして通り過ぎてしま

いなさるのに、どういう訳やにツコリしなさつて、眼工で笑いなさるのんです。そこで私思わずお時儀(じぎ)してしまいましたら、直ぐつかつかと寄つて来られて、「わたし、あんたにこないだから大変失礼してました。どうぞ悪うに思わんといて 頂(ちようだい)戴(あやま)」いなさいますねん。「まあ何いいなさるのんです。わたしこそ詫(あやま)らないかなんだのんですが」いいますと、「あんた詫りなさることあれしませんわ。あんたは何も知りなされへんのんです。わたしたち陥れ(おどしい)よとしてる者いますから、氣イつけなさいや」いなさいますねん。「へえ、——それは誰ですか」と尋(た)ねますと、「校長先生ですわ」といわれて、「此處(ここ)では詳(こゝ)しい話出来(だけ)ませんかい何處(どこ)ぞ外(そと)い行(ゆき)て、お昼御飯一緒に附き合(あつ)うてもらわれし

ませんか？ そしたらいろいろ、ゆつくり聞いてもらいますが
いいなさるもんですから、「何処いでも一緒にいきますわ」と、
二人で天王寺公園の近所にあるレストランへ行きました。そいか
ら光子さん洋食たべながら話して下さったのですが、わたした
ちの事について悪い噂いい触らしたのんは実は校長さんやいいな
さいますねん。なるほどそういうわれて見ると、用もないのに教
室い這入はいつて来て、みんなの前でわざと私に恥搔かかすような事す
るいうのんが、だいぶんおかしい。悪意あつてしたもんとしか思
われへん。けどいつたい何のために校長さんがそんな噂触れ廻る
のんかといいますと、目的は光子さんにあるのんやそうで、何で
も彼かでも光子さんの品行について悪い評判立ちさいしたらええの

んやいうのんです。それがまたどういう訳やいいますと、その時分光子さんに結婚の話持ち上つてまして、先はMいう大阪でも有名なお金持の家の坊々^{ぼんぼん}で、光子さん自身は氣イ進んでおられなかつたそやのんですが、お宅ではたいそやのんの縁談望んでおられたし、先方でも光子さん欲しがつておられた。ところが或る市会議員のお嬢さんで、やつぱりそのMさんへ縁談持ちかけてる人あつて、光子さんの方と競争の形になつてた。——光子さんは競争のつもりやのうても、市会議員の方では大敵が現われた思いましてんやろ。何しろMさんの坊々は光子さんの器量にあこがれてラブレター寄越したくらいやのんですから、それは大敵に違ひありません。そこでその市会議員の方では八方に運動して、成ろ

うことなら光子さんにケチ附けよというのんで、もう今までにも随分いろいろと、光子さん外に男あるらしいとか、あることないこといい触らしてましたんやそうですが、まだそいだけでは飽き足らんと、どうど学校の方い手工廻して、校長さん買収したのんですなあ。あ、そうそう、そいからその前に、——話がほんまにこんがらがつてますけど、——その前にその校長さんが、校舎の修繕するからいうのんで、光子さんのお父様に、お金千円一時融通してもらえまいかいうて來たことがありますねんと。光子さんのお宅ではお金はたんとありまっさかい、千円ぐらい何でもなかつたのんですやろけど、おおびらに寄附金募るのんなら聞えてるが、一時融通してくれというのんおかしい、それにあんだけの校舎が

千円のお金で修繕^{でけ}出来るはずもないし、分らん話やいうようなことで、お父様は断^{ことわ}られたのんやそうですねん。光子さんの話やと、そんなこと^いうてはお金のありそうな生徒の家頼み歩くのん校長さんの癖^{くせ}やそうで、借つたお金は一ぺんでも返したことあれしませんねんと。それも校舎の修繕に使うのんなら格別、校舎いうのん豚小屋^{ききた}みたいに汚^{きた}うてぼろぼろになつたなり、荒れ放題にしたあるのんです。——はあ？ いいえ、そのお金は自分の生活費に使^{つか}てはりますねん。校長さんいいましても高等^{こうとう}幫^{ほう}間^{かん}みたいな人で、おまけに奥さんがやつぱりそこの学校の刺繡^{ししゅう}の先生してなさつて、夫婦でお金持の生徒に取り入つては、日曜のたんびに遠足会やとか、そんなことばつかりしてはりますさかい、なかなか

暮らし派手ですねん。そいでお金貸したげたら、たいそう御機嫌ええのんやそうですが、断つたら、陰い廻つてその生徒のことえらい悪ういやはりますねんと。つまり光子さんにはそういう恨みあるとこいさして、市会議員に頼まれたもんですから、どんな悪辣あくらつなことかでしかねへんのです。「ですからあんたわたしにされるために利用しられなさつたんやわ」と光子さんはいわれますねん。「まあ、そんな深い訳あつたのんですか、そんな事とはちよつとも知りませなんだが、それにしてもあんたと私とは今日までお附き合いもしてませなんだのに、あんまり出鱈目でたらめが過ぎるではあれしませんか。捏ねつぞう造する人も捏造する人なら、みんながそれ真まに受けるいうのん不思議でなれしません」いいますと、

「あんたはそれやから呑氣や」いいなさつて、「噂立つたもんやさかい、二人はわざと学校ではものいえへんのやと、みんなそないうてますし、それどころか、こないだの日曜に二人大軌電車に乗つて奈良い行くとこ見たいいう人きいあるのんですね」いいなさるのんです。わたし呆れてしもて、「まあ、誰がそんなこといいますねんやろ」いいますと、「なんでも校長さんの奥様おくさんから出たらしいのんです。それはあんたが考えてなさるより十倍も二十倍も陰険やのんですから、氣イ附けなさいや」いう訳ですねん。

その三

そこで光子さんは、ほんまにあんたに気の毒でなれしません、すみませんすみませんと何遍もいいますから、わたしの方がかいつて気の毒になりまして、「いいえ、いいえ、あんた悪いことあれしません。憎いのんは校長先生です。教育家ともあろうもんが、何ちゅう卑劣な、……けど、わたしでしたらどんなこといわれようとちよつとも構めしませんけど、あんたこそお嫁入り前の身イで、そんな悪辣な人たちの罠わなにからんように氣イ附けなさいや」と、こつちからあれこれと慰めたげましたら、「きょうはあんたにすつくりお話すること出来て、ほんまにええことし

ました。こいでようよう胸すツとしました」いわれて、「あのう、こうして二人で話やかいしてたら、またなんやかんやいわれますから、こんだけにしどきまひよなあ」と笑いなさるのんです。

「折角友だちになつたのに名残り惜しいですなあ」と、わたし何や、ほんまにそんな氣イしまして暫くもじもじしてました。すると光子さんは「あんたさいよろしかつたら友だちになりたいのんですが、今度内い遊びに来なされしませんか。わたしハタからどないいわれても恐いことあれしませんわ」いいなさるのんです。

「はあ、わたしかつて恐いことあれしませんわ、あんまりうるさいこというのんなら、あんな学校やかい止めてしまひます」いいますと、「なあ、柿内さん、わたしいつそのこと、知つて仲よう

してみんなが冷やかすのん見てやりたいわ。あんたどない思いなさる?」「はあ、それがよろしいわ、そして校長さんどんな顔しなさるか見てやりたいですわ」と、わたしもすぐその気イになつてしまいました。「そしたら、あのう、面白いことがありますねん」と光子さん手工たたいてやんちゃのよう^{うれ}に嬉しがりなさつて、

「ほんまに今度の日曜に、二人で奈良い行きなされしませんか。」「ええ、行きまひよ、行きまひよ、それ分つたらえらい評判になりますで。」——そんなことで三十分か一時間ほどの間に、お互にもうすっかり打ち解けてしまいました。

きょうはもう学校い帰るのんも馬鹿々々しいし、何なら松竹いでも行きませんかと、孰方からとものういい出しまして、その日

は夕方まで一緒に遊んで、光子さんは「ちよつと店い寄つて行きます」と心斎橋筋散步しながら帰られて、わたしは日本橋からタクシーに乗つて今橋の事務所い行きました。そんでいつでもみたいに主人^{さそ}誘て阪神電車で帰りましたのですが、その時主人が、「お前今日えらいそわそわしてゐなあ、何ぞうれしい事でもあつたのんか」いわれましたのんで、「やつぱりいつもと様子違てるのかしらん、光子さんと友達になつたことそないに自分幸福にさしたのんかしらん」と、ひとりで思いました。「そんでもわたし、今日ほんまにええ人と友達になつたんやもん。」――「何んちゅう人や。」「何んちゅう人やて、そら綺麗な人やもん。」――「何んあんた、あのう、船場の徳光いう羅紗問屋あること知らん？」

そこのお嬢さんやねんけど。」「何処で友達になつたんや?」

「同じ学校の人やわ、——それが、あのう、わたしとその人と、こないだからけつたいな噂立うわさ立てつてなあ、——」わたし別に疚やましいことやかいないもんですさかい、面白半分に校長先生と喧嘩けんかしたことから、一から十まで話してしまいますと、「ずいぶんひどい学校やなあ。けどお前がそないに美人やいうのんなら、僕も一遍会うてみたいもんやがなあ」と、冗談にそないいうてました。

「いまにきつと内いも遊びに来なさるやろ。わたしこの次の日曜日に、一緒に奈良い行くいうて約束したんやけど、行つたらいかん?」「そら行つてもかめへん。」主人はそないいまして「校長さん怒るぜエ」いうて笑わろてましてん。

明くる日学校に行きますと、きんの一緒に御飯食べたことや映画見に行つたこともういつの間にやら知れ渡つてて「柿内さん、あんたきんの道頓堀^{どうとんぼり}歩いてなさつたなあ」 「お楽しみやなあ」「あれ一体誰やつたなあ」なんて、女人の人いうたら、も、ほんまにうるさいのんです。そしたら光子さんはまたそれ面白がりなさつて、知つて傍^{そば}寄つて来られて、これ見よがしにしなさるのんです。そういうようなあんばいで、そいから二、三日するうちに、えらい仲好^ようなつてしましました。校長さんはかいつて呆^{あき}れてしまわれたのんか、ただ恐い眼工してじつと睨^{にら}んでおられるだけで、もう何ともいいなされしません。光子さんは「なあ、柿内さん、あの観音さんの絵工もつと私に似るように画^かいて御覽^{ごらん}。そしたら

どないにいやはるかしらん」いいなさるのんで、前よりももつと似るように直しましてんけど、校長さんはそんなり教室いも来なされしません。わたしたちはええ氣イになつて「痛快やなあ」いうてましてん。

そないなつて来ると、無理に奈良い行く必要もないようになりましたが、ちょうど四月の終りのことで、えらいええお天気の日曜でしたさかい、電話かけて相談して、上六の終点で待ち合いして、お午すぎから若草山の方ぶらぶら歩き廻りました。光子さんは歳のわりにたいそうおませなどこもありますし、また子供のような無邪氣などこもあつて、山の頂辺い上りましたら、蜜柑五つも六つも買うて、「ちよつと見てて御覧」と、それを上から

転ころこころこぼしたりしました。すると蜜柑は頂辺から下までころころと転こんで、その拍子にぽんと一つ往来飛び越えて、向い側の家の
中い這入るのんはいで、面白がつていつまででもそないしてなさるの
んです。「光子さん、そんな事してたら切りがないよって蕨わらびでも
採りに行きまひよ。わたしこの山に蕨や土筆つくりのたんと生えてると
こよう知つてるわ」いうて、そいから日の暮れまでかかつて、蕨
やらぜんまいやら、土筆やら、たあんと採りました。——はあ、
その場所ですか、あれはあのう、若草山の山が三つ重なつてゐる、
その一番前の山と、その次の山との間のへつこんだ所、——あそ
こら辺へんいつたに、ずっともう一杯に生えてまして、あの山のん
は、毎年春に山焼きしますのんで特別おいしいのんです。——そ

んなことでもう空大分暗くろなつた時分、二人ともまた前の山の方に戻つて来まして、あんまりくたぶれましたよつて、山の中途へんい腰おろして休みながら、暫くしばらくぼんやりしてます時でした。「柿内さん」と、急に光子さんが何やこうすこし改まつた様子で、

「わたしどうしてもあんたにお礼いわんならんことあるねんけど」いわれるのんです。「何やのん?」と尋たンねますと、「わたしあんたのお蔭でなあ、あんなイヤな人のどこい嫁入りやかいせえでもええようになりそうやねんわ。」——そういうて、何や知りませんけどニヤニヤ笑わろてなさるのんです。「まあ、また何でそんな事になつたん?」「ほんまに噂いうもん早いもんで、もうちやあんと、あなたと私のこと向むこい知れてしもてるねん。」

その四

「ゆんべなあ、内でその話が出てなあ」と、光子さんは言葉をつ
がれて、「お母さんがわたしを呼びやはつて、お前、学校でこん
な噂うわさあるそうやけど、それほんまでつか、いやはるねん。へえ、
そらそんな噂あることはありまつけども、いつたいお母さん、何ど
処こで聞きやはりましてん？ そらまあ何処でもよろしおまつしや
ないか。それよかそらほんまの事でつか？ へえ、ほんまです、
そやけど何がけつたいでんねん？ 友達と仲好うしてるぐらいで。

——そういうたらお母さんちよつとまごつきはつてなあ、そらお前、仲好うしてるだけやつたら何ともないけど、何やそれがイヤらしいこツちゃいうやおまへんか。イヤらしい事てどんな事でんねん？ どんな事やかお母さんは知りめえんけどな、別に悪いことやなかつたらそんな疇立つはずおまへんやないか。ああ、そら何でや知つてまんねん、そのお友達いうのがなあ、うちの顔が好きやいやはつてモデルにしやはりましてん、そんな事からみんながうちらを排斥し出しあはりましてんやろ。そらもう学校いうたらうるそうてなあ、ちよつとでも顔綺麗きれいかつたら何や彼やと憎まれるよつて。——そらまあ、そんな事もありまつしやろけど、と、わたしが説明したげたらお母さんもだんだん分つて来やはつて、

そんな事ならかめへんけども、そないいうてもその何とかはんい
 う人とばっかり仲好うせん方がよろしおまつしやないか。お前も
 これからが大事な体やよつて、しようむない事あんまりいわれん
 方がよろしおまつせいうて、まあそなりで済んでしもてんけど、
 きつとあの市会議員なあ、向らへんの連中がそんな噂聞きさが
 Mの方いしやべったのんが、それがまたお母さんの耳に這入はいつて
 しもてんわ。そやよつて、大抵縁談もあかんようになるやろ思て
 んねん。」「そら、あんたはそんでもええやろけど、お母さんがき
 つとわたしを嫌いやがつてはるわ。今に見てて御覧、わたしと交際し
 たらいかんいわれへんかしらん？もし誤解しられたらイヤやけ
 どなあ」と、わたしが気がかりで、そういういますと、「そん

なことあんた、心配せんかてかめへんわ。そらほんまいうたら、校長さんが慾張りの人で、お金貸してもらえなんだら悪口いう癖のあることや、市会議員の人に買収しられてることやらを、みんなお母さんにいうてしまおか知らん思たけど、そんだけつたいな学校なら止めてしまいなはれいわれそうやよつて、いわんと置いていてんわ。そしたらあんたと会われへんようになるよつて。」

「あんたもなかなか隅すみい置けんなあ。」「ふふん、うちかつてスコイよつてなあ」と、光子さんはくつくつ笑われて、「向むきが悪い人やつたらこつちかつて利用してやらんと損やわ。」「けど、あんたの方が破談になつて、市会議員のいとはんもよろこんではるやろなあ。」「そしたらあんたは両方から感謝しられるべきやわ」

なんかと、お互にあれやこれやいい合いまして、山の上で一時間以上もしやべつてました。わたし今まででも若草山い上つたこと何遍もありますけど、そんなに日イ暮れてしまうまで山の上にいたことあれしませなんだのんで、あそこから夕靄の景色見わたすのんは、ほんまにその時が初めてでした。ついさつきまでまだその辺に人がチラホラしてましたのに、もうてつぺんから麓までだあれも人の影ありません。その日は割にえらい人出でしたから、あのなだらかな、若草の生えた山の中ほどには、弁当のたべ残しや、蜜柑の皮や、正宗の罐が一杯散らかって、空はまだうす明いのに、足の下には奈良の町の灯イちらちらして、遠くの方の、ちょうどわたしらの真^まア向うのあたりには、生駒^{いこま}山のケー

ブル・カアのイルミネーションがずうつと珠数^{じゆず}のようにつながつて、紫色した靄のあいだから、ところどころ絶えては続いてまたたいてます。そのまたたいてる光見ると、わたし、何やしらん息詰まるように感じたのですが、「まあ、知らん間に晩になつてしまもて、淋しいわなあ^{さび}」と、光子さんがいわれました。「一人やつたらほんまに恐^{こお}うていられへんわなあ」と、「好きな人と二人だけやつたらこんな淋しい所の方がええわ」と、そないいうて光子さんはためいきついておられました。「うちあんたと一緒にやつたらいつまでも此処^{ここ}でこないしてたいわ。」——わたしはその言葉口いは出さんと、夕闇^{ゆうやみ}のなかにうずくまつて足投げ出してなさる光子さんの横顔^{なが}眺めてましたが、暗いのんでどん

な表情してなさるのんか分りませなんだ。ただ光子さんの白い足た
 袋の向うに、大仏殿の金の 鮓 鉾しゃちほこ が空のうすあかりに底光りし
 てました。「おそうなつたよつて帰りまひよ」いうて、そいから
 山降りて、大軌まで歩いて行きましたらかれこれ七時になつてしま
 いました。「うちお腹減なかつたけど、あんたどうする?」「きよ
 うは早う帰らんといかんねんわ奈良い行くとも何ともいわんと出
 て來たよつて」と、光子さんは時間氣イにしておられましたが、
 「そないいうたかてうちもうペコペコやわ。おそなりついでやよ
 つてええやないか」いうて、無理に引つ張つて洋食屋い這入りま
 した。「あんたとこの旦那だんなさん、おそなつても別に何ともいやは
 れへんか?」と御飯たべながらそんな話が出ました。「うちのあ

の人、そんなこと何とも干渉しやはれへん。それにうち、あんたと仲好うなつたことちやあんと話したあるわ。」「そしたらどないいいやはつた?」「うちがあんまりあんたのことばっかりいうよつて、あの人いうたら、そんな綺麗な人やつたら一ぺん会うてみたいなあ、いつそ遊びに来えへんもんやろかいうてはつた。」

「あんたの旦那さんいうたら優しい人?」「そらもうあの人と來たら、うちがどんな勝手気儘な事してもなんともいやはれへんわ。けど、あんまり優しいよつて、時によつたら張合いないのんで、——わたし、まだその時までは自分のことは一つも光子さんにいうてなかつたのんで、夫と結婚するようになつた訳や、それから、あのう、いつやらの恋愛問題や、それについて先生にいろい

ろ心配して戴いたことまで、その時すつくりいうてしまいました。光子さんはわたしが、先生知つてゐるいいましたら、「まあ、そうお？　あんた知つてんのん？」とびつくりしなきつて、自分も先生の小説とても好きやよつて、一遍連れて行つてくれなされしませんかいうてなきつたのんですねが、いツつも今度こそ今度こそといいながら、とうとうそのままになつてしまふたんですね。「ふうん、そしてあんた、もうその人と交際してへんのん？」と、光子さんは一所懸命にあの事聞きたがりなきつて、今はもう交際してえしませんといいますと、「なんでやのん？　そんな、あんたのいうように清い恋やつたら交際してもええやないか。うちやつたら、恋愛と結婚とは別々のようにもう思つけどなあ」なんかいうて、

「あんたの旦那さん、その事ちょっと知りはれへんのん？」

「ふん、そらうすうす感じてたかも知れんけど、うちなんにもその事についていうことないし、とやかく問題になつたようなことなかつたわ。」「えらい信用あるねんなあ。」「それよりかうちのこといつそ子供のように思つてるねんわ。そやよつてうち気に入らんねんけど」と、わたしそういいました。

その晩家い帰つてみたら十時近くでしたので、「えらいおそかつたなあ」と、夫はいつにのうけつたいな顔して、何やこう淋しそうにしてたのんが、ちよつと氣の毒な氣イしました。別に悪いことした訳でも何でもないのに、夫が長いこと待ちくたぶれて、たつた今御飯すましたらしい様子見ると、妙に気がとがめま

した。そういうと前、恋人と会うてた時分にはよう十時過ぎに帰つて來たことありましたけど、この頃になつてこないにおそなつたことあれしませなんだ。そこで夫もちよつと氣イ廻したのんかも分れしませんが、わたし自身も、何かしらんちようどあの時と同じような氣イしました。

その五

そうそう、そいからその時分にあのいつぞやの觀音さんの繪工出来上りましたので、それ夫にみせたことありました。「ふうん、
でけ

光子さんいうたらこんな人か。お前にしたらこの絵工うもう出来すぎてるなあ」と、夫は晩御飯のときにそれ置たたみの上い広げて、一と箸はしたべては見、一と箸はしたべては見いして、「これやつたら、さも絵工にかいたようやけど、ほんまにこの通りかいな」と、あやしみながら念押しました。「そらこの絵工問題になつたくらいやもん、よう似てるわ。ほんとの光子さんはこの神々こうごうしさの上にちよつと肉感的などこあるねんけど、日本画にしたらその感じが出来へんねん。」——その絵工わたし、大分骨折りましたのんで自分でもよう画かけてると思いました。夫はしきりに傑作やいいました、とにかくわたしが絵工いうもん習い始めてから、これほど一所懸命に、興味も以つて画いたことはあれしませなんだ。「い

つそこの絵工 表具ひょうぐしてもろたらどうやねん。それでそれが出来上つてから、光子さんに見に来てもらたらええやないか」と、夫がいいますのんで、わたしもその氣イになりまして、そんなら京都の表具屋いやつて立派に仕立てさせよと思ひながら、ついそのままに放つたあつた、或る日イのことでした。「実はこうこういうつもりやねんけど」と、光子さんにその話したら「表具屋いやるぐらいやつたら、もう一ぺん書き直して見えへん?」—あれはあれでよう出来てるけど、——顔はよう似てるけど、——体のつきがちよつとだけ違うよつてなあ」といわれるんです。「違うて、どういう風に?」「どういう風にいうたかって、口でいうたぐらいやつたら分れへんわ」と、そないいわれたのんが、ただ自分の

感じ正直に述べられたのんで、「わたしの体はもつともつと綺麗です」いうような自慢の意味はなかつたのんですけど、でも何とのう不満足に思うてなさる様子でしたので、「そんなら一ぺんあんたのはだかの恰好^{かっこ}見せて欲しいなあ」といいますと、「そら、見せたげてもかめへんわ」と、すぐに承知しなさいました。

そんな話があつたのんやつぱり学校からの帰り道か何処ぞやつたんですねやろ。「そんならあんたどこい行て見せたげるわ」といわれて、たしかその明くる日の午後、学校早退^{はやび}きして二人でわたしの家^{うち}いきました。「うち、はだかになつたりなんかしたら、あんたとこの人びつくりしやはるやろなあ」と、みちみち光子さんはいうておられましたが、きまりわるがるより、なんぞ面白い遊び

でもするように、やんちやな眼工しておかしがつておられるのんでした。「家にええ部屋あるわ。そこやつたら誰にも見られへん、西洋間になつてるよつて」と、わたしはそないいうて二階の寝室い連れて行きました、「まあ、感じのええ部屋やなあ、とてもハイカラなダブルベッドあるなあ」と、光子さんはそのベッドに腰かけて、お臀^{しり}にはずみつけてスプリングぐいぐい撓^{たゆ}ましたりしながら、暫くおもての海のけしき見ておられました。——宅は海岸の波打ち際^{ぎわ}にありますので、二階はたいへんに見晴らしええのんです。東の方と、南の方と、両方がガラス窓になつてまして、それはとても明^{あこ}うて、朝やらおそうまでは寝てられしません。お天気のええ日イは松原の向うに、海越えて遠く紀州あたりの山や、

こんごうさん
金剛山

などが見えます。はあ？——はあ、海水浴も出来るのんです。あそこら辺へんの海はちょっと行きますと、じきにどかんと深うになつてますので、あぶないのんですけど、香櫞園こうろえんだけは海水浴場出来まして、夏はほんまに賑にぎやかやのんです。ちょうどその時分は五月のなかば頃でしたから、「早う夏になつたらええのんになあ、毎日でも泳ぎに来るのに」と、部屋の中見廻しながら、「うちも結婚したら、こんな寝室持ちたいわ」などというたりしました。「あんたやつたら、これどころやあるかいな。もつともつとええとこい行けるやないか。」「そやけど、結婚してしもたらどんな寝室に住んでも、綺麗な籠かごの中に入れられた鳥のようないもんと違うかしらん？」「そら、そんな氣きイすることもあるけど、

——「あんた、此処は夫婦の秘密室やないかいな。わたしこんな部屋い引っ張つて来て、旦那さんに叱しかられへん?」「秘密室かつてかめへんやないか。あんただけは特別やもん。」「そないいうても、夫婦の寝室は神聖なもんやいうさかいに、……」「そしたら処女の裸体かつて神聖なもんやよつて、ここで見せてもらうのが一番ええわ。今のうちやつたら光線の工合ぐあいもちようどええよつて、はよ見せてほしいわ。」私はそういうて急きたてました。

「海の方から誰ぞ見てはれへんやろか。」「あほらしい、あんな沖の方にいる船から何が見えるもんかいな。」「そやけど、ここはガラス窓やよつてなあ。——そこのカーテン締めてほしいわ。」五月いうても眼工痛うになるほどキラキラするお天氣でしたから

窓はところどころ開け放してありました。それすつかり締め切つてしまふたのんで、部屋のなかは汗がたらたら流れるぐらいの暑さでした。光子さんは観音さんのポーズするのに、なんぞ白衣の代りになるような白い布がほしいというのんで、ベッドのシーツ剥はがしました。そして洋服箪笥だんすの蔭いい行いて、帯ほどいて、髪ぱらぱらにして、きれいに梳すいて、はだかの上ういそのシーツをちょうど観音さんのように頭からゆるやかにまといました。「ちょっと見てごらん、こないしてみたら、あなたの絵工と大分違うやろ。」そういうて光子さんは、箪笥の扉とびらに附いている姿見の前に立つて、自分で自分の美しさにぼうつとしておられるのんでした。「まあ、あんた、綺麗な体しててんなあ。」——わたしはなんや、

こんな見事な宝持ちながら今までそれ何で隠してなさつたのんかと、批難^{ひなん}するような気持でいいました。わたしの絵工は顔こそ似せてありますけど、体はY子というモデル女うつしたのんですねから、似ていなのはあたりまえです。それに日本画の方のモデル女は体よりも顔のきれいのんが多いのんで、そのY子という人も、体はそんなに立派ではのうて、肌^{はだ}なんかも荒れてまして、黒く濁つたような感じでしたから、それ見馴れた眼工には、ほんまに雪と墨ほどの違いのように思われました。「あんた、こんな綺麗な体やのに、なんで今まで隠してたん?」と、わたしはどうとう口に出して恨みごというてしました。そして「あんまりやわ、あんまりやわ」いうてるうちに、どういう訳や涙が一杯た

まつて来まして、うしろから光子さんに抱きついて、涙の顔を白衣の肩の上に載せて、二人して姿見のなかを覗き込んでいました。「まあ、あんた、どうかしてるなあ」と光子さんは鏡に映つて涙見ながら呆^{あき}れたようにいわれるんです。「うち、あんまり綺麗なもん見たりしたら、感激して涙が出て来るねん。」私はそういうたなり、とめどのう涙流れるのん拭^ふこうともせんと、いつまでもじつと抱きついてました。

その六

「さあ、もう分つたやろううち着物きるわなあ」いわれるのんを、「イヤや、イヤや、もつと見せてほしいイツ」と、わたしは甘えたみたいに首振つてせがみました。「あほらしいもない、いつまではだかになつてたかでしようがないやないか。」「しようがあるとも。あんた、まだ、ほんとのはだかになつてえへんやないか。この白い物取つてしまはつたら、——」そういうていきなり肩にかかるてるシーツ掴みますと、「放してほし！ 放してほし！」と、一所懸命に剥^はがされまいとしなさるのんで、シーツがびりびり破れました。わたしはかあツと逆上してしまって、くやし涙一杯浮かべて、「そんならいらん、うちあんたそんな水臭い人や思てえへんだのに、もうええわ。もうきょう限り友達でもなんでもない

わ」と破れたシーツを口でずたずたに引き裂きました。「まあ、あんた、氣イでも違うたんか。」「うちあんたみたいに薄情な人知らんわ。あんた、こないだ、もうお互に一切隠しごとせんいうて約束したやないか。あんたのうそつき!」——その時はよっぽどどうかしてたと見えまして、自分で覚えないのんすけど、まつさおになつてぶるぶる顛ふるいながら光子さんを睨にらみつけた顔つきが、ほんまに氣でも狂うたように思えましたそうです。そういうと光子さんもやつぱり黙つてわたしの顔じーツと視みつめたまま、ふるてなさつたようでしたが、ついさつきまでの氣高い楊柳觀音のポーズ崩くずれて、羞はずかしそうに両方の肩おさえて、一方の足の先を一方の上に重ねて、片膝かたひざを「く」の字なりにすぼめながら立

つてなさるのんが、哀れにも美しゆう思えました。わたしはちよ
 つといいたいたしい氣イしましてんけど、シーツの破れ目から堆くうずたか
 盛り上つた肩の肉が白い肌をのぞかせてるのを見ますと、いつそ
 残酷に引きちぎつてやりとうなつて、夢中で飛びついて荒々しゆ
 うシーツ剥がしました。わたしも真剣なら、光子さんも氣イ呑ま
 れたと見えまして、こつちのするままになりながら、もう何事も
 いわれませなんだ。ただ両方が憎々しくらいな激しい眼つき片
 時も外らさんと相手の顔いそそいきました。わたしはどうど思い
 通りにしてやつたいう勝利のほほえみを、——冷ややかな、意地
 の悪いほほえみを口もとに浮かべて、体に巻きついてるものをだ
 んだんに解いて行きましたが、次第に神聖な処女の彫像が現われ

て来ますと、勝利の感じがいつのまにやら驚歎の声に変つて行きました。「ああ憎たらしい、こんな綺麗な体してて、——うちあんた殺してやりたい。」わたしはそういうて光子さんのふるてる手頸てくびしつかり握りしめたまま、一方の手工で顔引き寄せて、唇持くちびるつて行きました。すると突然光子さんの方からも、「殺して、殺して、——うちあんたに殺されたい、——」と、物狂おしい声聞えて、それが熱い息と一緒に私の顔いかかりました。見ると光子さんの頬ほおにも涙流れてるなんです。二人は腕と腕とを互の背中で組み合って、どっちの涙やら分らん涙飲み込みました。

その日はわたし、別にどうという考はありませんでしたけど、光子さん連れて来ること夫に黙つてましたんで、夫の方では学

校の帰りにわたしが事務所い寄る思うて、ゆうがたまで待つてましたそうですが、いつまでたつても来ませんのんで、家い電話かけてきました。「そんなんやつたら、ちょっと知らしてくれたらええのに。えらい待ちぼけ喰うたもんや。」「ついうつかりして済まなんだけど、急に話がまとまつてしまもん。」「そんで、光子さんまだいやはんのか。」「いやはるけど、もう直き^じ帰りはるやろ。」「まあもうちよつと留めといたげ工な、僕こいから直ぐ帰るわ。」「そしたら大急ぎで頼むわ。」——わたしは口ではそういうましたけど、心のうちでは夫が戻つて来ますのん何や面白う思いませなんだ。さつきの寝室の事あつてから、わたしの胸には幸福の感じが満ち満ちてまして、今日は何という楽しい日イ

やろと、足が地に着かんように浮き浮きして、些細なことにも直ぐに心臓どきッと早鐘打つようになつてましたのに、夫に帰つて来られてはその折角の幸福へヒビが入るようを感じたのです。わたしはただもう光子さんと二人きりで、いつまでも話してたかつたのんです。いえ、話なんかせえでも構めしません、黙つて光子さんの顔さい見てられたら、——自分がその人のそばにいるということだけで、限りない幸福が胸一杯になるのなんです。

「なあ光子さん、今電話がかかってなあ、うちの人帰つて来るそ
うやねんけど、あんたどないする?」 「えー、どうしよう——」
と、光子さんは慌てて着物着ながら、——もう夕方の五時時分で
したが、その時まで二、三時間もシーツ一つでいなさつたのんで

す。——「うち会わんと帰つたら悪いかしらん?」 「あんたに会いたいいうてたけど、……今じつき帰つて来るよつて待つてたらどう?」 わたしはそういうて引き留めはしましたもの、その実夫が戻らん先に早う出て行つてくれはつたらええ思いました。そういうのんが、今日の一日を完全に幸福な一日として終らしたい、折角のうつくしい日の思い出を、第三者のために不純にさしてしまいたくないと願うたのんです。そんな気持があつたもんですから、夫が帰つて来ました時には、自然とその不満の色顔い出まして、妙にふさぎ込んでしまいました。光子さんも、わたしがそういう風でしたし、初対面でもありますし、それにいくらか氣いとがめてもいなさつたのんでしょう、あんまり物数いわれませ

んのんで、三人ながら手持無沙汰てもちぶたさで、めいめい何や別な事考えてる、というたようなあんばいでした。そうなるとわたしは、いよいよ邪魔しられたのんが腹立たしくて、夫憎うさい感じました。

「二人で何して遊んでてん？」と、夫は光子さんの手前、ぼつぼつそんなこと話しかけました。「今日は寝室アトリエに使つこてしもてん」と、わたしはわざとあつさりいうて除のけました、「——観音さんの絵工書きなおそ思おもて、光子さんにモデルになつてもらわん。」「口クな絵工もよう画かんくせに、モデルこそええ迷惑やなあ。」「そやけど、モデルの名誉回復のために書きなおしてくれいわれてんもん。」「お前まいらなんば画いたかつてモデルわやくちやにするだけや。モデルの方がずっと綺麗やないか。」夫婦が

そんなことをいい合てるあいだ、光子さんは羞かしそうに下向いてくつくつ笑うてなさるだけで、てんと話はずまずに、間ものう帰つてしまわれました。

その七

ここにその時分やりとりしました手紙持つて来ましたから、お読みになつて下さいませ。まだこの外にもたんとたんとありますけど、とてもみんなは持つて来られしませなんだのんで、これはほんの一部分、その中の面白そなのん選つてきましたのんです。^よ

こつちの方のが古いのんで大体順番になつてますから、どうぞこれから見て下さいませ。光子さんからわたしの方い来ましたのはひとつつ残らず大事にしもて置いたのですが、わたしの方から光子さんい上げたのんが中に交つてますのんは、それはあのう、あとで話しますけど、少し事情ありますまして、あの方の家から取り戻しましたのんです。（作者註、柿内未亡人がほんの一部分だといつたところのそれらの文穀は、約八寸立方ほどの縮緬の帛紗包みにハチ切れるくらいになつていて、帛紗の端が辛うじて四つに結ばれていた。その小さい堅い結び目を解くのに彼女の指頭は紅を潮し、そこを抓つてているように見えた。やがて中から取り出された手紙の数々は、まるで千代紙のあらゆる種類がこぼれ出た

かのようであつた。なぜならそれらは悉くことごとくなまめかしい極彩色の模様のある、木版刷りの封筒に入れられているのである。封筒の型は四つ折りにした婦人用のレターペーパーがやつと這入るほどに小さく、その表面に四度刷りもしくは五度刷りの竹久夢二風の美人画、月見草、すずらん、チューリップなどの模様が置かれてある。作者はこれを見て少からず驚かされた。けだしこういうケバケバしい封筒の趣味は決して東京の女にはない。たといそれが恋文であつても、東京の女はもつとさつぱりしたのを使う。彼女たちにこんなのはを見せたら、なんてイヤ味ツたらしいんだろうと、一言の下に軽蔑けいべつされること請け合いである。男も彼の恋人からこういう封筒の文を貰もらつたら、彼が東京人である限り、一朝

にしてあいそを尽かしてしまうであろう。とにかくその毒々しいあくどい趣味は、さすがに大阪の女である。そうしてそれが相愛し合う女同士の間に交されたものであるのを思う時、尚更あくどさが感ぜられる。ここにその手紙のうちからこの物語の真相を知るのに参考になるものだけを引用するが、ついでにそれらの模様についても、一つ一つ紹介するであろう。思うにそれらの意匠の方が時としては手紙の内容よりも、二人の恋の背景として一層の価値があるからである。——

(五月六日、柿内夫人園子より光子へ。封筒の寸法は縦四寸、横二寸三分、鶴色地に桜ン坊とハート型の模様がある。桜ン坊はすべてで五顆^か、黒い茎に真紅^{まつか}な実が附いているもの。ハート型は十

箇で、二箇ずつ重なっている。上方のは薄紫、下方のは金色、封筒の天地にも金色のギザギザで輪郭が取つてある。レターペーパーは一面に極くうすい緑で薦よこしの葉が刷つてある上に銀の点線で罫けいが引いてある。夫人の筆蹟ひつせきはペン字であるが、字の略しかたにゴマカシがないのを見れば相当に習字の稽古けいこを積んだものに違ちいなく、女学校では能筆の方だつたであろう。小野鷺堂おのがどうの書風を更に骨無しにしたような、よくいえば流麗、わるくいえばぬらりくらりした字体で、それがまた不思議なくらい封筒の絵とびつたり合つている。）

しとくくくく……今夜は五月雨さみだれが降つてゐる。あたしは

今窓の外の桐の花にふりそそぐ雨の音をききながら、あの、あなたが編んで下さった紅いシェードの垂れているスタンドの蔭でじつと机にむかっています。なんだかうつとうしい晩だけれど、軒端のきばを伝う雨の重しづくに静かに耳を傾けていると、思いなしかそれがやさしい囁ささやきのように聞えて来る。しとくくくく……

何をささやいているのか知らん？　しとくくく……ああそ
うだ、光子光子光子、……恋しい人の名を呼んでいるのだ。徳
光徳光、……光子光子、……徳、徳、徳、……光、光、光、……

あたしはいつの間にかペンを取つて、左の手の指の先へ「徳光」という字や「光子」という字を数限りもなく書いていた、親指から小指まで順々に。

堪忍かんにん

忍して頂戴ちようだい

、こんなつまらないことを書いて。

毎日顔が見られるのに手紙なんか書くのはおかしい？ でも学校だと傍へ寄るのがきまりが悪くて妙に気がひけるのだもの。そういうえばこんなにならぬいうちはわざとお互おながに寄り添うてみんなに見せびらかしたのに、噂うわさが事実になつてしまつてからかいつて人目を憚はばかるようになるなんて、やつぱりあたし気が弱いのかしらん？ ああ、どうかして強くなりたい、もつと、もつと、……神をも、仏をも、親をも、夫をも、恐れないほど強く強く、……

明日の午後はお茶の稽古？ そしたら三時にあたしの家に来られない？ あした学校でイエスかノーを知らして頂戴、この

間のように合図してね。きっと、きっと、きっと来て！ 今も
 テーブルの瑠璃^{るり}の花瓶の中^{ほこ}で綻びかけた白い芍^{しゃく}薬^{やく}が、あた
 しと一緒にあえかなためいきを洩らしながらあなたの来るのを
 待つているの。失望させると可愛い芍薬の花が泣きます。洋服^も
 篠^{だんす}の姿見もあなたの姿を映したいといつています。ではきっと！

明日のお昼の遊び時間にあたしはいつもの運動場のプラタナ
 スの下に立っています。合図を忘れてはいけません。

園

光
様

(五月十一日、光子より園子へ。封筒縦四寸五分。横二寸三分。
 オールドローズの地色の中央に幅一寸四分ほどの広さに碁盤目が
ルタ
 通つていて、その中に四つ葉のクローバーを散らし、下の方に骨牌カが
 二枚、ハートの一とスペードの六が重なつていて。碁盤目と
 クローバーは銀色、ハートは赤、スペードは黒、レターペーパー
 は濃い鳶色とびいろの無地で、その右下の隅すみの所から斜めに白絵の具の
 ペン字で文句が書いてある。筆蹟は園子より拙くつたな、落ち着きのない走り書きのように見えるが、この方が字体が大きく、イヤ味が
 なくて生き生きとした奔放な感を与える。)

光は今日一日機嫌が悪かつたの。床の間の花をむしったり罪もない梅（専ら光子に侍いている小間使こまづかいの名）を叱り飛ばしたり、——光はきつと日曜になると機嫌が悪いの。なぜって一日姉ちゃんに会えないのだもの。なぜハズさんがいると来てはいけないの？ でも電話ぐらいならと思つて、さつきかけたらハズさんと一緒に鳴尾なるおへ 莓いちご狩がりに行つてお留守！ まあお楽しみ！

ひどい、ひどい！

あんまりやわ、あんまりやわ！

光は一人で泣いています。

ああ、ああ、ああ

レキシカムヤハナスニモレナシ

[Ta Soe&ur Clair]

[Ma Che`re Soe&r Mlle. Jardin]

(上文の " [Ta Soe&ur] = は仏蘭西語の "Your Sister" と "Clair" は光の義から転じて「光子」を意味するのである。 " [Ma Che`re Soe&ur] = は "My Dear Sister" "Mlle. Jardin" は "Miss Garden" にて「園子嬢」の意。 「マダム・ジヤルダン」ことねなこや「マダム・ジヤルダン」としたてなにには宛名の末にトの如く追記してある。 ——)

あて姉ちゃんを「マダム」とはいわない。

「奥様」——まあ嫌な！思てもぞつとする！

でも、なんことハズさんに知れたら大変ね、

Be careful!

姉ちゃんはなんで手紙に「園子」とサインするの？なんで
「姉より」としてくれないの？

(五月十八日、園子より光子へ。封筒縦四寸横二寸四分。図は横
に画いてある。緋色の地に鹿の子の絞りのような銀の点線が這入
つていて、下に大きな桜の花弁の端が三枚見え、その上に後姿の
舞妓が半身を出している。緋、紫、黒、銀、青の五度刷りの最も

色彩の濃厚なもの。従つてその表面へ文字を書いても読みにくいので、宛名は裏面に記してある。レターペーパーは丈七寸幅四寸五分ほどの大きさの中に八寸ぐらいの白百合の茎しらゆりのたわめられたのが左へ寄せて描いてあり、その周まわりがうす桃色にぼかしてある。故に罫けいの引いてある部分は僅かに紙面の三分の一の面積しかない。それへ四号活字より小さい文字で細く細く書き続けてある。）

とうとう來た、一度は來るとかねがね覺悟していた事が、
 …とうとう破裂してしまった。ゆうべは随分猛烈だつた。光ち
 ゃんが見たらどんなにびっくりするかしらん。あたしら夫婦—
 —あ、堪忍して頂戴、あたしらだなんて。——ハズもあたしも

久しぶりであんな大喧嘩をした。久しぶりどころかこんなことは結婚以来始めてだつた。この前問題があつた時でもゆうべのよう激しい合いをしたことはなかつた。あのおとなしい優しい人があんなに腹を立てるなんて！ けど無理もないかも知れない、なぜつてあたし今考えるとほんとに悪いことをいつたのだもの。どうしてあたしハズに向うとああ強情になれるのかしらん？ それにゆんべは特別に強硬だつたの、どういう訳だか。……あたし今度は自分でちつとも済まない事をしたという気が起らないのでハズだつて随分乱暴なことをいつた、不良少女、ヴァンパイア、文学中毒、——ありとあらゆる汚名をあびせて、それでも足りないで光ちゃんのことまでも「寝室

の闖入者ちんにゅうしゃ」だの「家庭の破壊者」だと、——あたし自分のことだけなら堪忍するけど、光ちゃんのことをいわれたのでもう我慢ならなかつた。「うちが不良少女なら何でそんな者を妻にしなかつた。あんたは男らしいもない、あたしの家から学費を出してもらひとうて好きでもない者と結婚しなかつたんか。あたしの我が儘ままは初めから分つてるやないか。あんたは卑怯ひきょうや、意氣地なしや」と、思いきりくさしてやつた。そしたらいきなり灰皿あわせを取つて振り上げたのでえらい目に遭あわすか思たら、それを壁へ叩たたきつけたなり、手荒なこともようせんとまつさおになつて黙つてしまつた。「うちの体に怪我けがでもさして御覧、覚悟があるよつて」そういうてもやつぱり黙つていた。それきり

今日までハズは一ぺんも口をきかない……。

——その手紙にあるいい合いのことについてはもつと先生に聞いて戴きたい事があるんです。前にもお話しましたかどうか、わたしと夫はどうも性質が合いませんし、それに何処か生理的にも違うてると見えまして、結婚してからほんとに楽しい夫婦生活を味おうたことはありませなんだ。夫にいわすとそれはお前が氣儘きままなからだ。何も性質が合わんことはない、合わさんようになるよつてだ。おれ己の方は合わすように努めてるのに、お前がそういう心がけにならんのがいかん。世間の夫婦てそない理想通りに行てるのんあれへんで。ハタから見たら円満のようでも、内情知

つたら不平のない奴あるもんか。己らかて人が見たら羨ましいように見えるかも知れへんし、一般の標準から思たら実際幸福の方かも知れん。お前は世間知らずのいとはんやよつて、自分で自分の幸福が分らんと何や彼や^か贅沢^{ぜいたく}いうのんや。お前みたいな人間はどうない申分のない夫持つてもこれなら満足やいう時あれへんで。と、いつもそないいうのんですけど、私は夫の世の中悟りすましたような、^{あきら}諦めたような物のいい方が気に入りませんよつて、あんたはちつとも煩悶^{はんもん}_{とこ}なんかしたことないよう見える、あんたという人は人間らしい所あれへん、と、そういうて攻撃するのです。夫の方では私の性質に合わすように努めてるのんですやろけど、それがほんまに気持がぴちつと合うのんでのうて、こつち

を子供扱いにして、ええ加減にあやしてるように思われますのん
で、そういう態度が癪しゃくに触つて仕方あれしません。あんた大学で
は秀才やつたそうやさかい、あてみたいなもん定めし幼稚に見え
るやろけど、あてから見たら化石みたいな人やわ、というてやつ
た事もあります。いつたいこの人の胸にはパツションいうものが
あるのかしらん？ この人でも泣いたり怒おこったりびっくりしたり
する事あるのかしらん？ 私は冷静な夫の性格にやるせない淋し
さ感じたばかりやのうて、いつの間にやら一種のわるさじみた好
奇心抱いてましたのんで、それがこの前のことや光子さんのこと
や、いろいろの事件惹ひき起す元になつたのです。

その八

でも前の事件の時分は結婚して間もないことで、まだ処女時代の純真さ持つてましたから、今よりはうぶで、氣イ小そうて、夫に済まんいう心持強いでしたけど、その手紙にもありますように今度はさっぱりそんな氣持になりませなんだ。わたしかつて、ほんまいうたら夫の知らん間にたんと苦労しましたのんで、だんだん擦^すれて、ずるうなつてたのんですが、夫にはそれ分らんと、いまだに子供や子供や思てます。わたし最初それが口惜^{くや}しくなりませんでしたが、口惜しがるとなお馬鹿にしられるので、ようし、

むこ
向が子供や思てるのんなら、何処までもそう思わして、油断さしてやれ、と、次第にそんな氣イになりました。うわべはいかにもやんちや裝うて、都合の悪い時はだだこねたり甘えたりして、お腹の中では、ふん、人を子供や思てええ氣イになつて、あんたこそお人好しのぼんぼんやないか。あんたみたいな人だま欺すぐらいじツきやわ、と、嘲ちようろう弄するようになつて、しまいにはそれが面白うて何ぞいうとすぐ泣いたり怒鳴どなつたりして、自分がら末恐ろしいなるほど芝居するのんが上手じょうずになつてしまつて、……先生なんかこんなことよう分つておられますやろけど、ほんまに人間の心理いうもん境遇によつてえらいえらい変りようするもんですなあ。前でしたら時に依つてはつと思て、ああ、こんな事す

るのんやなかつたと、後悔する氣イになりましたのんに、今では反抗的に、なんじや意氣地のない、これぐらいのこと恐がつてどないすると、自分で自分の 脳病おくびよう あざわらうようになるなんて、……それに、夫に内証で外の男愛したら悪いやろけど、女が女恋いするねんよつてかめへん。同性の間でなんぼ親しなつたかて夫がそれとやかくいう権利あれへんと、いつもそんな理窟つけて自分あざむの心欺いてました。その実わたしの光子さんを思う程度は、前の人思うたのより十倍も二十倍も、……百倍も二百倍も熱烈やつたのんですけど、……

わたしがそない大胆になつたもう一つの理由は、夫は学生時代からそれはもうお話にならんキッチン屋のガリガリ屋で、それを父

から見込まれましたくらいやのんですから、ほんまに常識一点張りの、ちょっとでも変つたことや普通のことと違ちがうこととは分らん人やのんで、わたしと光子さんとの間柄なんぞも、なかなか感づかんやろう、やつぱりただの仲好しや思てるやろうと、たかくくつてましたのんです。初めは夫もそんなことあるやろうとは夢にも想像してませんでしたが、そのうちにだんだん、なんやけつたいやなあ思うようになりましたのんですやろ。そらそのはずで、前には学校の帰りがけに事務所い寄つて夫誘いましたのんに、近頃ではひとりで先い帰つてしまふ。そんで三日に一遍ぐらいはきっと光子さんやつて来なさつて、二人で長いこと閉じ籠こもつててる。モデルに使うねんいうてるけど、何してんのか、何日たつても絵

工出来上らんし、おかしい思うのんあたりまえやのんです。「な
あ、光ちゃん、この頃あの人ぼんやり気イつき出して來たよつて、
用心せんとあかんねん。今日はあてがあんた所ところい行くわなあ」い
うて、わたしの方から光子さんの家い出かけることもありました
けれど、……はあ、学校でイヤな噂うわさあつたのんは市会議員の中傷
やいうこと分りましたのんで、光子さんのお母さんはちよつとも
私疑ごうてなされしませなんだ。わたしも信用落したらいかん思
て、訪たンねるたんびにお母さんの機嫌きげん取つてましたんで、「柿
内の奥さん奥さん」いうて、「ええ友達が出来てよろしうますな
あ」というてなさつた。それくらいですよつて、毎日ほど遊びに行
ても電話かけても差支さしつかいあれしませなんだけど、……お母さん

の外にその手紙にある梅いうお附つきの女子衆おなごしゅもいますし、いろいろハタ眼があるもんですよつて、わたしの家のような訳には行きません。「あてとこやつぱりあかんなあ。折角お母ちゃんが姉ちやん信用してはんのに、下手なことしてしもたら厄介やさかい」

いうて、「そうそう、宝塚の新温泉どうやろ?」と、光子さんがいい出しなさつて、二人で向むこうへ行て家族風呂い這はい入りながら、

「姉ちゃんずるいわ、あての裸ばっかり見せてくれ見させてくれいうて、自分のんちつとも見せん癖に。」「あてずるいことないねんけど、あんたがあんまり白いよつて恥かしいねん。あんた、こんな黒い体見ても愛想尽かさんといてなあ」というたりしましたが、わたしほんとに、自分の肌はだ初めて光子さんに見せた時は、一緒に

並ぶのんイヤな氣イしました。光子さんは色が飛び切り白いだけでのうて、体の釣合いよう取れてて、姿がすらツとしてなさるのんで、それに比べたら、何や急に自分の体無細工に思われて来て、……「姉ちゃんかつて綺麗やないかいな、あてとちつとも変れへんもん」いわれますと、しまいにはそれを眞に受けて何とも思わんようになりましたけど、……初めはわたし身がちぢむように感じました。

それであのう、その前の日曜に夫と二人で 茅狩(いちらごがり)に行たことが光子さんの手紙にありますでしよう。その日は実はまた宝塚(おほつか)行きたいなあ思てたとい、「どうや、今日は天氣ええよつて鳴(な)尾い行てめえへんか」いわれましたのんで、あいさには夫の機嫌

取つといてやれ思いました、イヤやなあ思いながら出かけたのんですけど、魂は光子さんのところ飛んで行てしまつて、ちよつとも興乗りませなんだ。恋いしさが募れば募るほど、なんやかやと話しかける夫がうるそうて、腹立たしいて、ろくさま返事もせんと一日ふさぎ込んでもましたよつて、その時からもう夫の方は一ぺん懲らしてやらんならんと考えたらしいのんです。けど例に依つてなんや浮かん顔してるだけで、喜怒哀樂をなかなか面へ表わさん人やもんですから、わたしの方ではまさかそない怒らしたとは気つけしませなんだ。そして夕方帰つて来ると、留守に電話かかつたいうのんで口惜しくて口惜しいて、夫や家の者たちにぶんぶん当り散らしました。そしたら明くる朝光子さんから恨みの手紙

来ましたよつて、すぐ電話で打ち合わして、阪急の梅田で落ち合
うて、学校い行かんと、そのまま宝塚い行てしもて、それから一
週間ほどずうツと一日も欠かさんと宝塚い行てたのんです。そう
そう、さつきのあの写真、それはちようどその頃に揃そろいの着物出
来ましたのんで、二人で記念に撮とったのですが、……そして、
梅狩に行た日から五、六日たつてからやつたか知らん、或る日二
階でいつものように話してると、三時過ぎ頃に女子衆おなごしゆが慌てて
段梯子駆だんばしごけ上つて来て、「旦那さん帰つて来やはりましたでエ
！」いいますのんで、「えー、なんでやろこんな時分に！」と、
えらいまごついてしもて、「光ちゃん、早よしいでわ！」いいな
がら、二人ともけつたいな顔して下い降りて行たことあります

ん。夫はその間に洋服をセルの単衣物^{ひとえもの}に着かえてしもてまして、わたしたち見た瞬間ちよつとイヤな顔しましたが、すぐ平氣になつて、「今日は僕なんにも仕事なかつたのんで事務所早退きして来てん、お前らも学校^{なま}急けててんなんあ」いうて、「お茶でも入れて何ぞうまいお菓子ンでも出さんかいな、お客様もあるし、⋮⋮」と、それなり三人で無駄話しながら何事ものう済みましたけど、その時うつかり光子さんが私のこと「姉ちゃん」というてしましたのんではつとしました。「あんた、あてのこと『姉ちゃん』いわんと『園ちゃん』いうてくれた方がええなあ、つい口癖になつてしまつて誰の前でも出るよつて」と、わたししょつちゅういうてましたのんですけど、そういうといつも光子さん氣イ悪うして、

「イヤや、イヤや、そんな水臭いことあるもんか、姉ちゃんはあってに『姉ちゃん』いわれるのん嫌か?」いいなさつて、「頼むさかい『姉ちゃん』いわして! あて、人のいるときつときつと気イつけるよつて!」いうてなきつたのんですけど、どうどそこで出でしもたのんです。そんで光子さんが帰つてしまいなさつてから、夫も私も奥歯に物挟はさまつたような工合ぐあいでした。そいからその明くる日の夕方、晩御飯たべたあとで、「僕、どうもこの頃のお前の素振腑そぶりふに落ちんねんけど、何ぞ訳あるのん違うか」いうて、ふと思いついたように尋たねますのんで、「腑に落ちんてどういう工合に? うち、自分で一向氣イつかんけど」いうてやりますと、「お前、あの光子いう児ことえらい仲ええようやけど、一体あの児

どない思てんねん?」 いうのんです。 「うち、光子さん大好きや
わ、そやよつて仲好うしてんねんわ。」 「好きは分つて、どう
いう意味で好きやねん?」 「好きいうことは感情やもん、理由や
かいあれへんわ。」 ——わたし、弱み見せたらいかん思て、故意
に挑戦的に出てやりましたのんで、「そうお前みたいにぽんぽん
いわんと、もつと落ち着いて分るように話したらええやないか」
いうて、「好きにもいろいろの意味があるし、——学校でそんな
噂うわさあつたりしたんやさかい——誤解受けたらためにならん思うよ
つて尋たねてんねん」 いいます。「万が一そんなこと世間としあい聞え
てみいな、あの児よりお前が責任あんて工。お前の方としあいが歳としあい上うえや
し、夫のある身いやし、……そしたらあの児の親たちに対しても

申訳立たんやないか。お前だけやない、僕かつて黙つて見てたいわれたら、後日になつてどないにもいいようない。」わたしは夫のいうこと一々胸にこたえましたけど、そんでも強情張つて、

「もう分つてる、うち、そんな、友達のことまで何や彼や干渉されるのん嫌いやわ。あんたはあんたで好きな友達持つたらええし、うちはうちで勝手にさしといて欲しいわ。うちかつて自分の責任ぐらい知つてまッせ」 いうてやりました。「ふん、そら、普通の意味の友達やつたら僕は決して干渉せえへん。そやけど、毎日のように学校休んだり、夫の眼工をかすめたり、こそツと人の居ん所い閉じ籠つたりするようなは、健全な交際とは認められん。」
 「へえ、あんた、おかしいこというねんなあ。そんだけつたいな

想像するなんて、あんたこそ下等やないか。」「もしほんとに僕の方あやまが下等やつたら、なんぼでも詫あやまる。僕はなるべく僕の想像中あたらんように祈つて。けど、お前は僕を下等やいう前に自分の良心に訴えてみる必要ないのんか。自分にちよつとも疚やましいとこないいえるのんか。」「なんでまた今日そんな事いい出したん？」

うちは光子さんの顔好きやさかい、それ元もとで友達になつたいうことは、あんたかつて知つてるやないか。あんた自分で、そんな綺麗な人やつたら会わしてくれいうたやないか。誰かつて綺麗な人好きになるのん当り前やし、女同士の間やつたら美術品愛するのんと同じやんのに、それ不健全いうたら、あんたの方がもつともつと不健全やわ。」「そやかつて、美術品愛するのんやつたら何

も二人だけで閉じ籠らんと、僕のいる前でもええはずやが、……
 いつでも僕が帰つて来ると、お前ら妙にモジモジしてるのんどう
 いう訳や？ それに第一、きょうだいでもないのんに『姉ちゃん』
 やの『妹』やのいうのんから、気に入らん。』「あほらしい！

あんた女学生間のことちよつとも知らんねんなあ。誰でもみんな
 仲のええもの同士やつたら、『姉ちゃん』や『妹』やいうのん珍
 しいことあれへんわ。そんなこと不思議がんのん、あんたぐらい
 なもんやわ』その晩は夫もなかなか負けてませなんだ。いつもや
 つたら私が少しだだ捏ねたら、『しようのない奴ツちやなあ』い
 うて、ええ加減にあきらめてしましますのんに、イヤにねちねち
 追窮して「うそついてもあかん、僕ちやあんと清に聞いてるねん

いうて、絵工書くためでないのん分つてる、一体何してるのんか、
 はつきり説明してみいいます。「そんなこと説明の限りやない。
 絵工画くいうても本職の絵かきがモデル使(つこ)て製作すんのんと違う
 ねんもん、どうせ遊び半分やよつて、そないきつちりと真面目(まじめ)く
 さつてばっかりもいられへん。」「そんなら二階使わんかつて、
 下の部屋でしたらええやないか。」「使ても悪いことあれへんや
 んか。——あんた、一ぺん絵かきのアトリエい行て絵工画(か)くとこ
 見て御覧、本職の人かつて製作するのんにそないむずかしい顔ば
 っかりしてせツせとしてるもんあれへんわ。——休み休み気分の
 動くのん待つようにして画かんと、ええもん出来(でき)へんよつてなあ
 。」「お前そんなえらそうな口きて、いつぞ一ぺん絵工出来上

るつもりかいな。」「出来る出来んはうち問題にしてえへん。光子さんいうたら顔ばっかりやのうて、そらもう体じゅう顫ふるい着きたいように綺麗やさかい、観音様のポーズしてもろてそれじいッと眺めてると、絵工画かんかつて何時間でも見飽きせえへん。」「あの児はそないして、何時間でもお前に肌見られてて平氣やのんか?」「そらそやわ。女が女に見せるねんもん羞はずかしいことあれへんし、誰かて自分の肌褒められて悪い氣イせえへんやんかいな。」「なんぼ女同士やかて昼ひる日中若い女が裸になつたりして、お前らまるで氣違ざたい沙汰さたやな。」「うちあんたのようにコンヴェンションに囚とらわれてえへんよつてなあ。——あんた、映画女優の裸体見てつくづく綺麗やなあと感じたことあれへんか? うちや

つたらそんな時ええ景色見るのんと同じようにうつとりとして何ちゅうことなしに幸福な、生きがいある感じして来て、しまいには涙出て来んねん。『美』の感覚のない人に説明したかて分れへんやろけど。」「そんなことが『美』の感覚と何の関係あるもんか、そら変態性慾や。」「あんたこそ頭古いねん。」「馬鹿いいな！お前は年中しようもない恋愛小説ばっかり読んでるよつて、文学中毒起してんねん。」「うるさいなあ、ほんまに」いうて、私が取り合わんと横向いてしまうと、「一体あの光子いう児も真面目なお嬢さんとは受け取られへん。少し常識のあるもんやつたら、人の家庭へ 開闢ちんにゆう 入して平和破壊するようなことする訳あれへん。あらきつと性質ええことない児やで。あんなもんと附き合

うてたらお前も今に迷惑するでエ。」——自分のことよか好きな人のこといわれた方がどないに口惜しいか知れんもんで、この光子さんの悪口が出ると思わず識らざむかツとしました。「何やのん、あんた！ あんた何の権利あつてうちが大好きやいう人のこととやかくいうのん？ 光子さんほど姿と性質のぴちツと合つた人、世界じゅう搜したかつてまたとあれへん。あんな心の清い人、人間やあれへん、観音様と同じこツちゃ。悪口いうたら勿体のうて罰ばちあたるわ！」「それ見い！ そんなこというのんが正気の沙汰やあれへん！ 気違いのいい草や。」「あんたこそ人間の化石や。」「お前いつの間にや立派な不良少女になつてしまてんなあ。」「どうせうち不良やよつてなあ。——そんなこと昔から分

つてんのんに何でそんなもんと結婚しなはつてん？ あんた、うちのお父さんに洋行費出してもらいたうてうち貰もらいなはつたん？ きつとそだツしやろ！」なんぼ人のええ夫でもこんだけいうたら見る見る額に青筋立てて、「なんやと、もう一ぺんいうてみい！」と、珍しいことに大声で怒鳴りました。「ふん、何べんでもいうたげるわ！ あんたは男らしいもない、お金が欲しいてうちと結婚してんやろ！ 卑ひきよ怯ようもん」途端に夫がむくツとすわり直した思たら、なんやシユーツと白い物飛んで、カチツと後の壁い当りました。夢中で首ぢぢめたのんで私は何ともありませんだが、灰皿取つて投げ付けたのんです。夫が仮にも私に對して手工挙げるなんぞいうことは今まで一ぺんもなかつたのんで、かつ

と興奮してしもて、「あんたうちがそないにまで憎いのんか！」

うちの体にカスリ傷でもさしたらお父さんにいうたげるさかい、
それ承知やつたら叩たたくなど殺すなと勝手にしなさい！ さあ殺して欲し！ 殺していうたら！」夫は「馬鹿！」いうたなり、半狂乱に泣きわめいてる私の姿呆あきれて眺めてるだけでした。

夫も私もそんなり口ききませんで、明くる日一日睨にらみ合いつづけて、晩に寝室い這入ります時もやつぱり黙つたままでしたが、夜中ごろに夫がくるりと向き直つて、肩い手工かけて、私の体を自分の方へ向け変えようとしますのんで、しられる通りにしながら眠つたふりしてますと、「ゆうべは僕もちよつといい過ぎた。

そやけどそれもお前を愛してる結果やということはお前も分つてる

やろ。僕は態度が無愛想やよつて冷淡なように見えるけど、心は冷淡と違うつもりや。僕に悪いとこあつたら出来るだけ改めるようにするさかい、お前も僕の意志尊重してんか。僕は決して外の事には干渉せん、ただあの光子いう児とは今後交際せんといてくれ。^{どうか}何卒それだけ約束してくれ。」「イヤや」と私は、眼工つぶつたまま強う首振りました。「それがイヤやつたら交際するだけは仕方ないよつて、あの児をこの部屋い入れたり、二人だけで何処やかし行かんようにしてくれ。そんでこいからは家出るにも帰るにも僕と一緒にすることにしてくれ。」「イヤや」と私はまた首振りました。「うち、自分のすること束縛されるのイヤやねん、絶対自由にしてほしいわ。」そういうて私は夫の方い背中向けて

しました。

その九

一旦破裂してしまったからにはもう恐いことあれへん。どないな
つたかて構うもんかと、反動的に一層光子さんが恋しなつて、明
くる日早速学校い飛んで行きますと、なんでやその日イ姿見えし
ません。電話かけると今日は京都の親類い行きなさつたいわれま
したのんで、なおのこと会いとう思うにつけても昨夜の喧嘩のこ
と胸一杯に込み上げて来て、夢中で手紙書いてしまったんですが、

出してしまってから、あんなこと書いて光子さんどない思うかしらん？ 姉ちゃんのハズさんに済まんさかいあて遠慮しようなあい出しなされへんか思て、急にまた気がかりになりました。ところがその明くる日、運動場のプラタナスの蔭に待つてますと、人目も構わんと「姉ちゃん」いいながら駆け^かけて来なさつて、「あて今朝あの手紙読んでなあ、姉ちゃんの顔見るまでは心配で心配で、……」と、両手で肩にぶら下るようにしなさつて、下からじつと私を見上げて、涙をためてなさるのんです。「ああ、光ちゃん、あんたかつて口惜しやろなあ、うちの人になんこといわれて：：」いうてるうちに私も涙をぼろぼろこぼして、「あんた氣イわるしてんのん違う？ そやつたら堪忍なあ、あてあんなこと書か

んといたらよかつてんけど」いいますと、「あてそんなこと、いうてんのん違う。自分のことやつたらどないいわれてもかめへんけど、姉ちゃんはハズさんにそないいわれたらきつとあてがイヤになれへん！」なあ姉ちゃん、きっと、きっと、イヤになれへんか？」「あほらしいもない、そんなんやつたら昨日もあんな手紙書いたり電話かけたりするかいな。あて、もうこうなつたらどんな事あつたかてあんたと別れるもんか。ぐずぐずいうたらあんな人ぐらい放ほり出してやるわ。」「姉ちゃん今はそういうてるけど、今にだんだんイヤになつて来て、やつぱりハズさんの方愛するのん違うかしらん？」夫婦いうたらみんな何處どこでもそういうもんやうよつて、……」「あてあんな人と夫婦やあれへん。あてはマ

ドモワゼルやもん。光ちゃんさい承知やつたら、もしもの時は二人で何処いでも逃げて行くわ。」「まあ、姉ちゃん！ それほんまかいな？ きっと、きっと、うそ違う？」「うそやないとも！ あてもうちやあんと覚悟してるわ。」「あてかつて覚悟してゐわ。姉ちゃんあてが死ぬいうたら一緒に死んでくれるなあ？」

「死ぬわ、死ぬわ、光ちゃんかつて死んでくれるなあ？」——そんな工合で二人の間はその喧嘩けんかがあつたためになおのこと深刻になりましたけど、夫は匙投げさじたんかそんなり何もいいませなんだのんで、こつちはいよいよ団に乗つて大胆になるばかりでした。「もう、うちの人あきらめてしまてるわ、ちよつとも遠慮みたいなんすることあれへん。」——私がそういうもんですよつて、光

子さんもだんだんずうずうしなりなさつて、二階にいる時夫が帰つて来ましても「姉ちゃん階下したへ行つたらイヤや」いうて、自分はもちろん私さえ階下さいおろそとしなされしません。どやすると晩の十時十一時頃までも遊んでなきつて、「姉ちゃん家い電話かけてほし」いうて、私からお母かあさんを電話口い呼び出して

「今夜は家で晩御飯をたべなきつて何時頃に帰りはりますよつて」と、その時分にお梅いう女子衆おなごしゆに自動車で迎いに来てもらいます。御飯も二階で二人だけでたべることもありましたけど、夫がひとり手持無沙汰てもちぶたさにしてますのんで、「どやのん、あんたもお相し伴ようばんしやはれへんか」いいますと、「ふん、してもええ」いうて三人でたべること多いでしたが、もうそんな時に光子さんは平

氣で「姉ちゃん姉ちゃん」いいます。私と話すとどうなると、夜夜
 中なかでも電話りんりんかかって来ます。「何んやのん、今時分?
 あんたまだ起きてんのん?」「姉ちゃんもう寝たん?——」「そ
 やかつて二時過ぎやないかいな。——睡ねむたいわア、あて、——え
 え気持ちで寝てたとこを——」「えらい済んまへんなあ、折角仲
 好うしてはつたとこを、——」「あんた、そんなこといいにわざ
 わざ電話かけたん?」「そらハズさんのある人はええやろけど、
 あてはひとりぼっちやよつて、淋しいて淋しいて何時になつたか
 つて寝られへんわ。」「しょうもない人やなあ。——だだ捏こねん
 と早寝なはれ、あした遊んだげるさかいなあ。」「あて、あした
 の朝起きがけに直ぐ姉ちゃんとこい行くさかい、ハズさんが遅う

まで寝てはつたら、早起してさつさと追い出してしもてエな。」

「ふん、よツしや、よツしや、——」「きつとやなあ?」「ふん、

ふん、分つてる、分つてる」いうて、そんなたわいないこと電話口で二、三十分もしやべつてます。手紙なども内証で遣り取りしてたのんだんだんおおびらになつて、光子さんから来ましたのん読みさしのまま机の上などい放り出しちります。——尤も夫は人の手紙を偷み読みするような人間と違いますよつて、それは安心してましたけど、そいでも前には読んでしもたら急いで箪笥の抽出しきい入れて鍵かけといったんですのんに。

そないにして、夫の方もいづれまた一と波瀾持ち上ること分つてましたが、さしあたり前より都合ようなつたくらいですよつて、

私はますますのぼせてしもて、情熱の奴隸となつてしまつたのんですが、その最中に、私に取つてまるきり寝耳に水の事が、——もうもうほんまに、夢にも思いがけなんだ事起つたのんです。そういうのんがちょうど六月の三日のことでした。おひる頃に光子さんが来なさつて、夕方五時ぐらいまで遊んで帰りなさつたあと、夫と二人で晩御飯たべてしまつたのん八時で、それから一時間ほどたつて、九時ちょっと過ぎた時分に、女子衆が、「大阪から奥様おくさまに電話かかつてます」いうのんで、「大阪の誰やねん?」いいますと、「誰ともいやれへんけど、大急ぎで電話口までいってはります」というのんです。「もしもししどなた様さんですか」といいますと、「姉ちゃん、あて——あてや」というのんが、光子さんより

外にそんないいようする人はないのんですけど、それが電話が遠いのんか、小声でいうてるのんか、聴き取れんぐらいかすかやのんで、何や誰ぞにわるさでもしられてるような氣イして、「あんた誰ですねん? はつきり名前いうて 頂ちよう 戴だい、何番い電話かけなさつたん?」と念押しますと、「あてやわ、姉ちゃん、あて西に宮しのみや」の一二三四番へかけてんねんわ」と家の電話番号をいう声が、聞いてるとやつぱり紛れものう光子さんで、「……あてなあ、今大阪の南の方にいるねんけど、えらい目に遭おうてしもて、……着物盗まれてしもてん。」「何なんやて、着物を?……あんた何なんしてたん?」「あてお風呂い這入はいつててん。……此処ここなあ、南地なんぢの料理屋で、内にお風呂あるよつて。……」「ふうん、なんでまたそ

んなどこい行てたん?」「そらいろいろ訳あるねんけど、……こ
 ないだから是非^{ぜひ}姉ちゃんに聞いてもらわんならん思ててんけど、
 ……ま、その話あとでゆつくりいうよつて、……あて今えらいえ
 らい難儀してよつて、……どうぞ助ける思て、あのさつき着て
 た揃^{そろ}いの着物なあ、あれ大急ぎで届けて欲しいねん。」「そんな
 らあんた、あれからずうツと大阪い廻つてたんか?」「ふん、そ
 やねん。」「あんたそこに誰といいるのん?」「そら姉ちゃんの知
 らん人やねん……あてどないしてもあの着物なかつたら今晚家い
 帰られへんよつて、どうぞどうぞ一生のお願いやさかい、あれ届
 けてもらわれへんかしらん?」——光子さんは泣き声出してなさ
 るのなんですが、私は私であんまり意外やつたんで、胸がわくわく

して、膝ひざ頭がしらまでガタガタふるえがきました。何処どこまで届けたらええのんかいりますと、南の太左衛門橋筋たざえもんばしじの、笠屋町かさやまちの井筒いづついう家やいいますねんけど、そんな料理屋聞いたことありません。そして着物の外に帯も、帶留も、帶上げも、幸いみんな揃いのものがあつたんで、それ持つて来てくれいうのんは分るのですが、けつたいなんは腰帶ясおどやぼてや、伊達卷だてまきや、足袋あしびまでも盗まれたいうのんで、「そんなら半襟はんえりは?」いいましたら、「襦袢じゆばんは助すけかつてん」いうのんです。誰ぞたしかな人に持たして、今から一時間以内、おそても十時までにいいますけど、うかツとした者頼む訳に行きませんし、どないしても私が自分で自動車飛ばすより仕様があれしません。「あてが行つてもかめへんか」といいますと、

誰ぞさつきからもう一人電話口に附き添うてるあんばいで、それがときどき光子さんに「こないせエ、かないせエ」と指図してらしくて、「いつそこないなつてしまふたら姉ちゃんが来てくれたかつてええし、……そうと違うかつたら、お梅が今頃梅田の駅で待つてはづやよつて、あれに渡してくれたかつてええけど、お梅は所知らんよつて頼むのんやつたらよう場所を教^おせてほし。そんでこつちの名は鈴木いうて訪^たンねて来てほし。」——そこまで何ぞこそこそ相談するらしいて、暫^{しばら}くたつてから、「あのなあ、姉ちゃん、……」と、えらいいいにくそうにして、「……あのう、えらい済まんけどなあ、も一人着物ないようにして困つてゐる人あるねんけど、もしどないぞなるねんやつたら、あんたのハズさん

の着物、洋服でも日本服でもかめへんよつてなあ、……」いうて、「それからあのう、えらいえらい勝手ばつかりいうて申訳ないねんけど、……おあし二十円か三十円持つて来てくれたらなおのこと有難いねんけどなあ」というのんです。「おあしの方はどないぞなるけど、まあとにかく待つてなはれ」というて電話切つてしまつてから、直ぐに自動車いいつけて、夫には「うちちよつと大阪まで行つて来ま。光子さんが急用やいやはるさかい」とたつたそれだけいうて、二階い上つて大急ぎで簾^{たんす}の中から揃^{そろ}いの着物や何やかんやと、夫が余所^{よそ}行きの時着る絹セルの单衣^{ひとえ}と羽織と絞り^{しほ}の三尺とを出して、風呂敷に包んで、それ女子衆に持たして先いそツと玄関まで出さしましたが、「なんやいな今時分からそんな包持つ

て?」と、さすがに夫は気になつたらしゆう、自動車い乗ろとす
る時に奥から出て来ていうのんでした。多分私の様子が慌てても
いましたし、顔色も変つてたですやろし、不斷着のまま髪も直さ
んと出て行ことするのんが、よつぽどけつたいやつたのんに違
ないのんで、「なんやうちにもさつぱり様子分れへんねんけど、

今夜急にこの揃いの着物なあ、——と、私は知つて風呂敷の結
び目から着物の端^{はし}_{しょと}出して見せて、「——これどないしても着んな
らんことが出来たんで、大阪の店まで届けてほしいうてやんねえ。
何ぞ素人芝居でも始まつたんかも分れへんけど、うち自動車待た
しどいて直ぐ帰つて来るわ」いうて、もう時刻もおそなつてしま
てまして、九時二十五分ごろでしたよつて、最初は真つ直ぐ南の

井筒いう家い行こ思て出たのんですが、それよりもまあ梅田い行
てお梅どん掴つかまいて見よ、お梅どんに聞いたら何ぞこの訳分るか
も知れへん思て、梅田の駅い行て見ますと、まん中の入り口のと
ころに立つて待ちどしそうにキヨロキヨロしてますよつて、車の
中から手招きして、「お梅どん」と、「やツ、奥様だしたん
かいな」とびっくりして照れくさそうにウロウロしてますのんを、
「あんた光ちゃん待つてんねんやろ。今えらい事件起つて、光ち
やんから大急ぎで迎いに来てくれいう電話あつてん、あんたも早
乗んなさい」というて、「えー、ほんまだつかいな」と何や腑ふに落
ちんらしゆうぐずぐずしてるのんを無理に乗せて走らしながら、
車の中で手短かにさつきの電話の話して「なあ、いつたい誰やの

ん、その一緒に行てる男いうのんは？　お梅どん知れへんのかいな？」——初めのうちは困つたような顔して、言葉に詰まつてしまつたけど、「あんた知らんいうはずないやろ？　こんなこと今日だけと違うやろ？　うちどんなことあつてもあんたに迷惑かかるようなことせえへんよつて、いうてくれたらお礼は何ぼでもするよつて、——」と、眼の前い十円札出して、紙に包んで、「いえ、いえ、いつもいつも貰もらてばっかりしてまんのんに」と辞退するのんを、「そんなこというてる間に時間立つてしまふやんかいな」と帶の間い押し込んでやりますと、「わたし、奥様と一緒にそんなとこい迎いに行てもよろしおまんねんやろか。あとでどうちやんに叱しかられしまへんやろか」いうのんです。「何でやのん？　う

ちが行けへんかつたらお梅どんに来てくれいうてやねんぐらいやもん。」「ほんまにそんな電話かかりましたんだつしやろか？わたし何やこう心配で、……」そういうのんが、何ぞ私の計略に乗せられへんか思てるらしいのんで、「そんなことあるもんかいな、電話懸らなんだらうち知つてるはずないやんか。」「そらそうでありますけど、わたし今までにちよつとも奥様氣イついてやおまへなんだのんが、なんでだつしやろ思て、空恐ろしいて仕方おまへんでしたのんで、……」「ふうん、そしたらいつからこんな事あつたん？」「いつからいまして、もう早からはよ……四月頃からでおましたやろか、それは私にもはつきり分れしめ工なんだが、……」「誰やのん、相手の人は？」「それもよう分れしめへんね

ん。いつもおあしくれはりまして、これで活動でも見て、何時頃梅田い来て待つてやいやはりますよって、何処い行きはりまんのんやさっぱり分らんと、こらきつと何処ぞで奥様と会うてはりまんねんやろ思てましてん。家いおそう帰りましても今日は今まで柿内さんとこで遊んでたようにいえいやはりまんのんで。⋮

その十

「そんなこと今までに何べんくらいあつた?」 「何べんいいまし

ても、とても勘定しきれしめ工ん。今日はお茶のお稽古や、今日は柿内さんとこやいやはりまして出かけはりまんのんで、そのつもりでお供して行きますと、あのなあ、あてちよつと用事あんねんいやはりまして、えらいそわそわしやはりまして、ひとりで何処ぞい行てしまやはりますねん。」「それほんまに違ひないなあ？」「何で私が謳^{うそ}いいまツしやろ。——奥様ちよつとも氣イおつきやあれしめ工なんだんでつか？ 何ぞ今までにけつたいやなあお思いになりやしたことあれしめ工んでしたか？」「そらもううちは阿呆^{あほ}やよつて、そない散々^{さんざん}利用しられて、道具に使われて、踏みつけにしられながら、今の今まで此處^{ここ}から先も氣イついたことあれへなんだ。それにしてもまあ何んちゅうことやろ。——」

「ほんまに、わたしとこのうちやん恐ろしい人だすよつてなあ。……私いつかて奥様の顔見るたんびにえらい済まんような氣いして、お氣の毒でお氣の毒で、——」と、心から同情したようになりますのんで、そんなお梅どんみたいなもん相手にしたかつてしまふむないのんですけど、あんまり口惜しくてお腹くわ_{なか}の中引つくりがえるようになつてましたよつて、何でも彼かれんでも思うたことをいう氣イになつて、「なあ、お梅どん、あんたかつて察してくれるやろ。うちそんなこと夢にも知らんと、こないだからうちの人と喧嘩してまで光ちゃんのために尽してるねん。うちかつてこないにまで上のぼつてえへなんだら、なんぼ脳味噌のうみそ足らんいうたかつて氣イついてたに違ひないわ。まあそれもええけど、今夜み

たいな電話かけて来るなんて、いったい何ちゅう氣イやろ？ 人馬鹿にするのんもほどがあるし。」「ほんまに何ちゅう氣イでいやはりまんねんやろなあ？ よつぽど困りはりましたん違いまツしやろか？」「なんぼ困つたいうたかつて、好きな男と料理屋に行てるやの^はお風呂い這入つたやのと、そんなこといえた義理かいな、あんたまあ考えてみて欲し！」「それもそうでおまツけど、着物盗まれてしまいはつたんでは、裸で帰りはることも出来しめへんしなあ。……」「うちやつたら裸で帰る。あんな恥知らずな電話かけるぐらいやつたら、裸で帰る。」「こんな時に泥坊に遇うなんぞ、悪いこと出来まへんもんだんなあ。」「やつぱり罰ばつちや。それもお金だけと違て、二人とも素ツ裸にしられてしも

て、腰帯から足袋までもないようになるなんぞ、……」「そうで
おま、そうでおま、罰でおまッせ。」「ああ、ああ、こんな事に
使つかお思て揃いの着物こしらえたん違うのんに、……うち何処まで
馬鹿にしられてるねんやろか。」「どうちやんはまた、今日あの
着物着て行きはつたいうのんはほんまに運が強つよおまんなあ。奥様
迎いに行つたげへん、どうなと勝手にせえおいやして構わんとお
置きやしたら、どないなりましたやろか?」「うちかつてよつぽ
どそないしたげよ思てんけど、最初はさつぱり何のこツちや様子
分れへんし、電話口で泣き声出してはあはあいうてやよつて、た
だもうびツくりしてしもてん。それになんば憎たらし思てもやつ
ぱり心から憎む氣イになれへんさかい、裸でふるてやる姿眼工の

前にチラついて、可哀かわいそうで可哀かわいそうでいても立つてもいられへんようになつて、……そらお梅あどん、ハタから見たら阿呆あほらしやろけど、そんなもんやし。」「そらなあ、そうでおまツしやろとも。……」「それにどうやら、自分のもんばつかりか男のもんまで持つて来いいうたり、電話口でこそ相談し合つたり、まるで人に見せつけるような真似まねシして、どんな顔してそんなこといえるのんやろか。人の前では『姉ちゃん姉ちゃん』いうて、『あて姉ちゃんより外に自分の肌見せたことない』いうてたくせに、二人裸にされてる恰好かつこ見てやりたいわ。」もうその時は無我夢中でいろんなことをしゃべつてましたよつて、何処を走つてたのんか分れしませなんだが、堺筋から清水町辺を西い曲つたらしくて、

向うに心斎橋筋の大丸^{だいまる}の灯^ひがちらちらしてたのん覚えてますけど、そこを大丸の前まで行かんと、太左衛門橋筋南い曲つた思うとこで、「ここ笠屋町ですが何処い着けます」と運転手がいいますよつて、「何処ぞこの辺に井筒いう料理屋あれへんかしらん?」いうて捜しましたけど分れしません。その辺の人にきいてみますと、「そら料理屋違いまツしやろ、宿屋でつせ」いうのんで、

「何処です」いいますと、「じつきこの先のろうじの奥だ。」

—それがあのう、宗右衛門町^{そううえもんちょう}や心斎橋筋のつい裏通りですのに、わりに人通りのない暗い横丁なんとして、芸者の館^{やかた}やの、小料理屋やの、宿屋やのが多いのんですが、そういう家がみんなしもたやのようにひつそりとした間口の狭い地味な構えなんです。

そこで教せられたろうじの入り口い行てみますと、「御旅館井筒」と小そうに書いた軒燈が出てますのんで、「お梅どん、あんた此処で待つてでわ」いうて私だけ這入つて行て、旅館いうても何や曖昧なややこしい家らしいのんがろうじの突きあたりにあるのんで、格子あけて暫くもじもじしてましたけど、台所の方で誰や一所懸命に電話かけてるらしいて、なんば呼んでも出て来えしません。「今晚は」「今晚は」と大きな声でいうてるうちにやつとのことで仲居さんが出て来てまして、顔見るなりこつちがなんにもいわん先にちゃんと心得てる様子で、「どうぞお上り」いうて狭い段梯子を二階い連れて行きまして、「迎いのお方はんがお越しになりました」いいながら座敷の襖開けるのんです。這入つ

てみますと三畳ぐらいな次の間やのんで、二十七、八の色の白い男の人がたつた一人、畏まつてすわつてまして、「失礼ですが、光子さんの友達の奥さんですか」いいますよつて、「そうです」いいますと、急にしゃちこ張つてぺたツと畳い頭擦りつけて、「今夜の事は何と申し上げたらよいか、お詫びのしようもないのんです。いずれこの事につきましては光子さんから申訳せんなりませんのんですが、何とも合わす顔ないいうておられますし、それに着物ありませんのんで、まことに申しかねますけどもとにかく着換え貸してもらって、その上でお目にかかりますよつていうのんです。その男いうのんが、いかにも光子さんの好きそうな輪郭の整うた女のような綺麗な人で、眉毛のうすいのんと眼の細いのんが

こす そうな感じ与えますけど、私かつて見た瞬間に「美男子やな
 あ」思たぐらいな顔だちで、この人も着物ないはずやのんに縞
 銘仙の单衣を着てキチンとしてましたのは、あとで聞きました
 のんですが宿の男衆の着物を一時借つてましたんやそ
 です。「着換えは此処い持つて来ました」というて風呂敷包渡しま
 すと、「大きに済みませんことです」と押し戴いただ
 取つて、部屋の隅の方の境の襖あけて奥の座敷い包押し込むと、
 急いでまたそこ締めてしもたのんで、ちらツと枕屏風が見え
 ただけでしたけど。……

その晩のことそんなふうに一々委しいにいいましたらえらい長
 になりますのんですが、私はその場合届けるもんは届けてしも
 うになりますのんですが、私はその場合届けるもんは届けてしも

たし、それに男がいるのんやつたら会うてもしようがない思て、
 お金三十円紙に包んで、「先イ帰りますよつてこれ光子さんに上
 げて下さい」いうたのんですが、「まあ何卒どうぞそないおいいになら
 んで待つて下さい、今に出て来られますから」というて、無理に
 その男が引き留めるのんです。そうして改まつて私の前いすわり
 直しながら、「実はこの事は、ほんまは光子さんから申さんなら
 んのんですが、僕は僕の立ち場として説明せんならん思いますの
 んで、一往いちおう聞いて下さいませんか」というて、——つまり光子さ
 んは自分でやといいにくいもんですよつて、着物着換えてる間に
 その男が代つて話するように、段取りがきまつてたらしいのんで
 す。そこでその男、——ああ、そうそう、男はその時「財布を取

せんば

られてしもたのんで名刺ありませんけれど、僕は船場の徳光さんの店の近所にあります。——綿貫栄次郎いうもんです」といいました。

せんば

——その綿貫いう男の話を聞いてみましたら、その人と光子さんは、まだ光子さんが船場の方に住んでなさる時分、去年の暮頃から愛し合うようになつて結婚の約束までしたというなんです。ところが今年の春になつてMの方との縁談が持ち上つて来て、とても二人は結婚出来そうにもないようになつたのですが、それが同性愛の噂うわさのためにええあんばいに破談になつた。——まあそういう意味のこというて、しかし決して自分たちは奥様を利用したんと違う、初めは利用したような形になつたけど、光子さんはだんだん奥様の情熱に動かされて、自分を愛するよりもつと熱烈に

奥様愛するようになつたよつて、自分がどれぐらい嫉妬感じ
たか分れへん、利用しられたとしたら自分がしられてるぐら
いやいうのんです。そこで自分はお目にかかるのんは始めてで
が、奥様のことはしょっちゅう光子さんから聞いてた。同じ恋愛
でも同性の愛と異性の愛とはまるきり性質違うよつて、奥様との
仲は許してもらわんと、自分との仲も続けて行く訳にいかんよう
に光子さんいいますのんで、自分も近頃は 諒解りょうかいしてた。「あ
ての姉ちゃんかつて夫あるねんもん、あてもあんたと結婚するこ
とはするけど、夫婦の愛は夫婦の愛、同性の愛は同性の愛やよつ
て、姉ちゃんのことは一生よう思い切らんさかいそのつもりでい
てて頂戴。それがイヤやつたら結婚せえへん」と、いつでも光子

さんはそないうてるいいまして、「そら光子さんの奥様に対す
る気持いうたら、全く真剣でしてなあ」いうたりして、大馬鹿に
してる思いましてんけど、その男のいいよういうたら実際上手で、
五分の隙すきもないようなんです。そこで男は自分と光子さんとの関
係をいつまでも私に隠しとくのんはええことない思て、自分も諒
解してねんよつて私にも諒解してもらうよう光子さんに話して
たのんですが、光子さんかつて勿論もちろんその方がええこと分つてな
がら、今更私の顔見ると切り出しにくくなつて「折があつたら折
があつたら」思てるうちに、とうとう今夜のようなこと出来てしま
た。そうしてさつきの電話では盗難に遇うたようにいうたけど、
実はただの盗難ではない。着物を取つたんは泥坊と違うて博奕ばくちゅう

打ちやいうのんです、それがだんだん聞いてみますと、ほんまに悪いことは出来でけへんもんで、その晩その宿屋の別の座敷で博奕してるもんあつて不意に手工が廻つたんやそうですが、刑事がどやどや踏み込んで来たのんで、二人はびっくりして夢中で部屋飛び出して、光子さんは長襦袢のまま、男は寝間着のまま、屋根から隣りの家い逃げて物干しの床の下いもぐり込んでた。博奕打つてた連中も我われさき先にバラバラ逃げ出して、大抵上手に逃げてしまたところが、その中に逃げおくれた夫婦者あつて、廊下をうろいろしてるうちに光子さんの部屋が開いてたのんで、そこい逃げ込んでみたら、ちょうど二人が抜け出たあとやつた。それでこれはしめた思て、今度はその夫婦もんが密会者みたいに装うてた。と

いうのんは、同じ刑事でも博奕打検挙するのんと密会者検挙するのんとは係りが違てるんやそうで、その人たちはそれを心得てたらしいのんです。けど刑事かつてそれぐらいなこと分つてますよつて、その夫婦もん怪しいと睨んで勾引したんやそうですが、その時枕もとの乱れ籠に入れてあつた光子さんと綿貫の着物着て、そのまま警察い連れて行かれた。なんでかいうと、夫婦は宿屋の浴衣を借つて博奕打つてたところいそういう騒ぎになつたのんで、自分らの着物は向うの部屋にありますねんけど、何処までも密会者で通そうとするのんで、枕もとにあるのん着て行かんならんかった。そこで光子さんたちはやつとのことで逃れたもののが戻つて来たら、着物がない、財布や手提げぐらいそつと置いと

いてくれたらええのんにそれもない、宿屋の主人まで挙げられて
しもてて誰に相談しようもないし、帰るにも帰られへんし、それ
にもう一つ心配なんは、光子さんの手提げの中には阪急の定期券
が這入つてましたし、男の方も名刺入れてあつたんで、警察から
家の方い電話かかつたらえらいこツちやいうのんで、どうにもこ
うにも思案に暮れて私呼び出しましたんです。で、どうせ此処ま
で来てくれるはる親切あるねんやつたら、奥様かつて光子さんのた
め思てくれるはるねんやろよつて、御迷惑でもこれから蘆屋まで光
子さん送つて行つたげて、今夜一緒に映画でも見てたようによ
て、万一警察から電話がかかつても、そこを何ぞうまいこという
といてくれなされへんかいうのんです。

その十一

「なあ奥様、今夜のことさぞかしお腹立ちですやろけど、どうぞ
どうぞお願ひします。」そういうて男はまたぺたツと畳い頭擦りこすり
つけて、「僕の一身はどないなつても構いません、どうぞ光子さ
んを無事に送つたげて下さい。御恩は一生忘れません」というてし
まいには手工合わして拝むんです。わたしいうたらそらもうほん
まにお人好しですよつて、そないしられてしもたら何ぼあんまり
や思ても「イヤや」という訳に行けしません。そいでも口惜くやしさが

一杯でしたよつて、暫くの間男がペコペコお辞儀するのんじいツと黙つて睨みつめてましたけど、どうど根負けしてしもて、たたた一と言「よろしいです」いうてしましました。すると男は「ああ」とさもさも感激の籠つたような芝居じみた声出して、もう一ぺん頭擦りつけて、「ああ、承知して下さいますか、ほんまに有がどござります、これで僕も安心です」いうて、それから人の顔色窺うように、「そしたら唯今こい光子さん呼びますけど、それについても一つお願ひして置きたいのんは、今夜のところはいろいろのことえらい興奮してはりますのんで、どうぞなんにもいわんといて欲しいんですが、どうですか、それ誓ちこてくれはりますか?」いうのんです。仕方ないのでそれもよろしいですといいます

と、直ぐに「光子さん」と呼んで、「もう分つてくれはりましたよつて出て来なさい」と襖越しに声かけました。その襖の向うでは最前こそそ着物着換えてるらしい物音がしてましたのに、もうその時分にはしーんと静まり返つてしまもてて、こっちの話に一所懸命耳を澄ましてるようでしたが、声かかつてから二、三分もたつた頃にやつと襖がごそついうて、そこが少しずつ、一寸二寸ぐらいずつ開いて、眼工の周り真っ紅いけに泣き脹らした光子さんが出てきました。

その時どんな顔してなさるか見てやりたい思たんですが、ちらツと視線打つかると慌てて俯向いて、男の蔭に寄り添うように音もささんとすわつてしまいなきつたんで、脹れ上つた眼瞼と、長

い睫毛まつげと、高く通つた鼻筋と、噛かみしめてなさる下唇したくちびるとが見えるだけで、両手をこういう風にこう、——八つ口のところの突つ込んで、体をねじらして、前のはだけたのも直さんと身イ投げ出したようにしてなさるんです。そこで私は光子さんのそうしてなさる姿眺めてるうちに、ああこの着物が揃いの着物やつてんなあ思うにつけても、それを拵こしらえた時分のことや、その着物着て一緒に写真撮とつたりした事が考え出されて、またジリジリ腹立つて来て、ええ、こんなもん、拵えんといたらよかつた、いつそ飛び着いてずたずたに引き裂いてやろか知らんと、——ほんまに男がい工へんかつたら、それぐらいなことしたかも分れしませんねん。男はその様子感づいたらしくて、二人がなんにもいわん先に「さ

あさあ」と追い立てるようにして、自分も着物着換えるやら、私からお金を受け取つて宿屋の方では「いりまへん」いうのん無理に勘定済ますやら、「あ、そういうと奥様、まことに恐れ入りますけど、今のうちに奥様のお宅と光子さんのお宅とい電話かけといて下さいますと、なお都合よろしいですがなあ」というたりして、ちよつとも隙^{すき}与えんようにするのんでした。私は私で家の方が心配でしたよつて、「うち今直^じツきに光子さん送つたげて帰るけどなあ、光子さんどこから別に何ともいうて来やはれへんかつたか?」と女子衆^{おなごしゆ}呼び出して聞いて見ますと、「はあ、さつき電話がおましたんで、どない申し上げてええのんか分れしまへなんだよつて、何時頃とも申し上げんと、ただお二人さんで大阪

い行つておいでです「うときました」 いうんです。 「そんで旦那はんもう寝やはつたか？」 「いいえ、まだ起きてはりまッせ。」 「今すぐ帰りますさかいいうといてんか」 いうて、光子さんの家の方へは「今夜松竹い行きましたんですけど、あんまりお腹減つてしまもたんで、出てからちよつと鶴屋食堂い行きましたん。えらいおそなりましたよつてこれから光子さん送つて行きます」 いいますと、お母様かあさんが出て来なさつて「まあ、そうでおまツか、あんまり帰りがおそいのでたつた今お宅様い電話したとこでしてんわ」 いいなさる様子が、警察からなんにもうて来て工へんこと確かでした。 そんでもそんならええ塩梅あんばいや、一刻も早自動車で帰ろいうことになつたんですが、男は三十円のうち半分ばつかり残

つたんをみんなそこの男衆や女子衆にやつてしまもて、どんな事あつても決して迷惑のかからんようにして欲しい、その筋からこれこういう取り調べがあつたらこれこういうようにいえいうたりして、そないな時にもそらもうびつくりするほど細かい所い氣イ廻るのんです。それからようよう、——私はそこい着きましたんが十時ちょっと過ぎた時分で、一時間ばっかりぐずぐずしてしまいましたよつて、出たんは十一時過ぎでしたやろう。その時やつとお梅どん待たしたあツたん思い出して、「お梅どんお梅どん」いうて、ろうじを往つたり来たりしてゐのんを車い乗せたのはよろしいが、「僕も其處まで送りましょそ_こう」いいながら、男も平氣でその車い乗り込んで附いて来るのんです。光子さんと私とが奥の

方い並んで、お梅どんと綿貫とがスペアシートい腰かけて、四人がもうツと向い合うたなり一と言も口をきかんと、車はどんどん走つて行きました。武庫の大橋いかかつたときに男が始めて、「どないします？」やつぱり電車で帰つたようにせんと工合わるい思いますか、……」と、ふつと考へついたようにいい出して、「なあ、光子さん、何処で自動車返したらええか知らん？」いうのんでした。それが光子さんの家いうのんは蘆屋川の停留所から川の西をもつと山の方い行つて、あそこに汐見桜いう名高い桜あるついその近所なんとして、電車筋からほんの五、六丁ですねんけど、途中に淋しい松原などあるのんと、よう追い剥ぎやの強姦やのがあつたりしてえらい物騒ですよつて、いツつも晩おそうかん

う帰るときにはお梅どんが附いてるときでも停留所の前から倆に乗つて行きますさかい、あそこまで自動車着けたらええいうたり、いや、そらいかん、倆屋が顔知つてゐるよつて何処ぞもつと手前方で降りた方がええいうたり、そんなことからお梅どんもぼつぼつものいい出しましたけど、それでも光子さんだけはやつぱり一と言もいいなさらんと、ときどきさし向いに腰かけてる綿貫の方をジーツと見つめては、何やひそひそ眼工で物言うて溜息ためいきしてなさるようなんです。すると男が「ふん、そんなら国道の業平なりひら

橋ばしのどこで降りたらよろしいがな」と、同じように光子さんの顔見返しながらそういう出したいうのんは、私にはよう分つてるのんですが、あの橋の所から阪急の線まで出る路がまたえらい淋とこう

しいて、片ツは側が大きな松のたあんと生えてる土手ですよつて、
 あんな所ところ女三人で歩けるはずあれしません。そんで綿貫はちよつ
 とでも長いこと光子さんと一緒にいてたいのんで、自動車降りて
 からあの路を送つて来たいのです。それにしても「船場の徳光さ
 んの近所にあります」いうてたのんにそんな橋の名アやあの辺の
 路知つてるいうのんは、もう今までに何遍も二人で此処ら辺へん散步
 したことがあるからなんです。私よつぽど「誰に見られても男の
 人が附いて来るのんが一番わるい、三人だけやつたらどないでも
 訳立つよつて、あんたええ加減に帰んなさい。私に預けるい
 うときながら、あんた帰つてくれはれへんねんやつたら私帰りま
 す」いうてやろか知らん思たんですが、お梅どんの方は「それが

よろしおまんなあ」「そうしまよなあ」と何でも彼でも綿貫のい
 うことに調子合わして、「そんならお気の毒ですけど、阪急のと
 こまで送つて戴けまツしやろか」と、知つて男の思う壺に嵌まつ
 行くのんです。考えてみるとお梅どんかつてやつぱり光子さん
 や綿貫とぐるになつてたん違ひないのんで、やがて橋のどこで車
 降りて土手の下の真つ暗な路いかかりましたら、「なあ奥様、こ
 んな闇夜に男の人いてくれはれしまへなんだら、恐うて歩かれ
 しまへんなあ」と、用もないのんに私掴つかまえて、こないだこの路
 で何処其処のとうちやんがこんな目工に遭いはつたいうような話
 休みなしにしかけて、なるだけあの二人より離れて歩くように
 するのんです。二人は五、六間うしろの方からまだ何や知らん相

談しながら来るらしいて、「ふん」とか「はあ」とかいう光子さんの声がかすかに聞てるのんでした。

停留所の前で男が帰つてしまい、また三人は黙り込んで、あそこから倅くるまで光子さんの家まで行きました。「まあ、まあ、ほんまに、何でこないにおおましてん」いいながらお母様が出て来なきつて、「いつもいつもお邪魔に上りまして御厄介になりますばつかりで」と、えらい私に氣の毒がつていろいろお礼いなさるのですが、こつちは私も光子さんもけつたいな顔してますのんで、長いことしゃべつてたらぼろ出る思て、自動車呼びましょいうてくれはりますのんを「いいえ、倅待たしてあります」と逃げるようになって、また阪急で夙川しゆくがわまで後戻りし

て、あそこからタクシーで香櫞園こうろえんまで帰つて来ましたら、ちょうど十二時になつてました。「お帰りやす」いうて玄関い出て来た女子衆に「旦那はんどないした？ もう寝やはつたか？」いいますと、「ついさつきンまで起きていやはりましたけど、もうちよつと前お休みになりはりました」といいますのんで、まあよかつた、なんにも知らんと寝てくれたらええ思いながら、出来るだけそうツとドーアあ開けて、忍び足で寝室はい這入つてみますと、寝台の傍のテーブルに白葡萄しろぶどうしゆの壇置いたあつて、夫は頭から布団とかぶ被つてすやすや寝てるらしいのんです。お酒には極く弱い方で、寝しなにそんなもん飲むいうことなんぞめつたにあれしませんのんに、きっと心配の余り寝られへんのんで飲んでんやな思て、静

かな寝息乱さんように恐る恐る横になりましたけど、なかなか寝られるどころやありません。考えれば考えるほど、口惜しさと腹立たしさとが何遍でも湧き上つて来て、胸の中が搔きむしられるようになります。ええ、もうほんまに、どないして復讐ふくしゅうしてやろか、どんな事あつてもきつとこの讐取かたきつてやる、と、思うと同時にかツとなつて、夢中でテーブルい手工伸ばしてグラスに半分ほど残つてた葡萄酒ぐうツと一と息に飲み乾ほしました。何しろその晩はさつきからの騒ぎでえらい疲れてましたところいさして、私がつて不斷ちよつとも飲んだことあれしませなんだよつて、見てる間に酔い廻つて来て、——それもええ心持にぼうツとなるのんと違ちがて、頭が破れるようにがんがんして、胸のあたりがむかつ

いて来て、体じゅうの血イ一遍に髪の方い上つて来るような
 気イするのんで、はあはあ苦しい息吐きながら、「ようもようも
 みんなで大馬鹿にして、今にどうするか見てたらええ」と、口い
 出していわんばっかりに一途にそのこと考え方つめますと、激し
 い動悸どうきが、樽たるの口から酒さけがこぼれるような音立ててどきんどきん
 鳴つてますのんが自分にもちやんと分るのですが、気イついて
 みますといつの間にやら夫の胸も同じようにどきんどきんいう音
 立てて、はあはあ熱い息吐いて、互の呼吸と動悸とが一緒に時を
 刻みながらだんだん強うなつて行つて、二人の心臓が一時に破裂
 せ工へんか知らんと思われた途端に、いきなり私は夫の腕でぎゅ
 うツと抱きしめられました。次の瞬間に夫のはあはあいう息が一

層近よつて、燃えるような唇が耳たぶに触れて、「お前、よう帰つて来てくれたなあ」——と、そないいわれたはすみに、どうした加減か急に涙がこみ上げて来て、「くやしいツー」と、身イふるわして泣きながら、今度はこつちからしがみ着いて、「くやしいツ、くやしいツ、くやしいツ」と、夫の体搔きむしるよう^かに揺^ゆさ振りました。「何や、何でそない口惜しい?」夫は出来るだけ優しいに、「え? 何が口惜しいのかいうてみい、泣いてたら分れへんがな、え? どないしてん?」いうて手のひらで涙拭^ふいてくれて、なだめたり、すかしたりしてくれますので、なお悲しゆうなつて、あーあ、やつぱり夫は有難い、自分は罰^{ばちあた}中^{すが}つたんや、もうもうあんな人のこと思い切つて、一生この人の愛に縋^{すが}ろう、

——と、一途に後悔の念湧いて、「うち今夜のことみんないうてしまうさかい、きっと堪忍しくなはれなあ」と、どうぞ夫に今までのことすつかり話してしました。

その十二

私はすっかり心入れかえた氣イになつて、明くる朝は夫より二時間も早起きて、台所い出て行つて朝御飯の用意したり、夫の洋服ちゃんとしどり、いつもほつたらかしたまま女子衆まかせにしどきますのんを、自分が先い立つてせつせと働きました。

「お前、今日は学校い行けへんのか」と、夫は出かける時間になつて鏡の前でネクタイを締めながらいいましたけど、「うち、もう学校は止めよ思おもてんねん」いうて、うしろから上衣うわぎ着せたげて、そのままそこに、脱ぬぎ棄すてた着物たとみながらすわつてました。

「なんでやねん、学校止めんでもええやないか?」「あんな学校行つたかつてしようむない。……会いともない人と顔合わすのんイヤやしなあ。……」「ふん、そうか、そんなんやつたら止めてもええなあ」と、夫は感謝の籠こもつた眼つきでそういうたもんの、またなんや知らん物足らんような、気の毒かづこな恰好で、「そやけど、なんにもあんな学校に限つたことあれへん、絵工習いたかつたら研究所いでも行つたらどやねん? 僕かつて毎朝一緒に出

かけた方がええしなあ」 いうてくれますねん。 そんでも「うちも
 うどつこも出とないわ、何処行たかてどうせ口クなこと覚えへん
 ねよつて」 いうて、自分ではその日から一廉ひとかどのハウスワイフに
 なつたつもりで、一日家の中で一所懸命仕事しました。夫の腹の
 中いいましたら、あないに我わが儘ままやつた私がまるで生れ変つたみ
 たいに態度改めましたのが、どない嬉しいか分れしません。い
 うてまた、二人で仲好う大阪かよい通せんとてた先度せんどごろの生活を取り返し
 てみたいような気イもしますねん。そら私かつてちよつとでも余
 計夫の傍に引つ着いてたい、離れたらその間に邪念妄想が起る、
 夫の顔さい見てたらあの人のこと忘れられるやろ思いますよつて、
 一緒に着いて行きたいですけど、いや、そやない、もしひよつと

して途みちであの人と会うたりしたら？……もうそんなことあつたか
 て物い工へん氣イやけど、そんでもばつたり顔見合わしたらうち
 どうするやろ？ 青なつて、ぶるぶる顛ふるて、一と足も出んようになつて、門かどで倒れてしまふかも分れへん思いましたら、外い出る
 のが恐こおうて、大阪どころやあれしません、つい電車路ぐらいまで
 行きましたかて、そやない人の影見てもはつと襲われたみたいに、
 慌あわてて家い飛んで逃げて、どきどきする胸おさえながら、いかん、
 いかん、ちよつとでも出たらいかん、ここ暫しばらくは死んだ氣イにな
 つてすツ込んでよ、水仕事ふでも拭ふき掃除そうじでも何でも構わんと精一
 杯たんす働いてよと、自分で自分にいうて聞かすのんです。あの簾筈ひきだの
 抽出しにしもてある手紙なんぞ焼いてしまお、それより一番さき

観音さんの絵工の方どないぞしてしまおと、それも私には毎日ぐらい氣イになつて、今日こそ焼こ、今日こそ焼こと、簾筈の傍まで行きますけど、手工取つてみたら中が見となるやろなあ思たら、やつぱり恐うてよう開けませんねん。一日じゅうそないして暮らして、ゆうがた夫帰つて来ますと、「ほんまによかつた」とほつと重荷イおろします。「うちこのごろ朝から晩まであんたのことばっかり思い詰めてて、ほかの事なんにも考工へんようにしてんねよつて、あんたかつてきつとそうしててくれるわなあ」と、私はぎゅッと頸くびのまわりに抱きついて、「うちの心にちよつとの隙すきも出来んように、いツつも、いツつも、可愛がりつづけに可愛がつてくれなイヤやわ」と、今では夫の愛情だけがたつた一つの頬

りでした。「もつと可愛がつて、もつと可愛がつて……」と、私のいうのんはそればっかりでした。或る晩なんぞは、「まだ愛しかたが足らん」と、夫はなだめるようにいうて、「お前は極端から極端やなあ」と、夫はなだめるようにいうて、私のあんまりな上せかたに今度はかいつて面喰めんくろてるぐらいでした。

もしもその時分にひよっこりあの人たずが訪ねて来たら、否いやでも応でも物いわんならんようなハメになるよつて、それが何より気がかりやつたんですけど、なんぼ厚かましいいうてもさすがよう寄り附かんかして、ええあんばいにあんなり何もいうて来けえしません。私は心のうちに神様や仏様祈つて、結局運命がそんな工合ぐあいに

なつたのんを有難いことや思いました。ほんまに、あの晩のよう
 な出来事でもなかつたら、なかなかこない綺麗さっぱりと切れる
 いう訳に行けしませんのに、これも神様の 思召おぼしめし やろ、口惜し
 いことも悲しいことも済んでしもたことはみんな夢とあきらめよ
 と、ようよう幾分か落ち着いてきましたのんは、あれから半月も
 立つた六月の下旬ごろのことで、——去年の夏は空入梅からつけ でしたよ
 つて、毎日々々日照りがつづいて、家の前の海岸に泳ぎに来る人
 がちよいちよい見えました。夫はいつも暇ですのんに、その時分
 珍しい頼まれた事件あつて、もうちよつとしたら手工抜けるさか
 い、そしたら何処ぞ避暑になと行こいうたりしてましたが、或る
 日私が台所で桜ん坊のジエリー拵こしらえてる時でした、「大阪のSK

病院から奥様おくさんに電話だす」いいますのんで、虫が知らしたのんか、何やけつたに思ひながら、「誰ぞ入院してんねやろ、も一ぺん聴いてみなはれ」いいますと、「いえ違います、病院が直接奥様に話したいいうたはります、男の人の声みたいだす」いうことで、「ふん、おかしいなあ」いうて電話口い出る時から、何でか知らん胸騒ぎして受話器を持つ手工妙に顫ふるてるのんです。彼方あっちでは「あんたは奥様ですか」と二へんも三べんも念押してから俄にわかに低い声になつて、「突然甚はなはだ失礼ですが、あんたさんは英語の避妊法の本を中川さんの奥様にお貸しになつたことがありますか」とけつたいなこと尋たねます。「はあ、その本は私たしかに或る人に貸しましたけど、中川さんの奥様いう方はよう知りません。

多分私から借つた人が又貸したんやろ思います。」そないいうと直ぐ、「はあ、はあ」と向ではうなずいて、「奥様がお貸しになつたのは徳光光子さんでしような?」いうのんです。私実はもう最前から予期してたもの、その名アいわれた瞬間に何や電気みたいなものが体じゅうビリビリ伝わるような氣イしました。

はあ、その本といいますのは、一と月ほど前光子さんに貸しましたのんで、光子さんのお友達の中川さんの奥様いう人が子供生むのんイヤやイヤやいうてはるいうような話から、「姉ちゃんはきつと巧い方法を実行してんねんやろなあ」いいますよつて、

「ほんまいうたら、あてええ本持つてんねん。亜米利加(アメリカ)出版しやはつた本で、それ見たらそらもう何ぼ通りでも書いたあるわ」

いうて、その時貸したげたまま忘れてしもてたんだした。ところが病院ではその本のことから或る重大な結果起つてえらい迷惑している。電話ではそれ以上申し上げること出来んが、そのことについて中に挟まつた徳光さんのお嬢様もいろいろと心配してはりまして、どうしても一ぺん奥様にお目にかかるて秘密に相談せんならん思て、こないだから何遍でも手紙差し上げたそうですが、奥様の方から何とも返事してくれはらんいうて難儀してはる。そんでこの場合、是非とも徳光さんに会うてみて下さい。病院の者が直かに伺うては面白おもしろない事情がある。病院は表面そ知らん体にして徳光さんと会うてくれはるのが一番よろしい。万一会うて下さらんと、病院はこの事件について奥様の方いどんな迷惑がかか

つても一切責任負うこと出来んというのんです。私はそれも光子さんや綿貫の仕組んだ計略で、なんぞまた人欺すのんやないかと半信半疑でしたけど、何せその時分は堕胎事件だたいじけんがやかましいて、何々博士が掴つかまえられた、何々病院がやられたと、ようそんな記事が新聞に出ましてん。そこで前にもいうたようにその本の中には薬剤に依る方法やら、器具に依る方法やら、法律に触れるようなことまでたあんと書いたあるのんとして、中川の奥様いう人は何ぞへまなことしてえらい間違まちがい引き起して、しろとの手工で收まり付かんようなつたんで病院かい担かつぎ込まれたん違うやろかと、想像されるなんです。それに私は、光子さんから手紙が来てもきつと私に見せたらいかん、みんな焼いてしもてくれいうて、女子おなごし

衆^ゆにいっけてありましたもんてツさかい、そんな事件が起つてようとは今日までちよつとも知りませなんだ。病院の方ではえらい急いてて、どうしても今日じゅうに会うてもらわなかんないます。電話で夫に相談しましたら、「そういうこツちやつたら会わんいう訳に行かんやろ」と、夫もいます。それでとうとう承知した旨答えますと、これから直ぐに伺うように病院から光子さんの方い知らすいうことになつたのんです。

その十三

ところがその電話のありましたのが二時頃のことで、それから三十分もした時分にもう光子さんが来やはりましてん。私はまた、なんぼ病院が急いでたかて、いつとも出る時には一時間も二時間も寝しやはるよつて、どないしても來るのは夕方か晚ぐらいになるやろ、まさかこないに早いとは思いもよりませなんだのに、門のベルがジイジイ鳴つて、上り口のコンクリの上踏む草履の音が、……玄関から奥の間まですっかり開け切つてありましたよつてすうツと表から吹き込んで来る風と一緒に、なつかしい香が廊下伝て来ますねん。あいにく夫はまだ帰つて来てませんし、立ち上つたまま何処ぞ逃げ道でも搜すみたいにうろうろしてますと、取次に出た女子衆がバタバタ走つて来て、「奥様！」 奥様

！」いうたなり顔の色変えてるのんで、「分つて、分つて、
 光子さんやろ」いいながら自分で玄関い出て行ことして、「あの、
 ちよつと、ちよつと、……」と誰を呼ぶのか分らんこといいなが
 ら、「あの、……ちよつと待つとくなはれいうて、下の八畳い通
 しといて」といい附けといて、二階い上つて寝室のベッドの上で
 暫く動悸のしずまるのん待つてから、やつと起き上つて、顔色隠
 すために頬紅ほおべに少し濃いめにつけて、白葡萄酒一杯飲んで、思い
 切つて降りて行きましてん。

わたしは仕切りの簾すだれの向うに派手な模様がチラチラして、ハン
 カチで汗をおさえながらすわつてはるらしい姿見ると、もうまた
 胸がどきんどきんいうて来ましたが、光子さんの方でも簾越しに

こつち見てなさつて、這入つて行くのん待ち構えたように、「今日は」いうてニコニコ笑いなさるのんです。「あて、姉ちゃんにあんまり御無沙汰してしもて、悪いとは思ててんけど、あれからあとにいろいろな事あつたりして、……それに姉ちゃんあの晩の事どない思てはるねんやろ、きつと腹立ててはれへんやろか思たら、つい鬪しきいが高たこなつてしまて、……」と、遠慮しいしいこつちの顔色うかごうてはそないいなさるのんが、やつぱり馴なれ馴なれしい昔の口調で、「なあ、姉ちゃん、あんた今でも怒つてなはんの？」と、私の眼工の中を覗のぞき込みなさるのんです。私は無理に「徳光さん」と改まつて呼びかけて、「今日はそんなお話するつもりでお目にかかるたんと違います」いうてやりましてん。「そ

うかて姉ちゃんがあの時のことと堪忍したげるいうてくれへなんだ
 ら、あてかて話出来でけへんもん。」「いいえ、いいえ、私は中川の
 奥さんのことについてSK病院から頼されましたさかい、そのこ
 とだけ聞くように夫の許し得たあるのんです。そやよつてに何卒どうぞ
 その外の話はせんといて頂戴。それからあのう、先度のことはみ
 んな自分が阿呆あほだしてんよつて、誰恨んだり怒つたりすることあ
 れしませんけど、あんたも今更わたしのこと『姉ちゃん』やなん
 ていわんといて頂戴。そうでないと、私ここにいられへんようにな
 なりますさかい。……」、そないにいうと今度はさすがに萎れ返しお
 つて、うつむいたまま繩なわのように捻じくつたハンカチをぐるぐる
 指に巻きつけながら、思わせぶりに涙ぐむような風して見せて、

そんなり物をいいなされしませんねん。「あんたかつて、めつたにそんな話しに来たんと違いますやろ? さあ、用件の方聞かして頂戴。^{はなし}」「あて、姉ちゃんにそないいわれたら、……」と、やつぱり光子さんは「姉ちゃん」という言葉使て、「……いいたいことも胸につかえてしもてちょっと出工へんねんけど、ほんまいうたら、さつきのあの電話のことなあ?……あれほんまは、中川の奥様と違いまんねん。」「ふーん、そんなら誰のことですねん?」——その時光子さんは眼工と眼工の間に皺^{しわ}を寄せてくすツとけつたいな笑いようをしたと思たら、「あてのことやわ」というのんです。「そしたら、病院に入院してるいうのんは、あんたの事だつか?」——まあ、この人は、……何処まで厚かましいねんや

ろ！ 自分が綿貫の種宿たねしてどうにも始末に困つたのんで、またしてもうちを利用しに来るとは！ さんざん人に苦水にがみず飲ましときながらまだ足らんのか。——私は体じゅうが顫ふるて来るのんじつと押し鎮しずめて出来るだけ空そらとほ惚うなづけて聞いてやりました。「ふん、そやねんわ」と、光子さんは頷うなづいといてから、「入院さしてほしいうてるねんけど、入院さす訳に行かんいわれてんわ」と、なんや棲目つまめの合わんこというて、それからぼつぼつ話し出すのん聞いてみますと、あの私から借つた英語の本見て幾通りもの方法やつてみたところが孰れもあんじょう行かんらしいので、ぐずぐずしてたら人目につくようになつて来るし、気が気でのうて、綿貫の知つてゐる人に道修町どしううまちの薬屋の番頭ばんとさんあるのん幸い、その本

に書いたある処方に従うて、薬をもろて飲んだんやそうです。^{もつと}も番頭さんには事情を明かしたんやのうて、ただ必要な薬品だけもろて、それをええ加減に調合したのんで、間違うてたんかどうか、よんべ俄かにお腹痛^{にわなか}なり出して、お医者さん呼んでる間にえらい出血した。そんでお医者さんに訳話して、どうぞ家の者に内証でどないぞして欲しいいうてお梅どんと二人で頼みますと、出入りのお医者さんでんねけど、「難儀ですなあ」いうてためいきつくばつかりで、「これはどうも私には困ります。きっと手術して出さんといかんでしょうが、何処ぞ専門の病院で心やすい所があつたらそこい行つて相談して御覧。私は応急の手あてだけしどきます」いうて体^てよう逃げてしまふたのんで、SK病院やつたら院

長さん知つてゐるからどないなとしてくれはるやろ思て、今朝になつてから出かけて行つて診察してもらたら、そこでも同じこというてなかなか聴いてくれはれへん。なんでもそこの院長さんいうのんは今の病院建てる時に徳光さんのお父さんからお金出してもらやはつたんやそうで、光子さんとお梅どんとで手工合わすようにして頼むと、「弱りましたなあ、弱りましたなあ」というて、

「前やつたらこんなぐらいのことは何処の医者でも引き受けたのんですが、御承知の通りこの頃は世間がやかましいのんで迂闊なことすると私一人やない、お宅の不名誉になるような事起らんとも限らんのんで、そうなつたらお父様とうさんに対して申訳ありません。それにしても何で今まで放つといたんです、こないならんうちや

つたら、——せめて一ヶ月も前やつたらどないなとしたげたのに」
 いうのんですけど、そないしてあるあいだも時々お腹痛なかとなつて出血
 するのんで、ここで何ぞの事でもあつたら病院に嫌疑けんぎがかかりま
 すし、そうかで苦しんでるもんを黙つて見てるいう訳に行かんし、
 「いつたい誰に教おせてもらてどんな薬飲んだんかいうて下さい。

それ聞いたかて出来るだけ秘密にはしありますけど、万一問題にな
 つた場合にその人が証人にさいなつてくれたら手術したげる」
 いうもんですさかい、私から本借つてこうこうしたいこと話し
 て、私がいツつもその本の方法実行して目的達してるものですか
 ら、自分もあんじよう行くやろと思たいうようなことしやべつて
 しもた。そしたら院長さん暫しばらく考えてて、こないな事はお医者さ

んやのうても、経験のあるしろとの方がかいつて手軽うに埒^{らち}ようやれる、西洋の女やらはこないこないして、人の手工借らんと自分で始末してしまうのんが常識みたいになつてゐるさかい、私が熟練してゐるのんならいつそ私にしてもらたらええのやけどいうたりして、とにかく事件がむずかしなつても私が責任負うてくれたら手術したげる、それがイヤやつたら本貸したのんが災難やと思ってどないぞしてくれたらどやろ。お医者さんと^{ちご}違て私やつたら知れる心配も少いし、知れたどこで大した問題になれへんやろ。――

そないいわれたんやと、まあ光子さんはいうのんです。「なあ姉ちゃん、あて姉ちゃんにそんなことしてもらおとは思てエへんけど、こんなりにしといたら時々痛み出してたまらんし、恐い病氣

になつたりすることもあるいわれたのんで、姉ちゃんが責任負う
いうてくれたら手術してもらえるのんやけど、……」「責任負う
いうたかつて、どないしたらええのん?」と聞いてみましたら、
病院い行て、院長さんの前で誰ぞ第三者に立ち会うてもろて約束
するか、そうでないのんなら後日のためにちよつと一と筆書いて
欲しいいうのんですが、そんなことうつかり出来しませんし、そ
れに光子さんのいうことが何処までほんまか、よんべ出血したい
う病人が別に寝やつれたふうものうて出歩いてるのんもおかしいし、
さつきの電話は病院で医局の人にかけてもらたいのんですけど、
そんな人が中川の奥様の名ア騙かたるはずもなし、何ぞまた訳でもあ
るような氣イしてめつたなこといわれへん思てるうちに、「ああ

痛いた……また痛なつて來た」いうてお腹なかすり出しなさつたのんです。

その十四

「どないしなはつてん？」いうてるうちに見る見る顔が青なつて来て、「姉ちゃん、姉ちゃん、早便所い連れて工な」いいなさるのんで、どないな事になるのやらこつちも慌あわてて、畳の上這い廻るようにしてはるのん抱き起すと、はあはあいいながら肩に凭りかかつて歩きやはるのんがやつとですねん。私は便所の外に立つ

て、「どうだんねん、どうだんねん」いうてましたが、呻りごえが段々しんどそうになつて、「うーん、くるしいッ、姉ちゃん！」姉ちゃん！」いいますよつて、夢中で中の駆け込んで、「しつかりしなはれ！しつかりしなはれ！」と、肩撫^なでたげて、「なんぞ下り物^{もん}でもしたんかいな」と、黙つて首振つて、「あて、もう死ぬ、死ぬ、……助けてほしい」と、ほんまに消えてしまいそうな虫の息で、「姉ちゃん、……」と一と声大きく呼びながら、両手で私の手頸^{てくび}にしがみ着きますねん。「こんなぐらいたいで何で死んだりするかいな、光ちゃん、光ちゃん」いうて力つけたげても、もう眼工見えんようにどろんとなつた瞳^{ひとみ}上げて、「姉ちゃんあて堪忍してくれるわなあ。あてこないして姉ちゃんの傍^{そば}

で死ぬのんやつたら本望やけど、……と、そないにいうのんが
 ちよつとぐらい狂言としたかつて、握つてる手工次第に冷めとな
 つて来るような氣イしますし、そうかて「お医者はん呼んだげよ
 か」 いうても「姉ちゃんに迷惑かかるよつて呼んだらいかん、死
 ぬのんやつたらこんなり死なして」 いいますし、……孰方道そ
 んなりにしどかれしませんので、女子衆おなごしゆに手ツ伝とてもろて二階
 の寝室に運びましてん。なんせ、咄嗟とっさの場合ですよつて布団敷い
 てる間まアもあれしませんし、寝室い入れるのんはどや知らん思た
 んですけど、下はみんな見透みとおされる夏座敷ですし、しょことなし
 にそないしたのんですが、ようよう寝台い臥ねさしてしもてから、
 直きに夫とお梅どんとこい電話かけに行ことしますと、「姉ちゃ

ん何処どこも行つたらいかん」いうて、袂たもとをぎゅッと握つたままちよつとの間も放しなされしません。尤もそないしてるうちに幾分か落ち着いて来たらしゅう、もうさつきのように苦しがらんようになりはつたのんで、まあこの分ならお医者はん呼ばいでもよかつた思うと、その時だけはほんまにほつとして助かつたような氣たいイしましてん。

そんな工合で私は傍離れること出来しませんよつて、「お便所汚よごれてるさかい直ぐ掃除そうじし」といて」いうて女子衆下いやつてしまから、何ぞ薬でも思いましてんけど、「いらん、いらん」と、イヤイヤしなさつて、「姉ちゃん帶ゆるめて工な」いいなさるのんで、帶ほどいたげたり、血イの附いた足袋たび脱がしたげたり、ア

ルコールと脱脂綿持つて来て手工や足拭いたげたりしましたのんですが、そのうちにまた発作起つて、「くるしいツ、くるしいツ、水、水、……」いいながらシーツや枕手あたり次第に搔きむつて、体を蝦のように曲げて悶えなさるのんです。私はコップに水酌んで来て、えらい暴れてて飲ませんのんを無理におさえつけながら口移しに飲ましたげると、おいしそうに喉をぐいぐいいわしながら、飲んでしまうとまた、「くるしい、くるしい」というて、「姉ちゃん、後生やよつてにあての背中の上い載つてぎゅッと押して工な」いうたり、何処を揉んでほしい、彼処を撫でてほしいいうのんで、いわれる通り揉んだりさすったりするんですけど、ちよつと直つたか思うとまた直ぐ「痛い、痛い」い

うて、なかなか治まりそうもあれしません。そこで暫くでも楽になつたあいだには、「ああ、ああ、こんな苦しい目工に遇うのもみんな姉ちゃんの罰^{ばち}やなあ。……これで死んだら姉ちゃんかつてもう堪忍してくれるか知らん」と、独りごとのようにいうてさめざめ涙流すのんです。そいからまたしても痛^{いと}なり出して、今度は前よりもつと苦しそうにのた打ち廻つて、何や血の塊^{かたまり}みたいなもんが出たらしいいうたりするのですが、何遍も何遍も「出た、出た」いうたんびに調べてみたかて、ちよつともそないな気工あれしません。「神経でそんな氣イするねんわ、なんにも出てへんやないかいな。」「出くれへなんだらあてもう死ぬわ。姉ちゃんはあてが死んだらええ思てんねんやろなあ。」「なんでそんな

こというのん?」 「そうかて、あてにこんな地獄みたいな苦しみ
 さしとかんと、早^{はよ}楽にしてくれたらええのに、——姉ちゃんやつ
 たらお医者はんよりよう知つてるくせに、……」 そないい出し
 たいうのんは、いつや私が「ほんちよつとした器具さいあつたら
 何でもない」 いうたことあつたよつてですけど、もう私にはさつ
 きの「出る出る」 いう騒ぎの時分から、今日のことがみんな狂言
 やいうことが分つてましたので、……ほんまいうたら、実はそ
 の前からだんだん氣イ付いて来てながら、知つて欺^{だま}されてたのん
 で、光子さんかて私が欺されてる振りしてるのん見抜いてながら、
 何処までもずうずうしゅう芝居してはりましてん。そんで、そい
 から先はお互^{あざむ}が自分で自分欺^{あざむ}き合^ううて、……もうそんなこと、先

生はよう分つてはりますやろけど、結局私は、見す見す光子さん
 の仕掛けた罠わない自分を落し込んでしまいましたん。……はあ、そ
 の赤いのんは何を使つこたのんか聞かんとしましたんで、今でも
 ときどき不思議に思いますのんですが、何ぞ芝居に使う血糊ちのりのよ
 うなもん隠しといたのんと違いますやろか。……「姉ちゃん、そ
 んならもうこないだのことちよつとも怒つてへんわなあ、きつと
 堪忍してくれるわなあ？」「今度こそ欺したらあてあんたを殺し
 てやるわ。」「あてかてさつきみたいな薄情なことしられたんや
 つたら、生かしとけへん。」——ほん一時間ぐらいのあいだにす
 つくり元の馴なれ馴れしさに戻つてしましましたのんですが、そ
 なると私は、急に夫の帰つて来るのが恐こおうなつて来てましてん。一

旦ああいう訳になつたのんが、よりが戻つてみましたら、その恋しさは前より増して、もうちよつとの間も離れとないのんに、さしあたり、これから先、どないしたら毎日会えるねんやろか。

「ああ、ああ、どないしよう。光ちゃん明日も来てくれるわなあ？」
 「此処の家い来てもええの？」
 「ええか、わるいか、もうそんなことあてに分らん。」「そんなら一緒に大阪い行けへん？

明日姉ちゃんのええ頃に電話かけるわ。」「あての方からも電話かけるわ。」そないいうてる間に直^じツきに夕方になつてしまつたのんで、「今日はもう帰るわなあ、ハズさんが戻つて来やはるさかい、……」と、身支度しようとしなさるのんを、「もうちよつと、もうちよつと」と、身支度しようとしなさるのんを、「まあ、や

んちゃツ児やなあ、そんな分らんこというたらいかん、明日きつと知らしたげるさかい大人おとなしいして待つてなはれや」と、今ではあべこべに私の方がたしなめられて、五時頃に帰つて行きやはりますてん。

夫はその時分大概帰りが六時頃でしたけど、その日イはいくらか心配して早帰はよるか知らん思てましたのに、やつぱりこないだじゅうからの事件が引き続いてると見えて、そいから一時間ぐら立つてもまだ帰つてけえしません。私はそのあいだに部屋片附けたり、寝台きれいに直したりして、床の上に落おつてた光子さんの足袋ひろ捨て、——帰りしなに光子さんは私の足袋穿いて行きなさつたのんです。——そのしみの痕あとみ視つめながら、まだ何や知らん夢

みてるみたいにぼんやりしてましてん。夫にどないい訳しよう。
 この部屋使(つか)たこといおか知らん。いわんとこか知らん。どないい
 うといたらこれから先会うのんに都合えか知らん。……と、そ
 んなこと考えてたら、俄かに(にわ)「帰りはりましたで」と下から知ら
 しますのんで、足袋簞笥(たんす)の抽出し(ひきだ)しもて降りて行きますと、

「どうしたんや、さつきの電話のことは？」と、出会いがしらに
 すぐそないいうのんです。「うちほんまに難儀したわ。あんた何
 でもつと早帰(はよ)つて来てくれへなんだん?」「僕かてそう思てたん
 やけど、生憎(あいにく)と用が片附かなんだのんで、……一体どないした
 いうのんや?」「何でも彼でも直き病院まで来てくれいうねんけ
 ど、そななことしてええか悪いか分れへんし、とにかく明日まで

待つとくなはれいうたんやけど、……」「そんで光子さん行にやはつたんか。」「明日是非一緒に行つてくれいうて帰りはりましてん。」「お前があんな本貸すよつて悪いのやないかいな。」

「誰にも見せへんいやはつたよつてに貸したげたんやけど、ほんまにうち、えらい事してしもたわ。まあ何にしても明日見舞いに行てこう、中川の奥様から満更知らん仲と違うし、……」私はそないいうて、何は放つといても早速明日の口実を拵えましてん。

その十五

その晩わたしは夜の明けるのん待ちどして、八時に夫が出かけてしもたら、飛び着くように電話口い走つて行きましてん。

「姉ちゃん、えらい早いなあ、もう起きたん?」と、受話器通して聞えて来るのんが、昨日も聞いた声ですねんけど、眼工の前で聞くのんとは違ちがたなつかしさにわくわくしながら、「光ちゃんまだ寝てなはつたんか?」「あて今電話で起されてんわ。」「あてもういつでも出られるわ、あんたも直き出してくれへんか?」「そんなんやつたら慌あわてて揃えするよつて、九時半に梅田の阪急い来てくれへんか?」「九時半に、きつとやなあ?」「きつとやとも」「今日は光ちゃん一日暇やねんわなあ? 帰り遅おそなつてもかめへんやろ?」「かめへんとも。」「あてもそのつもりで行くさかい」

いうて、ちよつきり約束の時間に行つてましたら、なかなか来なされしませんのんで、またいつもみたいに寝してなさるのんか思たり、欺だまされたのん違うか思たり、自動電話かけてみよとして、その間に行んできなさつたら難儀や思て止めてしもたり、ひとりでジリジリしてますと、やつと十時過ぎに、「姉ちゃん大分待つたん?」いうて、改札口から息せき切つて走つて来なさいましてん。「何処行こ?」「光ちゃん何処ぞええとこ知らん?」——静かな、誰もい工へんようなどこで一日ゆつくりしてたいわ。」「そんなら奈良い行こやないか」いわれたのんで、ああ、そやそや、二人が始めて仲好よう遊びに行つたのんも奈良やつた、あの思い出多い若草山のゆうがたの景色、……何で今まであの記念の土

地忘れててんやろ。「ほんまにええとこ思いついたなあ、また若草山い登ろなあ」 いうて、ほんまにその時のうれしさいうたら、……感激した時の私の癖でもうちやんと涙ぐみながら、「^{はよ}早行こ、^せ早行こ」と急き立てて、大タクの案内人に手工取られてタクシーに乗るまでは、足が土に着けしませんねん。「あてゆんべから何処にしよう思ていろいろ考えて、奈良が一番ええ思てんわ。」

「あてかてゆんべまんじりともせえへんねけど、いつたい何考えててんやろ。」「あれからハズさん直き帰つて来やはつたん?」「一時間ぐらいしてからやつてん。」「どないいうてはつたん?」「もうそんなこと聞かんといて工な、今日は一日家のこと忘れてたいわ。」——奈良い着いたら直きに大軌^{だいき}の終点から乗^{のりあい}合^{あい}に乗

つて、若草山の麓まで行つて、何しろこの前の時と違て薄曇つた暑い日でしてんけど、びつしより汗搔きながら頂辺まで登つて行つて、そいから山の上にある茶店で休んでるうちに、前の時蜜柑転こばしたりしたのん思い出して、ちようど夏蜜柑売つてのん買うて、二人でころころ転こばしましたら、下にいる鹿がビックリして逃げますねん。「光ちゃん、お腹減(なか)つてエへんか。」

「減つてるけど、もうちよつと此処(ここ)にいてたいわ。」「あてかていつまでも山の上にいてたい、なんぞお菓子ンでもたべて辛抱しこう」というて、昼御飯の代りに煮抜きたべながら、大仏殿の屋根から生駒山の方見てますと、「この前蕨(わらび)や土筆(つづし)たんと採つたわなあ、姉ちゃん」というて、「もう後の山い行つてもなんにも生(は)

えて工へんやろか。」「そら、今頃^い行たかてなんにもあれへん。」

「そんでもこないだ行たとこい行てみたいわ」いいなさつて、あれから後の山いつづく谷の方い下りて行きましたら、春でもある辺はあんまり人の行かんどこですよつて、夏はなおさら淋しいて、木や草ばっかり 仰^{ぎょう} 山^{さん} 繁^{しげ}つて、なかなかそんなとこ、一人やつたら来られへんような物^{もの}_{すご} 淥^{すず}い氣イするのんですけど、二人は結局誰も見てる者ないのんええことにして、草のぼうぼう伸びてる蔭に、それこそほんまに、大空の雲よりほかに知ってる者のない隠れ場所見つけて、「光ちゃん、……」「姉ちゃん、……」

「もうもう一生仲好うしようなあ。」「あて姉ちゃんと此処で死にたい。」——と、お互にそないいうたなり、それから後は声も

立てんと、どのくらいそこにいたのんやら、時間も、世の中も、何も彼も忘れて、私の世界にはただ永久にいとしい光子さんいう人があるばつかり。……そのうちに空がすっかり曇つて、冷こいものがポタリと顔に落ちましたので、「雨降つて来たな。」「憎い雨やなあ。」「濡ぬれたらしようがない。本降りにならん間にはよ下りよ」いうて、慌あわてて山下りてしましましたら、ほんのバラバラ落ちただけでもうちゃんと止んでしまいますねんがな。「こんなぐらいやつたらもつといてたらよかつたなあ。」「ほんまに、何ちゅう意地悪い雨やろ」いいましてんけど、下りてみたら俄かに二人共お腹減つてきましたのんで、「ちょうどお茶の時間やさかい、ホテルいでも行てサンドウイツチたべよか」いいますと、

光子さんが「あてええとこ知つてる」いいなさつて、大軌の直ぐ傍にある新温泉い行つて、——彼処は私初めてですねんけど、宝塚と同じような家族温泉や何やあつて、光子さんはちよいちよい行きなさると見えて、仲居さんあそこ^{なかい}の名アやら、中の勝手やら、よう知つてなさるのんです。そこでその日一日遊んで、大阪に戻つて来ましたのんは八時頃でしてんけど、そいでもまだ別れるのんがイヤでイヤで、何処まででも引つ着いて行きとうて、一緒に阪急で蘆屋川あしやがわまで送つて行きながら、「ああ、また奈良い行きたいなあ。光ちゃん、明日出られへん?」「明日はもつと近いとこにせえへんか、久しぶりで宝塚はどやろ?」「そんならきつとやで」いうて別れて、帰つて来ましたら十時近うになつてゐのんです。

「あんまり遅いので、さつき病院い電話かけたとこや」いわれて、私ははつとしながら咄嗟とつさに巧いこと考えついて、「電話かけても分れへなんだやろ」いいますと、「ふん、中川いう人入院してへんというのんで、何ぞ訳あつて隠してるのんか思たのやけど。……」「それがなあ、行てみたら中川の奥さんやあれへん、光子さん自身のことやねんわ。そないうと昨日来やはつた時も何や様子けつたいな思ててんけど、自分のことやいうたらうちが会えへんやろ思て、中川さんの名前借つたいうねんわ。」「そんならあの児が病院い這入はいつてんのんか?」「病院なんか這入つてはれへん。

こつちはそんな事とは知らんと、一緒に見舞いに行くつもりで誘いに行つたら、『まあちよつと上つとくなはれ』いうよつて、上

つたことは上つたけど、いつまでたつても出かけよとしやはれへんのんで、『はよ行こうな』いうたら、『実はあんたに頼むことあるねん』いい出して、『きんのもその話しよう思て行つたんやけど、……』いうて、——『どうもこの頃体の工合が普通ではない、妊娠したのんかも分れへんよつて、そんな事にならんうちに、何ぞ智慧貸ちえしてくれへんか、あの本読んでみたけど、なんや英語で分れへんし、やり損そこのうたら恐い思うし』いうねん。』「ふうん、呆あきれた児やなあ、そんだけの事に昨日みたいなうそつくやなんて、失敬やないか。」——「うちもさんざん心配させられて、人馬鹿にしてる思てんけど、『何とも外に工夫つけへんのんで、あんなうそついてしもたんやさかい、どうぞ悪思わるわんといて』いうて、お梅ど

んも出て来て詫まるよつて、……」

あや

「それにしたかて外に何とか

うそのつきようもあるやないか、あんまりやり方がエゲツない。」

「ふん、ふん、そらそうに違いないねけど、昨日の電話も男の声
やつたし、きっとあの綿貫いう人なあ、あの人さしづが蔭で指図したの
んにきまつてるわ。なんばなんでも光子さんだけやつたら、あん

なややこしうそつくはずあれへん。うちも腹立つて腹立つて、

『そんな頼み聴く耳持つて工しません、これで失礼します』

いう

て帰ろとしたら、『まあそないいわんと、どうぞ助けて 頂戴』

ちようだい

いうて右と左から袂たもとおさえて、『こんな事から秘密親たちに知れ

でもしたら、どうぞして綿貫と一緒にになりたい思てるのんがみん
なあかんようになつてしまふ。そしたらあて生きてられへん』い

うて光子さんは泣きやはるし、『どうぞどうぞどうぞうちやんの命助ける思て、どないぞ心配したげとくなはれ』いうてお梅どんは手工合わして拌むし、そないしてもろたらどないしてええか分れへんようになつてしまて、もうもう 往おう 生じょう したわ。』「そんでどうした？」『そんでもうちめつたなこと教おせられへんよつて、

『私なんにもそんな方法知れしません。あの本貸したげただけでも悪い事した思てますのんに、そんな恐い事なんで出来ますかいな。誰ぞ知つてるお医者はん頼んだらよろしいがな』いうてんけど、そないしてる間に俄かに光子さん苦しみ出しやはつて、えらい騒ぎになつてん。……』そんな風に、しゃべつてるうちに傍かそばら傍からいろいろな作り事考え出して、昨日の出来事をええ工合

に織り交ぜて、——光子さんはあの本の処方で昨夜の間にそうつと薬飲んだらしい、それがちょうどその時利いて来てだんだん痛みようが強なつて、——と、そこは昨日見た通り詳しいに話して、そないなつて来ると自分にも責任あるよつて帰るに帰られへん、そこでどうどう今まで傍についたげてたんやと、うまいこといい抜けしましたのんです。

その十六

「今日もちよつと見舞いに行つてくるわ、放つといても気がかり

やし、乗りかけた船やよつてしようがない。……」いうて、そいから五、六日のあいだというものの毎日のように何処ぞで会うてましてんけど、「何処ぞ人に見つけられへんとこで、毎日二、三時間ぐらい会えるとこあつたらええのになあ」思てますと、「そんななんやつたら大阪の市中の方がええし、……静かなとこよりかいつて町中のゴタゴタしたとこの方が人目に附けへんし」いいなさつて、「……いつや姉ちゃんに着物持つて来てもらた家なあ？」彼処^{あつこ}やつたら気分もよう分つてるし、安心やねんけど、……彼処にせえへんか？」いやはりますねん。あの笠屋町の宿屋いうたら、私に取つたら忘れられへん口惜しい口惜しい思い出あるとこですのんに、まるでこつちの感情も何も踏み付けにした話ですねんけ

ど、そないにいわれても「ふん、そやなあ、なんや極きまり悪いけど、行てもええなあ」いうて、腹立てることも出来んとおめおめ引つ着いて行つたぐらい、すつかり足元見られてしもてましたのんです。それに極まり悪いいうても初めの日イだけで、馴なれてみましたら女子衆おなごしゆやかいも心得てて、帰りがおそなつた時やらは、家の方い電話かけて棲目合つまめうようにしてくれますし、……そんな訳で、しまいには別々に出かけて行つて彼処あそこから電話で呼び出したり、何ぞ急用出来た時にはお梅どんから知らしてもらたり、……ま、それもよろしいのんですけど、光子さんの家ではお梅どんだけやのうて、お母さんも、外の女子衆も、みんながそこの家の電話番号知つてるらしいて、ときどき私や光子さんにかかつて来

ることありますのんで、何ぞ家の方ええようだまに欺したあるに違いない思てたのんですが、或る日一人で先行いて待つてたあいだに、「へえ、そうだす、……へえ、いいえ、あのう、さつきから待つておりますけど、まだ来やはれしまへん。……へえ、へえ、そないうときます。……いいえ、どうしまして、……私の方こそいつも奥様出やはりましてえらいお世話になりまして、……」と、電話口でそない仲居さんがいうてるのんが何や知らんけつたいですのんで、「今の電話、徳光さんとこから違いますか?」といいましたら、「そうだす」いうてクスクスわろ笑てるのんです。「あんた今、『いつも奥様が出やはりまして』いうてはりましたなあ? 一体あれ誰のつもりでいうてなはつたん?」いうとまたクスクス

笑て、「奥様知りやはれしまへんのんか、奥様とこの女子衆のつもりでいうてますねん」いうやありませんか。そいからよう聞いてみしたら、その家が私とこの大阪の事務所やいうことにしたあるのんやそうですねん。「仲居さんがこれこういうてたけど、ほんまかいな?」いうて、光子さんに尋ねましたら、「ふん、そやねん」と、平気な顔して、「姉ちゃんとこの事務所、今橋と南と二つあるいうて、此処の番号教おせたあるねん。姉ちゃんかつて何ぞ家の方いそないいうといたらどやのん? 船場せんばの店の出店やいうてもええし、あての家でいかなんだら、ええ加減な名アいうといたらえやないかいな」いいなさるのんです。

そないして、だんだん私は抜き差しならん深みい陥はまつて行き

ましてんけど、「こいではいかん」思たところで、もうそくなつたらどないすることも出来しません。私は自分が光子さんに利用しられてることも、「姉ちゃん姉ちゃん」いわれながらその実馬鹿にしられてることも、感づいてましてん。——はあ、そら、いつや光子さんがいうてなさつたのんに、「異性の人に崇拜しられるより同性の人に崇拜しられる時が、自分は一番誇り感じる。何でやいうたら、男の人が女の姿見て綺麗思うのん当り前や、女で女を迷わすこと出来る思うと、自分がそないまで綺麗のんかいなあいう氣イして、嬉してうれたまらん」というのんで、たしかにそういう虚榮心から、夫に対する私の愛を自分の方い奪いなさることに興味持つてなさつたのんでしょうが、それにしたかつて、光子さ

ん自身の心は綿貫の方へ吸い取られてたことは、よう分つてましてん。けどもう私は、どんな事あつても二度と別れるということ出来でけへん氣持になつてましたよつて、分つてながら分らん風して、お腹なかの中ではなんぼ焼餅やきもち焼いてたかて、「綿貫」の「わ」の字も口い出さんと、そ知らん顔してましたのんで、そんな工合に弱点見抜かれてしもたら、姉ちゃんいうても私の方が妹みたいに機嫌取るようになつてしまつて、或る日いつもの家で会うてますと、「姉ちゃん、あんた一ぺん綿貫に会うてくれる氣イないか」といなさるのんです。「——あの人、姉ちゃんどう思てるか知らんけど、いつやあんなりになつてしまつて、何や氣持が済まんよつて、是非姉ちゃんに会わしてほしいいうてんねん。ちよつとも悪い人

違うし、会うたらきつと姉ちゃんかて気に入る思うねんけど、
 …」「ほんまに、そやなあ、あんなりいうのんもけつたいなし、
 向むこうがそないいやはんねやつたら、あても会うときたいなあ。光ち
 ゃんの好きな人やつたら、あてかつてきつと好きになれる。」

「ふん、そらきつとそや。そしたら今日でも会うてくれるか?」

「いつでもかめへんけど、あの人何処にいてんの?」「さつきか

ら此処ここの家いえい来てんねん。」——私も多分そんなこツちやろ思て
 ましたのんですが、「そんなら此処はいい呼ばなあ」いいなさつて、
 「あの人に來てもろて頂戴」と、直きに綿貫はいが這入はいつて來ま
 してん。「やあお姉さんですか……」と、この前の時は「奥さん」
 いうたのに「お姉さん」という言葉ことば使つかて、私を見たら恐縮おそひしたみた

いにズボンの膝そろえて畏まつて、「あの時はまことにえらい失礼しまして、……」いうて、——なんせいつやらは夜おそうもありましたし、それにあんな訳で人の着物借り着してましたし、その日イは明るい真ア昼間のことですのんで、紺の上衣に白セルのパンツ穿いてるのんが、違ちた人のような印象受けたんですけど、歳は二十七、八ぐらいで、この前の時の感じよりもっと顔の色白うて、やつぱり「美男子やなあ」とは思いましたけど、正直のところいうたら、表情が乏しいて、絵工に画いたように綺麗なばっかりで、ちよつとも近代的なことあれしません。「この人岡田時彦に似てるやろ?」と、そない光子さんはいいなさるのんですが、時彦よりもつとずつと女性的で、眼工が細うて眼瞼が張れ

てて、眉の間を神経質らしゅうピクピクさす癖あつて、なんや知らん陰険らしいのんです。「栄ちゃん、何もそない堅ならんかたええし、姉ちゃんちよつとも氣イにかけてはれへんさかい——」
 いうて、光子さんは一所懸命執り成しなさるのんですけど、私は私で、どうも虫の好かん奴ツやちや思たらどないしても打ち解けられしませんし、綿貫の方もそれ感づいたのんか、無愛想な顔ニツコリともささんと、いつまでたつても膝崩くずそうともせえしませんのに、光子さんだけは何や独りで面白そうに笑いなさつて、「どないしたん? 栄ちゃん。あんたけつたいな人やなあ」いいながら、むずかしい顔して綿貫の方を意味ありそうに上眼うわめにらで睨んで、「そんな顔してたら姉ちゃんに悪いやないか」というて、指の先で

頬べた突ついたりして、「あのなあ姉ちゃん、ほんまいうたら、
 この人焼餅焼いてんねんし、——」いやはりますねん。「謔です、
 謔です、そんな事あれしません、そら誤解や。」「謔やあれへん、
 そんならさつきの事いおか?」「さつきどういうた?」「僕は男
 に生れたのんが口惜しい、姉ちゃんみたいな女に生れたらよかつ
 たいうたやないか。」「そういうた、——そやけどそら焼餅やあ
 れへん。」そないいい合いしてるのんが、私にお世辞使うために
 ちゃんと二人で相談しといていうてるのんか分れしませんし、相
 手になるだけ阿呆あほくさい思て黙つてますと、「まあ、まあ、姉ち
 ゃんの前でそないに僕に恥搔かかさんでもえやないか。」「そんな
 らもつと機嫌ようしたらどやねん?」いうて、ずるずるべつたり

に焼餅喧嘩げんか止めてしもて、そいから帰りしなに三人で鶴屋食堂に行つたり、松竹見たりしましたけど、そいでも三人とも心からシツクリとはしませなんだ。

その十七

そう、そう、そんで私、最前さいぜんいうのん忘れましてんけど、家の方いは光子さんのお父さんのてかけはんのとこやいうて、笠屋町の電話番号教おせときましてん、それいうたら、ほんまにおかしなことですねんけど、光子さんは「船場の支店やいうたらどやの

ん?」いいなさるのんですが、そんなどこい行てなさるいうのん
けつたいなし、いつそ病院い入院しなさつたいうたらとも思たの
んですが、病院やつたらいつまでも退院せえへんいう訳に行かん
し、それに夫が事務所の帰りにでも迎いに来たら直^じき分るし、何^ど
処^こにしようなあ思て難儀してますと、「こないしたらどうだす」

いうて、お梅どんが考え方ついてん。尤もそれには光子さん妊娠
やはつたいうことにせんと工合^{ぐあい}わるいのんで、お薬飲んでも
巧いこと行かんし、お医者はんも手術してくれへん、そのうちに
だんだんお腹^{なか}大きくなつて来るよつてとうとうお母ちゃんに打ち明
けてしもた、そこでお父さんのでかけはんの家い子供生れるまで
引き取られてる。そのてかけはんの家いうのんは笠屋町の井筒い

う宿屋で、電話番号は何番だと、ちゃんとほんまの名前教せといたら、電話帳見たかてその通りやし、迎いに来られても棲目合うし、「そしたらあて、姉ちゃんとこい遊びに行く時^{ふところ}懐い綿でも詰めて、お腹大きして行かんならんわなあ」いうて大笑いになりましてんけど、それやつたら一番分る氣づかいないいうのんでそないしましてん。「そうか、光子さん腹ぽてになつたんか」いうて、夫はすっかり真アに受けて、さすがに氣の毒そうな顔しますのんで、「そいでもあんた、そんな悪いこと手ツ伝^て^とたらいかんいうたやろ。そやよつてうちどない頼まれても教せたげへんなんでん。そこで子供出来るまでは一と足も外い出たらいかん、じつとすつ込んでなはれいわれて、押し込めみたいにされてるのんで、退屈

で退屈でしようがないさかい、毎日でも遊びに来とくなはれいや
 はるねんけど、どないしよう知らん?——うちかてきつと恨まれ
 てるか分れへんで、放つといたら寝ざめ悪いしなあ。』「それも
 そやけど、また係り合いになつたら難儀するぜ。』「ふん、ふん、
 うちもそない思うねんけど、今度ちゅう今度はいろいろ苦労した
 せいか大夫人間変つて来てはんねん。それにそないなつたら、も
 うどないしても綿貫と一緒になるより外ないいうて、わりに落ち
 着いてはるし、家の方でも結局そないさすようになるらしいねん
 けど、何せ今のとこ誰一人訪ンねたげる人もないのんで、『頼り
 にするのん姉ちやんだけや』いわれると、なんぼ自業自得や思て
 も可哀そうになつて来るねん。『なあ姉ちやん、あてにやや見出

来たら、まさか姉ちゃんかて誤解されるはずないやろ？　あてそのうちに綿貫と一緒に姉ちゃんの旦那さんとこい詫^{あや}まりに行くさかい、これからほんまのきょうだいみたいに附き合ってくれへん？』——こないだもそないうてたし、——夫はそれでもまだ心から納得せえへん様子でしたが、「なるだけ気イ附けた方がええで」いいながらそんなり大目に見てしまいましたのんで、そいから後は「奥様いやりますか」いうて笠屋町からおおびらに呼び出しかかつて来る。こつちからも遠慮のうかけられる。晩御飯ごろまで遊んでも、「ええ加減に帰つてけえへんか」いうて夫からかかつて來ることもある、——いう工合で、ほんまにお梅どん巧いこと考えてくれた思^{おも}てましてん。

そいからさつきの綿貫のことは、そんな調子で、折角引き合わ
してもろても何やお互に探し合いしててちよつとも氣イ許せしま
せんのんで、その日イ一ぺん会うたなり、孰方どつちからも「会おあ」い
い出したことあれしませんし、光子さんも二人を仲好うさすこと
はあきらめてしもたらしいのんですが、なんでも三人で松竹い行
た、——あれから半月ぐらい後でしたやろか、ゆうがた、五時半
ごろまで遊んでましたら、「姉ちゃん先行いんでくれへん?」あて
もうちよつと用あるよつて」と、追い立てるようになさるのん
で、常時じょうじのことですよつて腹も立てんと、「そんなら先行いぬわ」
いうてその宿屋のろうじ出ましたら、小声で「お姉さん」と後か
ら呼ぶもんあるのんで、振り向いて見たら綿貫ですねん。「お姉

さん、今お帰りがけですか」いいますよつて、「へえ、そうです、光ちゃん待つてはるさかい早行つたげなはれ」と、わざと皮肉にいいながら、私はタクシー掴^{つか}まえるつもりでの通りを宗右衛門町の方へ歩いて行きますと、「ちよつと、……ちよつと、……」いうて引つ附いて来て、「僕、実はお姉さんに聞いてもらいたいことあるんですけど、差支^{さしつか}いなかつたら、一時間ぐらいこの辺散歩してくれませんか。」いうのんです。「そら、どんなお話か聞かしてもらってもよろしですが、さつきからあんた待つてなさるで。」「ナニ、それやつたら何処ぞから電話かけときます」いうて、二人で彼処^{あそこ}の「梅園」い這入^{はい}つてぜんざいたべながら電話借りつて、そいから太左衛門橋筋を北の方へ歩き歩き話しましてん。

「僕今電話で、急な用事が出来たのんでここ一時間ほどおそなるかも知れへんいうて置いたのなんですが、お姉さんとお目に懸かかつたこと内証にしといてもらえまへんやろか？ それ約束してくれはらんと、お話すること出来んのですけど。」「私は人にしやべるないわれたらどんなことあつてもしやべれしません。けど自分だけ正直に約束守つてると、ときどき人に嵌はめられて馬鹿な目に遭うことあるのんで、……」そないいうてやりましたら、「ああ、お姉さんは、なんでもかんでも光ちゃんのした事僕の指さし金がねや、
僕あやつが操あやつてるのんやとお思いですやろ？ そら、そう思われてもしようがない訳あるいうことはよう分つてます」いうて、下向いてためいきついて、「お話したいいうのんも実はそのことなんで

すが、いつたいお姉さんは、僕とお姉さんと孰方が余計愛されてる思います。お姉さんとしたら何や僕らに馬鹿にしられてる、利用しられてるとお思いですやろけど、僕かてやつぱりそんな気イしてゐるんです。僕はほんまに嫉妬^{しつと}感じてるんです。そら光ちゃんにいわしたら、姉ちゃんいてた方が家の方胡麻化^{ごまか}すのに都合ええさかい、あの人道具に使うてるのんやりますけど、もう今になつて人を道具に使う必要ありますやろか？ そんなもんあつたらかいつて邪魔になれしませんやろか？ ほんまに僕を愛してるのんなら、そないして間^まアに結婚してくれたらええやありますか。」——私はちよつとも油断せんと聞いてましたけど、態度がえらい真剣らしいて、いうことも一と通り尤ものように思わ

れますねん。「そいでも結婚出来へんいうのんは、何ぞ光ちゃんの家の方に反対あるのん違いますやろか？ いつも私には、自分は早結婚したいいうてはりますで。」「そら、口ではそないうてます。家で反対するいうこともほんまには違いないのんです。けどそれにしたかて自分が眞面目まじめにその氣イになつたら、何とかして親たち説き伏せる方法ないことないやろ思います。まして今ではただの体と違うのんに何処い行くこと出来ますか知らん？」——はあ、そないいますのんで、そしたらやつぱり光子さんはほんまに妊娠してはるのんやろか、けつたいなこというなあ思いながら聞いてますと、「——内の娘は百万円以上の資産家の所でないとやられん、一文なしのすかん貧びんの男みたいなんにやる訳に

行かん、子供生れたら何処いなとやつてしまふというて、お父さんかんかんになつて怒つてゐるいうのんですが、そんな無茶な話ありますやろか。第一子供が可哀そで、人道問題やありませんか。
 お姉さんどう思われます?」いいますさかい、「それより私、光ちゃんに子供出来たいうこと初耳ですけど、なんぞそんな気工でもあつたんですか」いいますと、「へえ? 初耳?」——いうて、
 疑がい深そうに私の顔モジモジと孔あなの開あくほど視みつめてますねん。
 「へえ、初耳です、そんなこと光ちゃん私にいうたことあれしません。」「そうかて、——そしたらいつやお姉さんのとこい避妊の方法聞きに行つたことあれしませんか?」「そらありましたけど、妊娠したなんていうのん根工も葉アもないウソばつかりで、

私に近寄るためにそんな口実こしらえて来たのんと違いますやろか。尤も私の家の方いは、光子さん妊娠してはる、そいでちよいちよい見舞いに行くのんやいうたあるのんですけど。」すると綿貫は、「ふうん、そうですか」というたなり、いつの間にやら血走つた眼工して、唇の色まで変えてるのんです。

その十八

「なあ、お姉さん、何でそないに妊娠したこと隠すのんじょう？」
殊にお姉さんにまでウソつかいでもよろしいやありますよ。

んか？ ほんまにお姉さん知りやはれしませんのんか？」 いうて、何や疑うてる様子で、何遍でも念押すのんですけど、ほんまのとこ私は聞いたことあれしません。綿貫の話ではもうちやんと三月みつきぐらいになつてて、お医者はんにも見てもらたいうのんですが、それやつたら、いつや出血騒ぎの時にもそやつたはずですねんけど、三月やそこらでは素人しろうとに分れしませんし、それにその後で「自分は子供出来るはずない」いうことを、たしかに光子さん自身の口から聞いてますし、あの時のことは芝居打つてたに違いない思てましたのに、綿貫のいう通りやとしたら、やつぱり私に気がねしてはつたんのんか知らん？ 「何で子供出来るはずないいいましたか、あの本の通りを実行してるいうのんですか、そやな

かつたらそんな体质やいうんですか」と、綿貫はせえだい聞くの
 んですが、そら私かて、光子さんの前では出来るだけ綿貫のこと
 に触さわらんようにしてましたよつて、そない委くわしゆう問うたことあ
 れしませんし、……そやけど、こないだもんぐに「姉ちゃんの
 家ない行く時はお腹なかに綿でも詰めて行かんならん」いうてはつたぐ
 らいやし、妊娠してはるとは思えしませなんだいいますと、光子
 さんは眞面目で結婚しよういう氣イないのんや、そいでもしも子
 供出来たいこと分つたらどないしても一緒にさされる、それが
 イヤやよつて隠されるだけ隠してる、「僕はそうに違いない思い
 ます」いいますねん。綿貫の考では、光子さんちゅう人は異性の
 愛より同性の方が好きで、綿貫より私の方がずっと愛されてて、

そのために結婚したがれへん。——子供出来たり、結婚したりしたら、私が逃げてしまふかも分れへん思て、一日延ばしに延ばして、そのうちにお腹の児ええようにするとか、綿貫にイヤ氣おこさすとか、どないぞしよう思てる。——私はひがんでるせえか、どないしても自分の方がそない愛されてる思えしませんのに、「いや、そうです、たしかにそうです、お姉さんは仕合わせです」いうて、「ああ、ああ、それに引きかえて僕は何ちゅう不幸な運命の下に生れたのんでしょう」と、芝居のセリフみたいに節つけていいながら、泣きそうな顔するのんです。それが、始めて会うた時から女みたいな男やと思ってましてんけど、そないいうて話してみますと、表情や物のいいようまで女の腐つたんみたいにねち

ねちしてて、何やうるさいほど執拗ひつこうて、横眼でジロジロ邪推深
 そうに人の顔色うかごうたりして、なるほどこれやつたら、光子
 さんかてそない好きと違うんかなあいう氣イしますねん。そいか
 らいつや笠屋町で着物取られた時にしたかて、綿貫は私呼ぶのん
 に反対やつた。もうあないになつてんやつたら度胸きめて、仲居
 さんの着物借つて帰つたらええ、そんで「こないこないの訳で深
 う約束した男あります」いうたら、出来たことしょうがないよつ
 てかいつて早結婚はよ出来る、出来なんだら駆け落ちする覚悟きめた
 ら、ちよつとも恐いことあれへんのに、あんな時に何も知らんお
 姉さん呼ぶやなんて、そんな厚かましいこと出来るもんか、第一
 呼んだかて来てくれへんにきまつてるいうてんけど、光子さんは

「着物なかつたら今晚家い行なれへん」 いうてどないしても聴きはれへなんだ。 「それやつたら、いつその事こいから何処ぞい逃げよやないか」 いうても、「そんな事したら後のために悪いさかい、あてが巧アいこというて姉ちゃん呼んで見せる。あてがいうたら、あの人『イヤや』 いうこといわれへん。ちよつとぐらい怒られたかてどないと胡麻化ごまかしてやる」 いうて、自分で電話かけに行きやはつた。「そんでもあの時、誰ぞもう一人電話口に立つててコソコソ相談してたみたいでしたがなあ」 いいましたら、

「そら僕かて心配やさかい、傍に附いてたんですね」 いいますねん。
 そんなこといろいろ話はなしもつて知らん間に三休橋さんきゅうばし渡つて、
 本町筋ほんまちすじまで来てしまいましてんけど、私も綿貫も「もうちよつ

きたはま

と話しまひよなあ」 いうて、電車道越えて 北浜の方きたはまい行きましてん。何せ私は今まで光子さんちゅう人を通してばっかり想像してて、何かにつけてただもう男が悪いのんや思てましたが、さつきからの様子見てましたら、そないウソつきみたいとも違いますし、女性的などこや疑がい深いどこあるのんも、生れつきにも依るとしたかて、光子さんの態度がそないさしてしもたのんかも分れへんし、……私にしたかて今まで大分欺だまされたお蔭で僻ひがんでるところあるねんし、……それ考えたら無理もないどこもあるのんで、まあちよつとぐらい 邪じやすい推交すいつてるとしたかて、とにかく本気で私に同情求めてるみたいに思われますねん。尤も自分より私の方が愛されてるいうのんは、どないしても私には信じられしません

のんで、「そら違いますやろ、そら綿貫さん、あんまり氣イ廻し過ぎますで」いうて慰めたげたのですが、「いやいや、僕かてそない思いたいのんですが、「お姉さんはまだほんまの光ちゃんの性質知りやはれしませんのんです」というて、——光子さんは私に対しては綿貫を愛してゐたに見せかけ、綿貫に対しては私を愛してゐたに見せかけてる、そんなことするのん好きなたちなんや。けど孰方どつちやいうたら、私の方余計愛してるのんで、そやなかつたらあんなり絶交したみたいになつてたのに、わざわざ病院の名前かた騙かたつたりして会いに行く訳ないやないか。「いつたいあの時、光ちゃんはお姉さんとこい行てどんな工合にいうたのんですか、どんな事からより戻つ

たのんですか、僕は後から聞いたのんで委しいことは知らんのんですが」 いいますよつて、あの出血騒ぎの一件みんな話して聞かしますと、「ふうん、ふうん」 いうて一と言一と言ビツクリしながら、「そんな騒動したこと、僕は夢にも知りません。そら、お腹なか大きかつたのんはほんまです。しかし僕は子供出来るのんやつたら出来た方がええいう意見で、薬飲んだり不自然な手段取つたりしたらいかんいうてたのんに、自分勝手にお姉さんのとこい相談しに行つたいうのんで、後で怒つたぐらいですねん。そやけど、僕に内証で薬飲んだことあつたにしたかて、そない苦しんだり出血したりしたことウソに違ひあれしません。いつたい、その血イミたいもん何ですやろ」 いうて、そないまでして仲好よ

うなりたいいうのんは、私愛してるのんでないと出来んことやい
うのんです。なるほどそれもそうですが、そんなら何で綿貫と
会うてはるねんやろ？ ほんまに私好きやつたら、もうどうに綿
貫放つてしまふのん当り前やないか？ それがおかしいいいまし
たら、光子さんいうたら自分がどない「好きやなあ」思てもその
弱点見せんようにして、向むこが自分を慕しとうて来るよう仕向けたが
る。自分は絶世の美人やよつて、いつも高う止まつて、誰ぞに
崇拝しつとさんと淋しい。自分の方からいい寄つたりしたら値打ち下
る思い込んでる。そやさかい私に嫉妬しつと起さして、自分が優越な地
位にいるために綿貫いうもん利用してるのんや。「それに一つは、
別れるやなんていい出したら僕が何するか分れへん思て、恐がつ

てるのんです。今更そんなこといえる関係やあれしませんのに、もしもそないなつたら、僕は名譽と生命を賭けてあらゆる復讐ふくしゅしてやります』 いうて、蛇へびみたいな眼工で人の顔ジロジロ睨にらむのんです。

その十九

「どうです、お姉さん、まだちよつとおよろしいですか?」 「ええ、ええ、私やつたらかめしません。」 「そしたらまたもとの方い戻りまひよか」 いうて北浜の通りから南の方い今歩いて來た道

帰りながら、「結局僕とお姉さんは敵^{かたき}同士にさされてるのんですが、僕が負けるのんにきまつてます」いいますよつて、「私はそない思えしません。光ちゃんと私とはなんぼ熱烈に愛し合うてたかて自然に^{そむ}背^{そむ}いてるさかい、もし孰方^{どつち}ぞが捨てられるいうことになつたら私の方が捨てられます。光ちゃんの家の方にしたかて、あんたには同情しやはりますやろけど、私に同情してくれる人誰もあれしません」いいますと、「けどお姉さんは、その不自然という点に強味あると思ひます。何でやいうたら、異性の相手^{さが}搜^{さが}そ思たら僕以外にもなんぼでもあるけど、同性の相手やつたらお姉さんの代りになる人外にちよつとあれしません。そやさかい僕はいつでも捨てられるけどお姉さんは捨てること出来ません」い

うて、——あ、そうそう、そればつかりやあれへん、同性の愛やつたらどんな男と結婚したかて、続けて行かれる。夫が何人変つたかでちよつとも影響せえへん、そしたらお姉さんと光ちゃんの愛は夫婦の愛よりも永久不変やいうて、「ああ、ああ、僕は何ちゅう不仕合させな男でしよう」と、またしても例のセリフ繰り返すのんです。そいから暫^{しばら}く考えてて、「なあ、お姉さん」いうて、「僕、お姉さんに正直なとこ聞かしてもらいたいのんですけど、光ちゃんが僕を夫に持つのんと、外の男持つのんと、孰方の方をお姉さんは望れますか」 いいますよつて、そら私かてどうせ光子さん結婚しやはるのんやつたら、前から事情知つてくれる綿貫と一緒になりやはる方が都合ええのんにきまつてますさかい、そ

ないいますと、「そしたら僕とお姉さんとは敵同士になる理由あれしませんやないか」いうて、もうこれからは同盟しよう、そして焼餅みたいなん焼くのん止めて、お互に助け合って馬鹿な目工に遇わされんようにしよう。——なんせ今まで二人離れてたために光子さんの思うままに利用しられた。そやさかいこれからはちよいちよいそうツと会うようにして連絡取つて行こやないか。尤もそないするのんには二人が完全に諒解りょうかいし合うて、互の立ち場認めんといかん。光子さんのいいぐさ真似まねシするのんやないけど、同性の愛と異性の愛とはまるきりたちが違う思たらなんにも嫉妬することあれへん。ぜんたいあんな綺麗な人たつた一人で愛そういうのんが間違うてる。五人も十人も崇拜する人あつたかて

当り前やのんに、二人で占領するいうのん勿体ない。それも男やつたら自分一人や、女やつたら私だけやいう工合に考えたら、世の中に自分らほど幸福なもんあれへんやないか。二人ともそない思て、その幸福いつまでも自分らだけが握つて外の人に取られんようにしたらええのんやいうて、「どないです、お姉さん」いいますよつて、「あんたさいその氣イなら、私かて約束守ります」いいましてん。「僕、お姉さん味方になつてくれなんだら、ぱつと世間に知れ渡るようにして、自分もあかんようになる代り、お姉さんかてあかんようにしたげよ思てたのんですけど、それ聞いてほんまに安心しました。光ちゃんのお姉さんやつたら僕に取つてもお姉さんです。僕女きょうだい一人もないのんで、お姉さ

ん親身の姉や思て大事にしますさかい、お姉さんもどうぞほんまの弟や思て、何でも思い余ることあつたら遠慮のう打ち明けて下さいませんか。僕ちゅう人間は、敵になつたらどんな恐いことでもする代り、味方になつたら命投げ出してもお姉さんのために尽します。お姉さんのお蔭で光ちゃん嫁に持つこと出来たら、夫婦のことやかい後廻あとまわしにしてもお姉さんのため謀はかります。」「きっと、きっと、そないしてくれはる?」「きっとですとも、僕かて男です。一生お姉さんの御恩忘れるようなことせえしません。」——そんでとうとう、また「梅園」の前まで歩いて来てしもたのんで、そしたら今度、いつでも必要なこと出来たら「梅園」で待ち合いしまひよいうて、堅い握手して別れましてん。

私は一人で帰つて来る途みちみち々何や知らん胸がわくわくするぐら
い嬉しいて、光子さんはそない私を愛しててくれる？ 私の方が
綿貫よりずっと愛されてる？ まあ、そんなこと、夢やないのん
か？——つい昨日までは二人のために玩具おもちゃにしられてる思い込
んでたのに、急に形成変つてしまつて、まるきり狐きつねにつままれた
みたいな氣イしましてんけど、そいでも綿貫のいうたこといろいろ
考えてみましたら、好きと違ちがたらあんな騒動するはずないいう
のんもほんまやし、そやなかつたらちやんとした人ありながら私
と会ういう訳ないし、——それに、今になつてから初めごろのこ
とだんだん思い出してみると、あの観音様のモデルのことでや
かましい噂立うわさつた時分、光子さんかて私がどんな気持でいたか大

要素振りそぶでも察しついてたですやろし、道ですれちごた時やかいに「この人うちに氣イあるねんなあ」思て、今に誘惑してやると待ち設けてなさつたのんかも分れしませんねん。そないいうたら二人が始めて物いうたのんも、いい出したのんは私ですけど、いつもでも済ましてなさるのんにニツコリ笑いなさつたのんで、つい釣り込まれて口きいたのんやし、裸体の姿見た時にしたかて、見せてくれいうたのんは私ですけど、そないいわすように持ちかけなさつたのんやし、——ぜんたい私、なんば光子さん崇拜するいうたかて、どんなことから今みたいな仲になつてしまひたのんか、それにはいろいろ夫に対して不満あつたとこい、学校でん々噂うわさ立てられたのんが反動的に作用したこともありますやろが、私に

そんな可能性あること見抜いて、知らん間アに暗示かけてなさつたのんかも分れしませんし、それ考えたらあのM家との縁談の事にしたかて口実みたいに思われますし、——なんせ自分の仕掛けた罠わない私おとしいれながら、うわべはいつでも私の方から手工出した形にさされてたいう氣イしますねん。そら綿貫のいうたことかて一から十まで信用出来でけしませんし、あの着物取られた晩でもたしかに綿貫さしづが指図したのんと違うかしらん。SK病院から電話かかつた時にしたかて、あの男の声綿貫でのうたら外にそんな事頼まれる人あるかしらんいう工合に、疑がい出したら腑ふに落ちることもあるんですけど、——第一子供生れるいうこと、なんで私に隠してなさるのんか、あんな心配さしひきながら、そんな水

臭いことするやなんて、やつぱり私の方があなどが悔られてること知れた
 ある、ひよツとしたらあないに秘密打ち明けて私と光子さんとの
 仲い水さそいう氣やないのんか？ そうか今のうちは邪魔されん
 ように味方につけといて、結婚したら放ほつてしまつつもりやない
 のんか？——そない思たら、だんだん疑がいも濃うなつて来るの
 んですけど、そいから四、五日たつた或る日、またろうじの外で
 待ち受けて「ちよつと、ちよつと、……」いうて、「僕今日お
 姉さんに相談したいことあるのんですが、『梅園』まで来てくれ
 ませんか」いいますよつて、一緒に附いて行きましたら、二階の
 座敷い上つて行つて、「ただ口でばつかりきようだいの約束する
 いうても、お姉さんかてなかなか僕を信じるいう訳に行きますま

いし、僕かてやつぱり何や心配ですさかい、お互に疑念残らんよう
に誓約書かわ交そうやありませんか。実はそのつもりでこんなもん
書いて来たのんですけど」いいながら、ふとこころ懷から二通の証文みたい
なもん取り出すのんです。……あ、そう、そう、ちよつとこれ見
て下さいませ、これがその時の誓約書ですねん。（作者註。彼女

が示した誓約書の内容は話の順序として茲ここに紹介する必要がある
ばかりでなく、この文案を作製した綿貫なる男の性格を想像せし
むるに足るから、煩はんを厭いとわず原文のままを左に掲載するであろう。

—

誓約書

現住所

兵庫県西宮市香櫞園××弁護士法学士

柿内孝

太郎妻

柿内園子

明治卅七年五月八日生

現住所

大阪市東区淡路町五丁目××番地会社員

綿貫長

三郎次男

綿貫栄次郎

明治卅四年十月廿一日生

右柿内園子ト綿貫栄次郎トハソノ各々ガ徳光光子ニ対シテ有ス
 ル緊密ナル利害関係ヲ考慮シ昭和某年七月十八日以降左ノ条件
 ノ下ニ骨肉ト変リナキ兄弟ノ交リヲ^{てい}スベキコトヲ誓約シタリ
 一、柿内園子ヲ^{もつ}以テ姉トシ、綿貫栄次郎ヲ以テ弟トス、栄次
 郎八年長ナレドモ園子ノ妹ノ夫タルベキ者ナレバナリ
 二、姉ハ弟ガ徳光光子ノ恋人タルノ地位ヲ確認シ弟ハ姉ト徳
 光光子トノ姉妹愛ヲ確認シタリ
 三、姉ト弟トハ徳光光子ノ愛情ガ第三者ニ移ルコトナキヨウ

常ニ結束シテ防禦^{ぼうぎよ}シ、姉ハ弟ト光子トヲ正式ニ結婚セシムルタメニ努力シ、弟ハタトイ結婚後トイエドモ姉ト光子トノ既ニ確立セラレタル關係ニ対シ何ラ異議ヲ申シ立ツルコトナシ

四、モシ兩人ノイズレカガ光子ニ捨テラレタル場合ハ他ノ一人モソレト進退ヲ共ニスベシ、即チ弟ガ捨テラレタル時ハ姉ハ光子ト交リヲ絶チ、姉ガ捨テラレタル時ハ弟ハ光子トノ婚約ヲ破棄シ、結婚後ニオイテハ離別スベシ

五、兩人ハ他ノ一方ノ承諾ヲ経ズシテ無断ニ光子ト逃亡シ、所在ヲ晦^{くら}マシ、モシクハ情死スル等ノ行為ヲナサズ

六、兩人ガコノ誓約ヲナセルコトハ光子ノ反感ヲ挑発スルコ

トアルベキヲ以テ発表ノ必要ニ迫ラルルマデハ絶対ニ秘密ヲ厳守スベシ、モシ両人ノイズレカガ光子ニ対シ、アルイハ他ノ何なんびと人力ニ対シ発表セント欲スル時ハ予あらかじメ他ノ一方ト協議スベキ義務アルモノトス

七、モシ両人ノ一方ガコノ誓約ニ違背スル時ハ他ノ一方ヨリアラユル迫害ヲ受クルコトアルベキヲ覺悟スベシ

八、コノ誓約ハイズレカガ任意ニ徳光光子トノ関係ヲ放棄セザル限り有効トス

以上

昭和某年七月拾八日

姉
柿

内園子

印

弟 緹

貫榮次

郎 印

(これだけの文句がかんぜよりで綴じた二枚の改良半紙へ、頗る
 丹念な毛筆の細字で、せせこましい字配りで、一点一画の消しも
 なく書かれているのである。二枚の半紙の四分の一以上も余白が
 残っているのを見ると、こんなに細かく書く必要はないのである
 が、けだし平素からこういうコセコセした字を書く癖があるので

あろう。書体は毛筆を使い馴なれない現時の青年の筆蹟としては決して拙くないけれども、何處かに商店の番頭の字のような品の悪い達者さがある。最後の二人の署名だけは、梅園の二階で万年筆で記したものだが、これも柿内未亡人の署名の方が不釣合いに字体が大きい。そして何より無氣味なのは、署名の下に小さな花弁を押したようにひろがっている 茶褐色ちゃかっしょくの斑点はんてんであつて、同じものが半紙の綴じ目の割り印を捺すべき所にも二つぽたぽたとにじんでいる。それが何であるかは未亡人自らが語るであろう。

—— 「どうです、お姉さん、この条件でよろしいですか？ よろしかつたら此處ここに名ア書いて判おしてくれませんか？ それとも何ぞ足らんとこあるお思いになつたら、遠慮のういうてみて下

さい」いいますよつて、「これだけちゃんときめたあつたら結構ですけど、そいでも子供生れた場合に、あんたも光ちゃんも家庭が大事やいう氣イになりませんやろか。なんとか其処のとこもうちよつと考えて欲しい」いいましたら、「それは第三に規定したある通り、『弟ハタトイ結婚後トイエドモ姉ト光子トノ既ニ確立セラレタル関係ニ対シ何ラ異議ヲ申シ立ツルコトナシ』やさかい、家庭のためにお姉さん犠牲にするようなこと絶対にあれしませんけど、子供生れるということそない心配やつたら、どうでもお姉さんの気イ済むように此処い書き加えときますが、どないしたらええのんです?」いいますのんで、「今光ちゃんのお腹なかにある子は結婚するのんに必要やさかい、それはしようがないとして、結婚

してからは子供生まんようにして頂戴」いいましてん。そしたら暫く考えて、「よろしいです、そないしましよう」いうて、

「どんな工合ぐあいに書いときましよか、こないこないの場合もありますし」と、いろいろ私の気いつかなんだことまで考えてくれて、——その、二枚目の紙の裏のとこいペンで書いたあるのん見て下さいませ、それがその時の書き入れですねん。（作者註。前掲の誓約書の最終の紙面に、「追加条項」として下の文句が附記されている。——「弟ハ徳光光子ト結婚後ニオイテハ常ニ光子ヲ妊娠セシメザルヨウニ注意ス、モシ聊カニテモ妊娠ノ疑イアル時ハソノ処置ニ関シ姉ノ指揮ヲ受クルモノトス、——この文句を記したあとでまた思いついたもの

らしく、更に次の二箇条が規定してある。——「結婚前ノ妊娠ト
 イエドモ、ソノ妊娠中ニ結婚シ、結婚後ナオ避妊ガ可能ナル時ハ
 為シ得ル限りノ手段ヲ取ルベシ、」——「弟ハ妻ガ協力シテコノ追加
 条項ヲ忠実ニ履行スル保証ヲ得ルニアラザレバ、光子ト結婚スル
 コトヲ得ズ、」——そうして此処にも茶褐色ちゃかっしょくのしみが点々と
 捺おきされているのである。）——それ書いてしまうと、「こいだけ
 極め」といたら安心です、これ読んでみたらお姉さんの方が僕より
 よつほど有利なくらいです、これで僕の誠意のあるとこお分りにな
 なつたでしょ」——「さあ、サインして下さい」——「いいますね
 ん。そんで私、「サインするのはしてもええけど、判持つて工し
 ません」——「きょうだいの約束するのんに普通の判で

は役に立てしません、お氣の毒ですけど、ちょっとばかり痛いの
ん辛抱してくれませんか」いうて、ニヤニヤ笑いながら袂の中か
ら何か出すのんです。

その二十

「どうぞ此処のとこ出して下さい、痛いいうてもほんちよつとの
間です」いうてるうちにもうシツカリ手工握つてて、指の先か思
てましたら、肩の方まで袖そでまくり上げて、二の腕の上と下とをハ
ンカチで括くくろとするのんで、「判おすのんにそんなことせえでも

ええやあれしませんか」 いいましたら、「判おすだけと違います。きょうだいの約束するんです」 いうで、自分も同じように腕まくつて、私の腕と一緒にそろえて、「よろしですか、お姉さん、声出したらいけませんで。……あれいう間に済んでしまいますよつて、眼工つぶつてなさい」 いいますねん。「イヤや」 いうたらどんな目に遇うか分れしませんし、逃げよ思ても手頸握てくびられてますし、光る物見たら気が顛てんとう倒してしまって、眼工つぶつてる間に、咽喉のどでもどないぞしられるのんやないかと生きてる心地こゝごちせえしませなんだけど、殺されたら殺された時思てあきらめますと、肘ひじの上のところスルスルと銳利な感覚がした思たら、ぞうツとして脳貧血起しそうになりましたが、「しつかりしなさい、しつかりし

なさい」 いうて、自分の腕出して、「さあ、お姉さんから先イ飲んで下さい」 いうのんです。そいから、「此処と、此処と、此処い判おすのんです」 いいながら自分で私の指つかんでペタペタおしてしまいます。

私は綿貫いう男がつくづく恐い氣いましたので、正直に約束守るつもりで、その誓約書は大事に筆筒たんすの抽出しい鍵ひきだかけてしもといて、光子さんには済まん思いながら素振りにも悟られんようにしてましてんけど、そいでも隠し事してると何処ぞオドオドした様子出るのんか、明くる日不思議そうに私の顔見てなさつて、「姉ちゃん何で、ここのこと傷したのん?」 いいなさるのんです。「ああ、これどないして出来たのんか、ゆんべあんまり蚊かアに喰く

われて、夢中で搔きむしツたのんか知らん」 いいますと、「おか
 しいなあ、栄ちゃんもちよどそれと同じもん出来てるねんわ」と、そないいわれたら、ああ、悪い事出来んもんやなあ思うて急
 に私の顔色変つて来ましたのんで、「姉ちゃん何ぞあてに隠して
 るのんと違う? それどないして出来たのんか、ほんまのことい
 うて頂戴」いいなさつて、「隠したかて大概分つて、姉ちゃん
 はあてに内証で何ぞ栄ちゃんと約束したことあるねんなあ?」
 —そら、光子さんいうたらそういうことには早う氣イ廻るのんで、
 そない^{すぼし}図星^{とぼ}刺されたらもう惚^{とぼ}け^{でけ}出来しませんけど、そいで
 も真つ青になりながら黙つてますと、「きっとそうに違ひないや
 ろ? なんでそれいうてくれへん」 いうて、——だんだん聞いて

みましたら、きのう綿貫はあれから帰りに、腕の傷コツソリ光子さんに見られてしもてて、その時から何ぞ訳あるのんやなあと思てた、そないに二人同じ日に同じとこへ傷出来るはずあれへんいなきつて、「姉ちやんはあてと栄ちやんと孰方どつちが大事や」とか、「隠す以上はあてに知れたらいかんことあるねんやろ」とか、しまいには私と綿貫との間にイヤなことでもあつたように「それ聞かんうちはどないしても帰せへん」いいなさるのんですが、そんな時にも光子さんは一杯涙ためたなりじつと落ち着いてなきつて、恨めしそうに睨にらんでなさるだけですねんけど、その眼工えらい妖よ艶うえんで、何ともいえんなまめかしい風情ふぜいあつて、「なあ姉ちやん」いいながら甘えるようにその眼工使われたら、なかなか魅力に逆

らういうこと出来しません。それにそこまで感づかれたらいざれ
一と騒ぎ持ち上ること極きまつてますし、隠すだけ疑がわれること
分つてますねんけど、綿貫に相談せんうちはウツカリいう訳に行
きませんので、「どうぞ明日まで待つて頂戴」いいますと、明日
いわれることが何で今日いわれへん、人に相談していうぐらいや
つたら聞かいでもええ、自分にだけそうツと教おせてくれたら迷惑
かかるようなことせえへんいうて、どないしても聴きなされしま
せんさかい、「光ちゃんそないいうけど、あんたかつてあてに隠
してることあるやろ」いうてやりますと、「あてが何隠してる?
何でも正直にいうたげるよつて、そない思うことあつたら聞い
て頂戴」いいなさいますねん。「ふうん、きつと隠することな

いなあ?」 「きっとあれへん。そら隠すつもりやのうて、いわなんのことあるかも知れんけど。」「あんたあてに、何んぞ体のことについて隠してることあるやろ?」 「何いうてるのん、姉ちゃん?」 「あのなあ、いつやあんた家い来て苦しがつたわなあ、あの時ほんまにお腹なかの中に子供あつたん?」 「ああ、あの時のこと」というて、さすがに極まり悪そうに赧あかい顔しなさって、「そらあの時は姉ちゃんに会いとうてわざとあんな真似まねしてん。……」「あてそんなこと聞いてるのんやあれへん。あの時はほんまに子供出来てたのんかどうか、それ知りたいねん。」「そら、出来てえへんなんだ。」「そんなら今でも出来てえへんの?」「そんなこと極まつてるやないか、なんでもまたそれ疑ごうてるのん?」

「なんということないねんけど、疑がうだけの訳あるねん。」

「ああ、姉ちゃん」と、その時光子さんは「もう分つてる」いう顔しなさつて、「姉ちゃんきつと、あて妊娠してること榮ちやんにいわれたのんやろなあ？」あの人きつとそんなこというねん、ほんまいうたら子供生ます能力もないくせに、——」と、そないいいなさるか思たら、一所懸命歯ア喰いしばつて、眼工に一杯たまつてた涙が急にポトポト頬べた伝てるのんです。

私はビックリして、「何やて、光ちゃん？」いいながら自分の耳疑ごうてますと、そのあいだにもうさめざめ泣いてなさつて、実は今まで、自分のことについては何一つ隠してえへんけど、綿貫には人にいわれん秘密あつて、それ知られたら自分も恥かしい

し、あの人も氣の毒な思ていわんといた。けど姉ちゃんに蔭でいろいろな中傷したりするのんやつたら、もうあんな人、可哀そくなことも何もあれへん、自分が今みたいになつてしまつたのんも元はいうたらあの人や、自分の不仕合せはみんなあの人の仕業やいうて、またえらい泣きなさつて、そいから綿貫ちゅうもん知つた時のことから始めて委しいに話しなさつて、なんでも二年前の夏、浜寺はまでらの別荘いにてた時分、お互に物いうようになつて、或る晩散步に誘い出されて、海岸に置いたある漁船の蔭に連れて行かれた。そいで夏過ぎてからも、大阪の家が近いここにあつたさかい當時孰方どつちぞから呼び出しては逢うてたら、或る時女学校時代のお友達から綿貫のことについて妙な噂うわざあるのん聞いた。そのお

友達いうのんは、いつや二人が宝塚歩いてるこ見たことあるの
 んで、そののち朝日会館の映画の夕^{ゆうべ}の時やつたかに、光子さんが
 一人で屋上庭園に出てなさつたら、「徳光さん」いうて後から肩
 たたいて、「こないだあんた綿貫さんと歩いてたなあ」というのん
 で、「あんた綿貫さん知つてるのん?」いうたら、「うち直接に
 は知らんけど、あの人えらいシャンやいわれて、みんなが騒ぐの
 んやてなあ、あんたみたいに綺麗かつたら一緒に歩いててもちよ
 うどええけど」というて意味ありげに笑^{わろ}てるさかい、そないに深い
 関係やない、あの時ちよつと歩いただけやといい訳しなさつたら、
 「そない弁解せんかて、あの人やつたら誰も疑がうはずあれへん、
 あんたあの人^{あだな}の仇名^{あだな}知つてる?」いいますよつて、「知らん」とい

いなさると、『百分 安全なるステッキ・ボーイ』いうねんし』いうてクスクス笑てるのんやそうです。それが光子さんには何の事やらきつぱり分れしませんので、根工掘り葉ア掘り聞いてみましたら、綿貫いう人は無能力者で、中性の人間やいう噂ある、しかもそれにはちゃんとした証人あるのんやいいますねん。

その二十一

なんでもそれ分つたいうのんは、その光子さんのお友達の知つてる人が綿貫と相愛の仲になつてて、人頼んで結婚申し込んだと

ころが、何や向うの親たちがええ加減なこというてちよつともハツキリせえへんのんで、本人同士は眞面目に結婚望んでるさかい是非承知して下さいいうたら、栄次郎は実は訳あつて一生嫁持たさんつもりですいうのんで、だんだん調べたら、子供の時分にお多福風たふくかぜにかかったのが元で、睾丸炎こうがんえんになつた、——私、そんなことよう知りませんけど、お医者はんに聞きましたら、お多福風から睾丸炎になるということかてあるもんやそうですねあ？ 尤もそないいうてるだけで、ほんまは極ごくどう道したのんかも分れしませんけど、とにかくそいからその娘さんえらい綿貫憎んでて、——そら考えたら可哀そうでもありますねんけど、そんなんやつたら人に交際求めたりイヤらしい手紙くれたりせなんだらええのん

に、「あんたは理想の妻や」とか何とか巧いこというてたばつかりやない、散歩いうたらきっと暗いとこい連れて行つたりしたのんは、今から思たら自分がそんな体やさかいそないな事で満足してたのんで、つまりいうたら恋愛の仮面被かぶつて人玩おもちや具にしてたのんや。けど綿貫はそういう時に、「僕は結婚せん先に肉体的の関係結ぶいうのん罪悪や思います」いうのんで、しつかりした人や思て感心してたのんがなお腹立つ。そこでその娘さん「どうぞ秘密にしてやつて下さい」いわれてましてんけど、口惜くやしまぎれにいろいろな人にしゃべつたところが、外にもそんな目工おに遇うた人たあんとあるいうこと分つて来て、それが綿貫は、自分がええ男で異性に好かれるいうことよう知つてますさかい、何処いで

も女の集りそうなとこいづうずうしいに出て行くのんで、誰でも一ぺんは引っかかりますねん。そやけどプラトニツク・ラヴやいうてどない熱烈に愛されても純潔守つてるのんで、大概のものは人格者やいうてなお崇拝して、何処まででも釣られて行つて、きわどいどこまで引っ張られてから極きまつてぽんと捨てられてしまう。

「ふーん、あんたかつてそうやつたのん?」 「ふん、ふん、うちもそやつてん」と、そないう人々から出て来て、誰に聞いてみても同じように、或る程度以上になつたら妙にコソコソ逃げてしまもて、そないうたらその様子が何や知らんけつたいやつた、ほんまのプラトニツク・ラヴやつたら接吻せつぶんするのんかて矛盾してゐるのに、あれやつたらなにも純潔なことあれへん。みんな欺

されてたあいだはそれに氣イつきませなんだけど、分つてしまつたら、誰も彼もそないい出して、その人らの捨てられたいうのんが型に嵌はまつたように、結婚申し込んだら、何やすうツと消えるよう逃げられてしもた」 いいますねん。そこで中には同情する人もありましてんけど、本人はそないきょうさん仰山に自分の秘密知られてる思わんと、そいから後も次から次い処女弄もてあそんでて、知らん人は今でも常時引つかれられてますのんで、「またステッキさん、あんな人つかまえてるし、……」「あのステッキ・ボーキやつたら誰も羨うらやましいことないなあ」 いうて、知つてるもんはええ笑い草にしてる。「うちこないだ、徳光さんきつとまだ知らんのやなあ思て、いつぞいうたげよ思ててんし。うそや思うのんやつた

ら誰それさんにかて誰それさんにかて聞いて御覧。」「へーえ、
 そんなけつたいな人！ うちまだ接吻しられたことないねんけど、
 そしたらもう直きしられるやろか」と、光子さんはわざと空そらとぼ惚ぼけ
 けて、その場アそこで済ましてしもてから、「今日友達にこない
 こないいわれてんけど、ほんまやろか？」いうて、家い行んでか
 らお梅どんに話しますと、「ほんまかうそかとうちやん知りやは
 れしまへんのか？」いうて、あべこべにお梅どんから尋たずねられ
 た。——そらお梅どんにしたら、もしもそんなことあつたらそれ
 光子さん知らんといった訳ない思うのんでしょうけど、光子さんは
 異性に接触するいうこと始めての経験ですし、「子供生れたらい
 きませんから」いうてるのんで、別に不審にもせんといった、そや

さかい友達にそないいわれてもほんまかうそか自分には分らんいうのんで、お梅どんも始めてビツクリして、「どうちやんとある方はんとやつたらあんまり揃そろい過ぎてお雛ひなさんみたいやさかい、水さそ思てそんな悪口ひきいうのん違いますやろか。誰ぞに調べてもらう訳に行きまへんか」 いうて、そいから内証で秘密探偵に調べさしたら、性的に欠陥あるのんはやつぱり事実に違いないいうて来たのんですねんて。もつと尤もお多福風の結果はどうか分りませんねんけど、とにかく子供の時分からそうやつたらしくて、それがどうして探偵に知れたいうたら、光子さんとそないなる前南地なんぢで隠れ遊びしてたいうこと突き止めて、その方面調べてみたら、くろとの女でも一ぺん綿貫に引っかかつたら大概なもん夢中になる、

なんば男前ええとしたかてあんまりおかしい、何ぞ秘伝でもあるのんやないかいうて、一時はえらい評判になつて、関係あつた女たちに聞いてみても、誰も絶対に秘密しやべらん、そこで噂ひろがつて行つて、いろいろな方法で詮索せんさくするもん出来て来て、分つたとこでは、初めごろ綿貫は自分に欠陥あるいうこと隠して遊んでましてんけど、そのうちに或る女が秘密嗅かぎつけたいのんは、その女もやつぱり同性愛の習慣あつたのんで、一人前の男やのうても女に愛されるいうこと綿貫に教せ込んだらしい。そいから綿貫のこと「男おとこ女おんな」やとか「女おんな男おとこ」やとかいうようになつたのんやですが、そないいわれる時分にはぶツつり遊び止めてしもて、何処のお茶屋いも姿見せんようになつた。——私、

その探偵の報告書あとで見せてもらいましたら、ずいぶん細かいとこまでも行き届いて調べられてて、そんなこと委しいに書いてありますん。

そこで隠れ遊びしてる間に、「自分で何も悲観することない」いう自信ついて、今度はしろとの女搜してるとい光子さんが網に引っかかりなさった。——これは想像ですねんけど、きっとそくに違ひないやろいうのんで、そんな人間の玩具になつた思たら、もうもう生きていたれん氣イして、ほんまにその時光子さんは死んでしまおか思いなさつたそうですが、死ぬのんやつたら恨みいうてから死んでやろいう覚悟しなさつて、正式に結婚してくれへんか、あんたさいよかつたらこつちはちゃんと親の許し得たある

ねんし、と、そないうたら何ちゅうか思ていいなさると、「僕
 かて望むとこですけど今は都合悪い」とか、「もう一、二年たつ
 てから」とか、何の彼のいうて胡麻化すのんで、「あんたほんま
 は、何年たつても結婚出来へんのんやろ」いうてやりなさつた。
 そしたら急に顔の色かえて「何でです?」いうよつて、「何でや
 知らんこないこないの噂うわさありますねんけど」いいなさつて、こう
 なつたらうちもあんた捨てる訳に行かんよつて、一緒に死んで頂
 戴いいなさつたら、そいでもまだ「そんな噂うそや」いうてまし
 てんけど、探偵の報告書出して見せなさつたのんで、その時いう
 たらなんともいえん顔つきして、「悪かつたです、堪忍して下さ
 い」いうて、「一緒に死にます」いいましてんと。けどなかなか

死ぬ訳に行けしませんし、さんざん恨みいうてしもたらまた可哀
 そうになつて来て、ついぐずぐずに会うてなさつた。そういうの
 んが、光子さんかて心の底ではやつぱり綿貫のこと忘れること出
 来んと、一日も長う一緒にいてたいいう氣イあつたのんですやろ
 が、綿貫の方でもそれ見て取つて、自分は今まで、自分の体の秘
 密知れたら、どない愛してくれてる人でもきつと自分を捨てるや
 ろ思て隠してた、自分に欠陥あるいうこと承知して愛してくれる
 のんやつたら、自分で何で隠すもんか、自分はこんな体になつ
 たのん不仕合せやとは思うけど、そない重大な欠点やとは思て
 えへん、それで男子の資格ないいうたら、男子いうもんのほんま
 の価値何処にあるのんや、男子ちゅうたら外に現われた恰好ばつ

かりできめるのんか、そんなんやつたら男子でのうてもちよつともかめへん、深草の元政上人は男子の男子たる印あつたら邪魔になるのんで、灸すえたいやないか、男子の中で一番えらい精神的な仕事した人は、お釈迦さんでもキリストでも中性に近かつた人やないか、そやさかい自分みたいなんは理想の人間や、そないいうたらギリシャの彫刻かて男性でも女性でもない中性の美現わしてあるのんやし、観音さんや勢至菩薩の姿かてそうやし、それ考えても人間の中で一番気高いのん中性やいうこと分つてる、自分はただ愛する人に逃げられるのん心配して隠してたんや、ほんまいうたら、恋愛にしたかて子供生んだりするのん動物の愛で、精神的恋愛楽しむ人にはそないなことやかい問題やあれへん。：

⋮

その二十二

……はあ、そらもう綿貫ちゅうたら、そんな工合^{ぐあい}に議論し出しひらなんぼでも都合のええ理窟^{りくつ}ならべて、つべこべつべこべ果てしないのんです。そこでいいますのに、光子さん死にやはるのんやつたら、自分で一緒に死ぬのん 躊躇^{ちゆううちよ}せえへんねんけど、自分は死ぬだけの理由見つかれへん、ここで死んだら、ふん、あの男、不具者やいうこと悲観して死によつたいわれるのん口惜し^{くや}

い。自分はこれぐらいのことでの死ぬような意氣地なしゃあれへん、なんぼでも生きてて、立派な仕事して、普通の人間よりずつと偉大な超人やいうこと見せてやりたい、光子さんかて死ぬぐらいな決心するのんやつたら、自分と結婚してくれたらええやないか、今もいう通り、自分みたいなもん夫にするのん恥や思うのん間違うてるし、一層高尚な精神的結婚やいうように考えたら、――尤もつともそないいうたどこで世間の奴らは理窟分らんと、いろいろな妨害するやろさかい、自分がこんな人間やいうこと無理にこつちから広告して歩かいでもええ、一人や二人噂するもんあつたにしたかて、誰もちゃんとした証拠握つてるもんじゃないねんよつて、もしあんなこと尋^たンねるもんあつたら、完全に一人前の男やいうて

て欲しい、——それが考えたらほんまに矛盾してますのんで、
「ちよつとも悲観することない、超人や」いうぐらいやつたら、
何にもそないに秘密にせんかて大手振つて歩いたらええのんに、
何は措いても邪魔這入らんうちに無事に結婚してしまお、それが
第一の目的やさかいその目的果たすためには世間欺すだまながいうことも
やむをえん、自分らは誰にも退け取らんいうことお腹なかの中でさい
承知してたら差し支いないいいますねん。けど、世間はどうでも
親たちまでそないあんじょう欺す訳に行けへんいいなさつたら、
自分の親は承知で嫁に来てくれる人あつたら、どんなに結構や思
うか分れへん、反対するのんは光子さんの方の親たちだけやよつ
て、事情打ち明けても許してくれへんこと極きまつてるのんなら、

やつぱり隠しとかんといかん、光子さんさいその氣イになつたら
隠しとかれへんということあれへん。「そんなことして分つた時ど
ないするのん?」「分つたら分つた時のことやあれしませんか、
そないなつたら堂々と正義の立ち場説いて聴かして、絶対に外の
人とは結婚せんいうて、それでも許してくれなんだら、その時こ

そ二人で姿隠しても一緒に死んでもええことあれしませんか。」

それが本人は、自分の秘密仰山の人あだなに知られてて、仇名まで附け
られてるいう風に思えしませんのんで、くろとの女別としたら感
づいてるもんちよびツとよりないやろ思てますさかい、巧いこと
隠し通せる思てるらしいのですが、そない都合よう親欺して結
婚するいうこと、実際にはなかなか出来しません。綿貫の方には

親いうてもお母さんと、後見こうけんする叔父おじさんとがあるだけやさかい、一ぺん光子さんが会うてくれて、「こないこないの訳です
よつて、いづれ家から表向きに申し込んで来たら黙つて承知して
下さい」いうたら、お母さんはよう分つてくれる、叔父さんかて、
わざわざ人の欠点あばいて折角の縁談ワヤにするようなことせえ
へんいうのんですけど、光子さんの考えでは、結婚申し込む先に
身元調べるに違ひないよつて、どないしたかて知れる、そんなこ
として平地に波瀾はらん起すより当分内証で会うてる方ええやないか、
ぜんたい綿貫の方には別に結婚せんならん理由ないのんで、そん
な体で無理な相談やいうこと自分で分つてますねんけど、光子
さんの方がそないいつまででも一人でいられるはずないさかい、

こんなりでいたらもうつい逃げられへんやろか、それが心配で仕方あれしませんねん。それに口でいうのんとお腹の中とはまるきり反対で、出来るもんなら一人前の男と同じに奥様持つて暮らして行きたい、世間欺すばっかりやのうて、自分の心まで欺して、ちよつとも外の男と違ちがたどこないよう思てたいという気イあるばっかりか、光子さんみたいな人一倍綺麗な奥様持つて、世間の奴らアツといわしてやりたいいう虚榮心まであるのんで、せえだい焦あせつてて「そんな一時逃のがれいうて、ええ縁談あつたら行くつもりやろ」いうようなイヤ味いいますねん。そこで光子さんは、どない親にいわれてもきつと余所よそい嫁に行けへん、今のとこ差し迫つた縁談あるのんでもなし、そのうち自分も二十五になつたら自由

結婚出来るようになるし、きっとええ折あるやろさかいまあまあ
もうちよつと辛抱してて、……そやなかつたら死ぬより外に道な
いいうて、ようよう納得させしましてんと。

光子さんのその頃の気持、「ほんまのとこ自分にも分らん」い
うてなさるのんですが、初めのうちはそないいうて宥めなだといて、
どないぞして切れてしまいたい思てなさったのんは確かですねん。
会うたあとではいつでも後悔しなさって、ああ、ああ、自分は仰
山の女の中でも人に羨ましがられる器量持つてながら、あんな男
に見込まれるやなんて何ちゅう情なさけない身の上やろ、もうもう止め
てしまいたい思いなさるのんですけど、そら不思議と、また二、
三日も立つうちに自分の方から跡追い廻すようになつてしまふ。

そうかいうて、それほど綿貫恋しいのんかいうたら、精神的にはええ思うとこ一つもない、顔見るのんさいムカムカするような氣イして、卑しい奴ツちや、見下げ果てた奴ツちや、いう風に、お腹なかの中では常時激しいに軽蔑けいべつしてゐる。それで毎日のように会うことは会うてるけど、二人の気持シツクリすることめつたにのうて、いつでも喧嘩けんかばかりしてて、その喧嘩いうのんが、自分の秘密人にしやべつたやろとか、いつまで待たす氣イやとか、例のキマリ文句で、愚にもつかんようなこと取り上げては疑がい深いにちやにちやした口調でいいますのんで、……光子さんかて、そない厭いやがること用もないのんに人に話したら綿貫だけの恥やあれしませんし、そんくらいなこといわれいでも分つてましてん

けど、そうかでお梅どんだけにはいわんちゅう訳に行かんのでいいなさつたのんを、「何で女子衆みたいなもんにしやべつた」いうて、その時ばかりはえらい喧嘩になつて、光子さんもちよつとも負けてんと、「あんたは偽善者や、いうこととすることまるきり違てるうそつきや。あてらのしてる事にほんまの恋愛らしいとここんだけもあれへん。」と、思い切りいうてやりなさつたら、とうとう文句に詰まつてしまつて、血相変えて「殺す」いいますのんで、「殺すのんやつたら殺したらええ、あてはとうから死ぬ覚悟きめてる」いいなさつてじつと眼工つぶつたなり、動こともしなされしませなんだ。そしたら綿貫の方が氣イ呑まれてしまつて、「悪かつたよつて堪忍して下さい」いいますのんで、「あて

あんたみたいな恥知らず違うよつて、こんなこと世間に知れたら、あんたよりあての方がどない難儀するか分れへん、もうもういつでもそんない係りいわんといて頂戴」いいなさつて、ぎゅうぎゅういう目に遇わしなきつた。そいから綿貫だんだん頭上らんようになりましてんけど、それだけかいつて陰険になつて、蔭では一層疑がい深ぶなりましてん。

ところがちようどそないなつてる時にM家との縁談持ち上つた。
——その時分光子さんがあの技芸学校い行つてなさつたいうのんは、綿貫と会う機会作るためやつたのんですが、私との間に同性愛やいう噂立つたのんは実は誰の仕業しわざでもない、光子さん自身がそないいい触らしなさつて、匿とくめい名のハガキ投書しなさつたのん

ですね。何でそんなことしなさつたら、縁談のこと聞いてからいうもん綿貫の焼餅が激しいて、そんなことあつたら唯では置かん、今までの関係一切合財新聞い素ツ葉抜いてやるいうて脅迫しますし、それでのうても競争の形になつて市会議員の方で手工廻して、光子さんのアラ搜しして、こつちの縁談滅茶々々にしようとかかつてるのんで、自分はもちろんM家に行こいう氣イないさかい競争に負けるのんかめへんけど、そんなことから綿貫との秘密探り出されて、ぱつと知れ渡るようになつたら、それが何より恐い。そいでつまるどこ、ほんまのこと知れんように、わざと同性愛の噂立てた。まあいうてみたら、私ちゆうもん利用して世間の眼工くらましなさつた。光子さんとしたら、

「ステッキ」やとか、「男女」やとかいわれてるもんと噂立つより、同性愛やいわれる方が辛抱出来る、人に後^{うしろゆび}指さされたり物笑いの種にならんと済む思いなさいましてん。そんな工合で初めはただ、私が光子さんモデルにして絵工書いてるいうこと聞きなさつたり、道で擦れ違^{すちが}た時の素振^{そぶり}や何かから、ふつと思いつきなさつただけですねんけど、私の方があんまり真剣で熱烈でしたさかい、だんだん利用する心持からほんまの愛情に変つて行きなさつた。そら私かて全然純真なとこばっかりやあれしませんけど、そいでも綿貫とは比べ物にならんほど精神的な気持ありましたよつて、知らん間にそれに絆^{ほだ}されなさつて、——それと一つには、綿貫みたいな誰にも相手にしられんような人間の慰め物にしられ

るのんと、同性の人から観音様の絵にまで画かれて崇拜しられるのんとはえらい違いですよつて、私というもん出来てから持ち前の優越な感じ、——自尊心戻つて来て、始めて世の中が明なつたような氣イしたいいなきりますねん。そいで綿貫にはこないこないの噂あるのん幸いにこないな道具に使てる、そないした方が家空けるのんにも工合ええさかいいうてなきつたのんですが、それをそんなり真まに受けるような綿貫と違いますよつて、うわべは「そうですか、そらその方がええでしよう」いいながら心の中では嫉妬の刃研ぎすまして、何ぞ事さいあつたら私との仲割^さいてやろ思てたのんに違ひないいうのんは、あの笠屋町で着物盗まれた事件にしたかて、今考えたらどうも怪しい、あの時別の座敷で

博奕^{ばくち}打つてるもんあつたとか、刑事乗り込んで来たとかいうのんはみんな根工も葉アもないことで、彼処^{あそこ}の家の人に頼んで不意に光子さんビツクリさして、逃げる間に着物すつくり隠すように初めから段取り極^きめといた。——それが、あの日の昼、私のところ来なさる前に三^み二^{つこし}越い買い物に行きなさつたら偶然綿貫に会いなさつたのんで、こいから柿内^{かきうち}の姉さんどこ行て帰りにずつと笠屋町い廻るさかい待つて欲しいうて別れなさつた。そこで綿貫は揃いの着物着てなさつたこと知つてましたよつて、こりやええ機会や、あの着物ないようにしてやつたらどうしても私のところ電話かけるようになる、そしたら私かて愛憎^{あいそ}尽かすやろいうように考えて待つてる間にあの家のもん買収してこないこないせえい

うといった。——綿貫やつたらそのくらいのこと企らまんとも限らんし、企らむだけの時間もあつた。そやなかつたら何ぼ何でも人の着物着て警察い連れて行かれるということあんまりおかしいし、光子さんとこいも綿貫とこいも、そんなり警察からなんにもうて来なんだいう訳あることない。けどその時はまさか計略にかかつたとは思いなされしませんきかい、どないしてええのんか顛てんと倒とうしてしもてるど、「こないなつたら、柿内さんとこい電話かけて揃いの着物取り寄せるよりしようがないでしょ」と、綿貫の方からいい出した。——綿貫の話とはそこえらい違ちがてて、光子さんはもう取られたのんが揃いの着物やつたいうことさい忘れてたくらい慌あわててなさつて、なかなかそんなこと考え出せるどころや

なかつた。綿貫にそないわれてからも「姉ちゃんに頼める義理やない」いいなきいましてんけど、「それ厭いやつたら僕と一緒に逃げてくれますか、それとも電話かけますか」いわれて、絶体絶命の場合になつて、こんな男の道連れになるのん死ぬよりイヤや 思いなさつたら、後先の分別あとさき ふんべつもないよになつて夢中で電話口 い走つて行つた。そいでもあの時、近所のカフエ工い来てもらうとか、綿貫先帰してしまうとか、あんなとこ私に見せんかて何とかもうちよつとええ工夫あつたやろのんに、うろたえてたらそんなこと思いつけしませんし、そこが綿貫の狙ねらいどこですよつて 「早はよしなさい、早はよしなさい」いうて急せきたてますし、そのうちに 私に来られてしもて「合わす顔ない」いいなさつたら「僕ええよ

うにいいますさかい隠れてなさい』いうて、いかにも自分は光子さんの恋人やいう顔つきして、いろいろなこと私に力マかけて聞いてしもた。『ふん、そやねんし。ほんまいうたら、あの人あの時まで姉ちゃんとのことそないよう知つてエへんなんでん』いいなさいますねん。

その二十三

「へーえ、そしたらあの時カマかけられてたのん?『そら光子さんのお様に対する気持いうたら、全く真剣でしてなあ』いうて冷

やかしたりして、人馬鹿にしてる思てんけど。」「ふん、ふん、わざとそんなこというて、なるだけ姉ちゃんに腹立たそとしててんし。あて襖の蔭で聞いてて、まあ何ちゅううそつきやろ思てんけど、あんな時に弁解したかてなかなか信用してもらわれへんしなあ。……」そいで光子さんは、計略にかかつたことに氣いつきなさつたら、忌ま忌ましいてならんこい、それからちゅうもんもう邪魔なもんないようになつたのんでなおのことひつこうに附き纏まとて、何ぞいうたら「あんたこそうそつきや、巧いこというて僕欺だましてたやないか」いうて、私とのこといつまででも根工に持つて、「きっとあんなことぐらいで絶交するはずあれへん、今でも何処ぞで会うてんとは限らん」いうて、自分で会わさんよ

うにしといたくせに、何処までも疑がわんといられん性質やのんか、それともわざと空^{そらとぼ}惚けてそんな嫌がらしいのんか、「あんたも男らしいもない、済んでしもた事そないくどくどいわいでもええ」いいなきつても、「いやいや、済んでしもたことやない、きつとあの人に僕の秘密知らしたあるやろ」というて、ほんまのとこはそれ一番恐^{こわ}がつてて、私に知れたら復讐的にどんな妨害するか分れへんりますのんで、「邪推もええ加減にして欲しい。あんたちゅうもんあることかい隠してたのに、なんでそんなことしゃべる隙^{ひま}あるやろ。あんた姉ちゃんに会うたんやつたら大概様子で分つたやろのんに。」「いや、その様子に怪しいとこあつた」いうて、自分が力マかけたりしますさかい人の態度まで疑ごうて、

——それが、ただの嫌がらしと違ちがて、綿貫にしたら疑がう訳ある
 いうのんは、自分かて光子さんと私との仲感づいてたようには、私
 にしたかて綿貫と光子さんとの仲知らんといたいうはずがない、
 知つて今まで焼餅も焼かんといったのんは、「あの男は不具な人間
 や」いうこと聞かされて安心してたのんやろ、そやなかつたらま
 さか黙つてる訳あれへん、そない思て、それがお腹なかにありますの
 んで、私を笠屋町の宿屋に呼んだいうのんも、自分はしょつちゅ
 うこんなところで光子さんと会うてるぐらいで、性的欠陥のある男
 やないいうこと見せつけるつもりもあつたのんです。光子さんか
 て、「どうぞ姉ちゃんと別れて下さい」と正面から手工ついて頼
 まれなさつたら、「イヤ」とはいえん義理ですのんに、あんじよ

うペテンにかけられた上にそないエゲツのう疑がわれたら、意地でも謀の裏かいてやりとうなりなさるし、あんな心にもないこととして仲悪なつた思いなさつたら、なおのこと未練残つて、どないぞして仲直りしたい、せめて一ト眼だけでも会いたい思いなさいましてんけど、訪ンねて行つてもたやすうは会うてもらえんやろし、会えたところでどないいうていい訳しよう、今更何いうたにしても気持直してもらえへんやろと、いろいろ考えなさつた末あの本のこと思い出しなさつて、……あれはほんまに光子さんには用のない本で、やつぱり中川の奥様に貸しなさつたのんやそうですが、あの時のこととは、ふつとそれからヒント得なさつたのんで、SK病院の名前騙つかない電話かけよ、こんな時にはこな

いじょういう工合^{ぐあい}に、何日もかかつて一所懸命考え抜きなさつた。もちろん誰にも相談せんと、自分ひとりであんだけの段取り工夫しなさつて、ただ電話かけるのんに女の声やつたらいかん思て、お梅どんに訳話^{わけ}して出入りの洗い張り屋の男頼んだ。「あてかてあの時姉ちゃんを取り戻^戻そいう一心で有るだけの智慧^{ちえ}絞つてんし。今考えたらあんなえらい騒動して、眼工^{こう}吊り上げて見せるやんて、役者でもないのんにようあんなことしたなあ」いいなさつて、そら、あの時のことは確かに私を計略にかけた。欺^{だま}したいわれても仕方ないけど、それも自分がどんな気持でしたかということ直きに分つてもらえるやろ、そしたら私かて可哀そうなところ思えきつと憎いとは思へんやろと、そない考えてたいいなさいますね

ん。

ところが私と仲直りしたいことそれから間ものう綿貫に知れた。光子さんかともともと綿貫のたくさんだことあべこべに引つくり覆して見せつけてやろいう氣イあるのんで、別に隠そともしなされへんばつかりか、知れたらどんな顔するやろ思て待ち構えてなさつたどこですさかい、「あんたこの頃、またあの人とより戻つたんやろ、空惚けててもちやんと分つてる。」「ふん、そんな事ちよつとも惚けてエヘン」と、落ち着き払てなさつて「会わんといたかてどうせ疑がわれるぐらいなら、会うた方が優しま 思てん。」「何で僕に内証でそんなことした?」「内証やあれへん、あてどない邪推しられたかて、せエヘンことはせエヘんとい

けど、したことはしたいうし。」「そうかて今日まで黙つてたやないか。」「そらいうまでもない思たきかい黙つてた、何も一々自分のしたこと報告せんならん思てエへんもん。」「こんな大事なこと報告せんちゅう法あるもんか。」「そやさかい、したことはしたいうてるやないか。」「ただ『した』だけでは分らん、孰ど方から仲直りしたのんかちゃんとほつきりいうて見なさい。」

「あての方から訪たンねて行つて、悪かつたいうて堪忍してもらろてん。」「何やて！ なんで詫あやまりに行くことある？」「何でいうて、こんなとこいあんな時間に呼び出しどいて、着物借つたりお金借つたりして、放つとくいう法あるかいな。そんな義理の悪いこと、あんたは出来てもあてはようせん。」「借つた物はあの明

くる日、僕が郵便で返してやつた。あんな汚らわしい女にそれ以上礼いう必要あるもんか。」「ふーん、そしたらあの時姉ちゃんの前で何ちゅうた、『僕の一身はどないなつても、この場アさい無事に済んだら御恩は一生忘れしません』いうて、その汚らわしい人に頭下げて、手工合わして拝んだやないか。そやのんに今頃ようそんなこといえるなあ。第一借つたもん郵便で返すやなんて、もし旦那さんの手工にでも渡つたらどない迷惑しなさるか、汚れてたかていエヘンかて世話になつたもんは世話になつたもんやのに、何ちゅう恩知らずやろ。あんたそんなこというたら、あの晩のことかて手妻てづまの種たね見えるような氣イするし。⋮」そないいうてやりなさつたら、ぎよツとした顔して、「手妻の種て何のこつ

ちゃ」いいますのんで、「何のこつちや知らんけど、何もあれから絶交したともいエヘンのんに、あんた独りで絶交したもんと極めてるいうのんけつたいやないか。そない自分の思う壺^{つぼ}に嵌^はまる思たら間違てるし。」「何や一体、あんたのいうてること僕には分らん。」「あのなあ、あの時の着物あんなり警察から戻つて来エヘンのん何でやろ?」「今そんなこと問題にしてエヘン。」そないいいながら、チクリと痛いとこ刺されたのんで、「何をいうのんか今日はあんた興奮してるので。まあまあ、その話ゆつくり聞こ」いうて、照れ隠しにニヤニヤ笑て胡麻化^{ごまか}してしもた。けどそんなりで放つとくようなあつさりした男違いますよつて、二、三日したら直きまた持ち出して、今度は下手^{したて}に出て光子さんの機嫌

取りながら、「あの奥様よつぱど怒つてたはずやのんにどんなこ
といて丸めたのんか、後学のために聞かして欲しい」とか、

「そんな優しい顔しててあんたはえらい手管上手や」とか、「く
ろとも及ばん凄腕すごうでや」とか、いろいろなこというておだてたり
皮肉いうたりしますのんで、ええ加減なところで妥協しといた方が
ええ思いなさつて、実はこないこないの計略で仲直りしたいと
話してやりなさつた。「あんたそんな狂言書いて人欺すことい
つの間アに覚えてん?」「そらあんたに教おせてもうてん。」「阿あ

ほ呆いいなさい、僕にもちよいちよいその手工使てるねんやろ。」

「ほらまた邪推始まつた。あてこんな人の悪いことしたん今度だ
けやわ。」「そないまでしてあの奥様ときようだいになりたいい

うのん、僕には分れへん。」「けどあんたかてこないだ姉ちゃんに『僕はちよつともかめしません、これから三人仲好うしましょ』いうてんやないか。」「そらあの時あの人怒らしてしもたら難儀やさかい、あないいうといてん。」「うそいうてるわ。あんた姉ちゃんに力マかけたんやないか。あの晩の細工ちゃんとあてに分つてるし。」「そんなこと僕一向知らん。」「あんたよう聞いて頂戴や、一寸の虫にも五分の魂いうことあるよつて、蔭い廻つてけつたいな事しられた思たら、誰かつてそんなりにしとけへんさかいになあ。」「僕がけつたいな事したやなんて、何ぞ証拠でもあるかいな。あんたこそ邪推してやないか。」「邪推なら邪推にしといたらええ。けどあんたかつてそないうのんやつたら、

ちゃんと、約束した通り姉ちゃんと附き合うたらええやないか。

あんたは疑ごうてるか知らんけど、あてかてあんたのイヤがるようなこと決して姉ちゃんにい工へんし。……」そこで光子さんは即座に氣転利かしなきつて、私のとこいあんなこというて来たのんも一つは綿貫のイヤがつてること何処までも隠して、一人前の人間やいうこと私に信じさすためやつた、自分はそないまでして綿貫の名譽守つてるねんさかい、綿貫さいもうちよつと寛大な気持になつたら、この先三人が仲好うして行かれへんいうはずないやないか——と、一方では綿貫の痛いとこおさえてて、賺すかしたり威嚇おどしたりしなさつて、「あんたと此處ここで会うてる以上は、姉ちゃんにも来てもらう」いいなさつて、私との交際には絶対に嘴くちばし

入れんといてほしい、ぐずぐずいうのやつたら綿貫捨てても私捨てへんいう覚悟見せなきったのんで、とうどう泣き寝入りになつてしまいましてん。

その二十四

「……なあ、姉ちゃん、なんぼ親しい 間柄あいだがら かてこんなこというたら自分の恥やし、愛憎あいそ つかされるかも分れへん思てじつと辛抱んぱ しててんけど、もうもう今日は何も彼もいうてしもてんし。あてぐらい不仕合せなもん世の中にあるやろか。」——そないいい

ながら私の膝^{ひざ}の上い打つ伏しなさて、涙でそこがびしょびしょに濡れるぐらい激しいに泣きなさるのんで、あんまりのこと気に何ちゅうて慰めたげたらええのんやら、——なんせ私の知つてゐる今日までの光子さんいうたら、花やかで、勝ち氣で、いつもプライドに充ちた眼工^み耀^{かが}やかしてなさつて、そんな辛^{つら}い思いしてなさつたとはちよつとも見えしませんのに、その高慢な、女王みたいにエラそにしてなさつた人が、プライドも何にも放つてしまつて泣き崩れてなさる様子だけでも、ほんまに思いの外ですねん。光子さんいわしたら、自分は強情張りやよつてどない苦しいことあつても人に見透かされんように努めて来てんけど、それでも姉ちゃんいうもんなかつたらもつと陰気になつてたやろのんに、姉ちゃん

んのお蔭で暗い運命に打ち克つだけの勇氣出た、いつでも姉ちゃんの顔さい見てたら気が晴れ晴れして一切のこと忘れてたけど、今日ちゅう今日はどういう訳か悲しい思い込み上げて来て、意地にも辛抱出来んようになつて、長いあいだ懐えてた涙の堰せきが一ペんに切れた。「なあ、姉ちゃん、どうぞどうぞ、……頼りにするのん姉ちゃんばっかりやさかい、こんな話聞いても愛憎あいそ尽かさんといて工な。」「なんで愛憎尽かすもんか。いいにくいことよういうてくれたなあ。あてかてそない頼りにされたらどない嬉しいか分れへん。」そしたら光子さん氣イ弛ゆるみなさつたのんか、一層止めどものう泣きなさつて、自分の一生は綿貫のお蔭で滅茶々々にしられた。もう行末に何の望みも光明もない、生涯埋うもぎ木で暮

らすばつかりやいいなきつて、自分は死んでもあんな男と結婚せ
 工へん、どうぞ助ける思てあの男と手工切れるようにしてくれへ
 んか、何ぞええ工夫あつたら教おせて頂戴いいなさるのんで、「こ
 ないなつたらあてかて正直なこというけど。ほんまいうたらあて
 栄ちゃんと兄弟の約束してしもて、こないこないの書かきつけ付まで交かわ
 してんし」と、昨日の出来事みんな話したげたら、大方そんなこ
 とやろ思てた、綿貫の奴、何処まで行つても知られて工へんかい
 うこと疑ごうてて、わざとそないなこというて姉ちゃん試ためしてみ
 といてから、自分捨てられたら姉ちゃんも一緒に抱き込んでやろ
 いう氣いや。……そないいうとなるほど、「光ちゃんに子供出来
 たいうこと初耳です」いうたとき、「へえ？ 初耳？」いうて血

走つた眼工して、「何で子供出来るはずないいましたか、そんな体质やいうのんですか」と唇の色まで変えてたのんが、あの時にもけつたいな人やなあいう感じしましたし、それに思い当るのんは、話の中途中でためいきついては、「ああ、ああ、僕は何ちゅう不幸な運命の下に生れたのんでしょう」と、二へんも三へんも芝居のセリフみたいな節つけて繰り返したあの言葉、——あの時はなんや、人の同情求めるためにわざとあんなセンチメンタルな声出してる思いましてんけど、それがやつぱり、なんばずうずうしい男にしたかてお腹なかの中では自分の不仕合わせ嘆いてるのんで、人にいわれん淋しい気持が自然と外に現わたのんかも分れしません。けど「何でそないに妊娠したこと隠すのんでしょう？」

お姉さんにまでウソつかないでもええやありませんか」とか、「子供生れたら何処いなとやつてしまいういて、光ちゃんのお父さんかんかんになつて怒つてる」とか、巧いこというて探り入れて、——それもええけど、「これ読んでみたらお姉さんの方が僕より得してゐる、僕の誠意のあることこれでも分りましたやろ」いうやなんて、もともと起る氣づかいのんやつたら、どんな条件かて書けるやあれしませんか。そんなありもせんこと種に使つて、こつちの信用つないだりして、どないな氣いやろ? どんな場合にあの約束役に立たすつもりやねんやろ? そらきつと「姉ハ弟ト光子ト正式ニ結婚セシムルタメニ努力シ」いうのんと、「弟ガ捨テラレタル時ハ姉ハ光子ト交リヲ絶チ」いうのんと、「兩人ハ

他ノ一方ノ承諾ヲ経ズシテ無断ニ光子ト逃亡シ、所在ヲ晦マシ、モシクハ情死スル等ノ行為ヲナサズ」いうのんとが、——殊にこの一番しまいの条件が眼がんもく目めやのんで、その外のことば勿もつ体たいらしいに見せかけるための附け足りやと、光子さんはいいなさいますけど、そいだけのことわざわざこんな尤もつともらしい形式取り交して、あんな大騒ぎせいでよさそうなもんですのんに、そんな法律くさい文句並べるのんがあの男の癖なんやそうで、そないいうたら、この頃光子さんの綿貫に対する態度だんだん焼け糞くそそぶりになつて来なさつて、どないなとなれいうような素振見せなさるもんですさかい、綿貫の方も近いうちにただでは済まんような事起るいう予覚感じてて、蔭い廻つて何ぞ悪さするような様子見えてた。

そこでこないだ三人で松竹座い行つた時にしたかつて、「あんた
 そないひがんでんと一ぺん姉ちゃんに会うて御覧、そしたら姉ち
 ゃんどんな人やか、あんたの秘密知つてるかどうか、大概話しぶ
 りでも分るやろ」 いうて連れ出しなきつて、そないしといたら、
 内証でけつたいなこといわれたりする危険ないやろ思いなきつた
 のんですけど、あんな工合ぐあいに妙にこじれて口も利かなんだのんで
 すと。「そしたらあない空々うつしいしてて、蔭でそうツと手工握ろ
 いうことあの時から考えてたのんか知らんで」「そらどや知らん
 けど、あてがあの人放ほ_{じょうじ}つたらかして姉ちゃんと逃げるのんやない
 かいうで、常時心配しててんし。」「きつとあてを道具に使て
 結婚さいしてしもたら、もうあんたみたいなもん用ないいうて放

り出すつもりやつてんなん。」 「結婚々々いうてるけど、それか
て自分で自分で自分欺くためやのんで、ほんまに結婚出来るとは思てエ
ヘンねん。あんまり無理なこというたら、あて生きてエヘンこと
分つてるし、姉ちゃんちゅうもんある方が外の男に取られる気づ
かいない思て、今のまま出来るだけ続けていてたいねんし。」 :

：そいで光子さんは、今日も綿貫が待つてゐるねんけど、今日ばつ
かりはどうしても会うのんイヤやいいなさつて、何ぞ工合よう
行なしてほしいいなさるのんですが、今急にそんなこというて
も怪しまれるばつかりやし、後がかいつて悪いさかい、そないい
わんと今日のどこは何もこんな話せなんだことにしどきなさい、
そのうちにあてがきつときつと手工切れるようにしたげる、あて

死んでも光ちゃんの命助けんと置かん、まさかの時はあの男殺してやるいうて、私も一緒に泣きながら力づけたげて別れましてん。

それが、……そう、そう、その誓約書の日附け見たら分るのんですが、……そうです、そうです、これが七月十八日ですよって、光子さんとそんな話しましたのんが多分明くる日の十九日のことで、ちょうどその時分夫の方は忙しかつた事件やつと片附いたのんで、何處ぞい避暑に行こやないか、ことしは軽井沢いでも行つてみよかいましてんけど、私はなかなかそれどこやあれしませんさかい、光子さん毎日々々淋しがつてて、こんな体で自分何処いも出られへんのに、あんたほんまに羨ましいなあいうてなさるし、行くのんならもうちよつと涼しいになつてから箱根いでも

連れて行つて欲しいいうて、夫が何や物足らん顔してゐるのんにも
 頓着せんと、そいから半月ほどいうもんはいツつもいツつも
 夫の出かけるのん待ちかねて笠屋町い飛んで行きましてん。何し
 ろ私にしましたら、あれからこつち光子さんが別人みたいにしお
 らしいに見えて、今まで美しい悪魔みたいに思われてたのが、
 今度は急に鷺に狙われてる鳩みたいに思られて来て 尚更いとし
 さ増したどこい、会うたんびに心配そうな様子してなさつて前の
 ような花やかな笑顔見せなさること一日もないのんで、まさかと
 は思ても短気なことでもしなさつたらえらいこツちや思たら、
 気が氣やあれしません。そこで私、「光ちゃん、あんた栄ちゃん
 の前ではせめてもうちよつと浮き浮きしてなさいや、そやなかつ

たらまた感づかれてどんなこといい出すか分れへん」 いうて、

「きっと、きっと、世間に顔向けならんように叩きつけてやるさ
 かい、死ぬほどつらいことあつてもちよつとの間辛抱してなさい」
 いいましてんけど、さてどないしたら綿貫叩きつけること出来る
 か、人欺したり陥れたりする計略は向むこの方が上手ですかい、な
 かなかええ考出けて来えしませなんだ。私はそないいうてるうちに
 も、また綿貫がろうじの外で待つたりしてたらどないいい抜けし
 たらええのんやら、あんな誓約書の条件守らんかてちよつとも疚やま
 しいことあれしませんけど、それでも約束破つてるのんがやつぱ
 り何や済まんような氣イしてて、いつもろうじ出て来るとき、ま
 たあのぞつとするような声が後ろから「お姉さん」い工へんかと

ビクビクしてたのですが、ええあんばいにあんなりになつてしますのんで、あんな男のこッちやさかい、誓約書さい交してしもたら兄弟も糞くそもあつたもんやない思てるねんやろ、結局その方がこつちも助かる思てましてん。そういうしてるうちに光子さんは毎日々々「姉ちゃんどないぞしてくれへんか、もう一日も辛抱出来へん」いいなさいますし、自分は最後の手段として、わざと綿貫誘い出して駆おちけ落おちしようか思てる、その時は何処い逃げるいうこと前に私に教おせとくさかい、新聞に出されたりしてえらいことになつた時分に、もうええ頃や思たら掴つかまえに来てほし、そないしたらなんぼ綿貫かて二度と寄り附くこと出来んやさかい、自分の名譽きずつも傷けること覚悟の上でやつてみせる、「こつちで相談して

「ええ」いいなさるのんで、嗅ぎつけたらあの誓約書櫃たてに取つてあってに何とかいうて来るやろ、まあ、まあ、そんな非常手段最後まで取つときなさい」 いうて、——ほんまにあの時分、よつぽど思案に余つてしまもて、先生のとこい智慧ちえ貸してもらいに上ろか思たぐらいですねんけど、そんな厚かましいことようせえしませんし、お梅どんに聞いてみてもええ考ないいいますし、いつそのこと夫の力借ろかしらん、うそついてたこと或る程度までは白状して、ただ綿貫の迫害免れるような法律的の手段ないもんか知らん、話しそうに依つたら夫かて光子さんに同情寄せんこともないやろと、困つた揚句あげくそんなことまで考えましてん。ところがその夫が、或

る日突然、ちょうど私が行つてゐる時に電話も何もかけんといて笠屋町の宿屋い訪たンねて來たやありませんか。それが事務所の帰りしな、四時半ごろのこととで、二階で光子さんと話してましたら、「奥さん奥さん」というて慌あわてて仲居なかいさんが駆かけ上つて來て、「今奥さんの旦那さんがお見えになつて、お二人さんに会いたい」とたはります。どないしまひよ」いいますのんで、「何でやつて来たんやろ」とぎよツとしながら顔見合わしましてんけど、「とにかくあて会うて来るわ、光ちゃんそこにすツ込んでや」というて、玄関い降りて行きましてん。

その二十五

「やあ、えろう分りにくいとこやなあ」と、夫は格子のとここに立つてて、実は今さつき、伊勢の四日市よつかいちに帰る人あつて、湊町みなとまちの駅まで送つて行つて、戻りしなに心斎橋筋散歩してたら、光子さんのがさるとこ確かこの辺やつたなあ、きつとお前も来てるやろ思たのんで、急に訪たンねる氣イになつた。別に用事あるのんと違うけど、いつもお前がお邪魔に上つて厄介やっかいになるのんに、近所まで来て顔出しせんのも悪いような氣イするし、それに光子さんどないしてなさるか、お見舞いかたがた是非お目にかかる御礼いいたい、差支いなかつたら何処ぞで晩の御飯御馳走ごちそうしたい

思うねんけど、ちょっととも外い出なさること出来へんのんやろか
 と、何氣ない風していうのんですが、どうもそれだけやないみた
 いな氣イして、「この頃は大分目立つようになつてなさるよつて
 誰にも会わんようにしてなさるし、なかなか外い出るどこやあれ
 へん」いいましてんけど、「そやつたらまあ、会うだけでも会う
 て行きたい」いいますのんで、それでもいかんいう訳に行けしま
 せんさかい、「どないいなさるか聞いて来るわ」いうて、「光
 ちゃん、こないこないいうねんけどどないしよう。」「どないし
 ょう、ほんまに。姉ちやんどないいうたん?」「大分目立つよう
 になつてるよつて誰にも会いなされへん云うてんけど、是非ちょ
 つとでもいうてるねん。」「何ぞ訳もあるねんやろか。」「さ

あ、あてもそない思うねんし。」「あていつそ会うわ、そんなんやつたら。……今お春どんと相談したら、帶上げお腹なかの上へ締めてその上から着物着なさつたらええやろいうよつて、そないするわ。ほんまに懷ふところい綿詰めるようになつてしまもたなあ」いいなさつて、そのお春どんいう仲居さんに帶上げ借つて、「お客様階した下の部屋い通して待つてもろて」いうて、その間に私が手ツと伝うて身ごしらいしてましたら、またお春どん上つて来て、「そない申しましたけど、一分か二分でええさかい玄関でお目に。かかるいやはつて、上りやはれしません」いいますのんで、そやつたら早せんならんいうて大慌てに慌てて二人がかりで着せましたもんの、冬やつたらどないと胡麻化ごまかせるのんですが、肌襦袢はだじゅばんの上に明はよあ

石の单衣

かし ひとえ

もん着てなさるだけやのんで、どないしても妊娠のよう
に見えしません。「姉ちゃんあてのこと何ヶ月やいうといたん?」

「何ヶ月いうたか忘れてしもたけど、人眼につくいうたぐらいや
し、六ヶ月か七ヶ月になつてんと工合悪いなあ。」「これぐらい
やつたら六ヶ月に見えるやろか。」「もつと全体が円うに膨ふくれて
なんだらいかんし。」そんなこというて三人ともクスクス笑い出
しながら、「なんぞもうちよつと持つて来まひよ」と、またお春
どんがタオルやら何やら持つてきましたのんで、「あんたも一ペ
ん下さい行つて、とうちやん誰ぞに見られたいかんいいなさつて、
めつたに玄関いも出て来なされしませんさかい、とにかくお上り
下さいいうて、なるべく暗いあんまり見えんような部屋い入れと

いて 頂戴ちようだい」 いうて、かれこれ三十分も待たしといてから、やつとどうにか六ヶ月のお腹こしら揃えて行きましてん。「そんなりでかめへんいうたんやけど、浴衣ゆかたがけでは失礼やいいなさつて、着物着かえてなさつたのんで、……」と、そないいいながら夫の様子窺うかごうてますと、折れ鞄おしかばん傍に置いて、キチンと洋服の膝ひざがしら揃えてすわつて、「かいつて御迷惑か思いましたけど、あんなり御無沙汰さたしてますし、一ぺんお見舞いに上らんならん思てたとこいちようどこの前通りかかりましたさかい」 いうて、気のせえか光子さんのお腹の辺ジロジロ見てるみたいですねん。光子さんは「いいえ、うちこそいツつも姉ちゃんに我が儘ままばつかりいいまして」と、自分のために避暑に行くのん止めてしまいなさつたのん

氣の毒やとか、姉ちゃんのお蔭で淋しい思い慰めてもらって、大層有難い思てるとか、あんまり口数利きなさらんと 殊勝らしい聞えるようにあんじょういいなさつて、団扇で帶の上のとこ隠すようにしてなさるのですが、お春どんが氣イ利かしてくれたと見えて、昼間でも電氣点ともさんならんような薄暗い部屋の一一番隅の方にすわつてなさつて、なんせ風通しの悪い上にお腹にいろいろなもん詰めてなさるよつて、ズくずくに汗かいてはあはあ息してなさる恰好かっこいうたら、いかにも本物らしいて、「巧いこと芝居してなさるなあ」思いましたん。

夫は直きに座ア立つて、「えらいお邪魔しました、どうぞまたお出かけになれるようになつたら遊びに来て下さい」というて、

「もうおそいさかいお前も一緒に帰つたらええ」 いいますのんで、「何ぞ訳あるに違ひないよつて今日はこれで帰る。明日きっと待つて頂戴」と光子さんにそうツといて、しぶしぶ連れられて出て来ましたら、「バスに乗つて行こ」 いうて四つ橋の停留場い出て、そいから阪神で家い帰るまで、夫は不機嫌に黙つてしまつて、何いとも生返事なましかせえしません。家い這は入ると洋服も脱がんと、「ちよつと二階いおいで」 いうてどんどん上つて行きますのんで、こつちもあらかた覚悟きめて附いて行きますと、寝室のドーアぱたんと締めて、「まあそこいおかげ」と差向いに椅子いすにかけさして、暫くは物もいわんと、ほつと息ついて考え込んでるんです。「あんた、今日、何で突然あんなとこい来たん？」

と、重苦しい空氣破るために私の方からそないいうてやりました
ら、「うむ、……」いうてまた考えてて、「お前に見てもらいた
いもんあるねん」いいながらポケットから事務所用の封筒に這入はい
つたもん出して、テーブルの上にひろげたのん見ましたら、そん
なり私は真っ青になつてしまいましてん。どないして手工に這入
つたのんか、「ここに署名してあるのん確かにお前に違ちがいないか」
いうて夫はあるの誓約書眼工の前い突きつけるのんです。「断ことわつと
くが、僕はお前の心持次第では決して事を荒立たそう思て工へん。
これが僕の手工に這入った徑路についても聞きたいのんやつたら
聞かしてやる。けど第一に、事実お前が署名したもんか、それと
もこれはニセ物やのんか、その点ハツキリさしつきたい。」……

たんす

かぎ

ああ、綿貫に先越された！ 私の持つてゐる書付の方は簾笥に鍵か
 けて隠したありましたから、これは綿貫のんに違ひないのんで、
 こんなことするためにこの誓約書書かしたのんか！ ほんまに私
 は、こないだから夫に口利いてもらお思てて、光子さんのことも
 打ち明けた方が得なことは話してしまお思てたのんに、さつき不
 意討ちに笠屋町たい訪ンねて来られて、あないなつたら妊娠してな
 さるのんうそやいうこと今更いい出しかねて、うその上塗りして
 しもてんけど、こんなことになるのんやつたらあの時白状しとい
 たらよかつた！ 「おい、黙つてたら分らん、返辞したらえやな
 いか」と、夫は出来るだけ腹の虫おさえて、やさしい、静かな声
 出して、「黙つてるとこみたら、これお前書いたと認めてええ

ねんなあ?」 いうて、そいかだんだん話し出すのん聞いてます
 と、五、六日前に今橋の事務所の方い突然綿貫が訪たンねて来て面
 会求めた。そいでどんな用事か思て応接間い通して会うてみたら、
 「今日お訪ンねしたのんは、実は折入つてお願ひしたいことある
 のんです」というて、「多分あんたも御承知でしようが、僕と徳光
 光子とは結婚の約束したあるばかりでなく、既に光子は僕の種ま
 でも宿してますのんに、こつちの奥さんが中に這入つていろいろ
 邪魔しなさるのんで、光子の仕打ちこの頃日増しに冷淡になつて、
 今ぐあいの工合つではいつ結婚してくれるのんか分らんような状態にある。
 就いてはあんたから奥様に意見して下さいませんか」というよつて、
 「僕の家内が何で邪魔するのんですか。委くわしいことは知りません

けど、家内はあんたがたの恋愛に同情してて、一日も早う結婚しなさるのん祈つてるよう聞いてましたが」いうたところが、

「あんたは奥様と光子との関係がどんなことになつてるか、ほんまの事情御存知ないのんです」いうて、今でも前のようやいっことそれとなしに仄めかした。^{ほの} けど初対面の男の話をそのまま信用する氣イもなかつたし、現にその男の種宿してるもんが別に同性の人とそんな風になつてるというのんもけつたいなし、何やこの男気イ触れてるのんと違うか知らん思てたら、「お疑がいになるのんも尤もですが、ここに確かな証拠あります」^{もつと} いうてこの書付出して見せた。夫はそれ読んだとき、自分の妻が未だに自分欺いいまあざむ てたことにも不愉快感じましたけど、それよりもなお不愉快やつ

たのんは、妻と見ず知らずの男とが自分の知らん間に兄弟の約束してるいうことやつた。第一人^{ひと}の女房とこんなもん取り交^{かわ}しといて、その女房の亭主の前いれいれいしいに見せつけながら、それに対する一言のいい訳もせんと、まるで刑事が犯罪の証拠^{つか}掴んだみたいに得意そうにニヤニヤしてこの男の気知れん思たら、一層むかむかして來たとこい、「あんたは此処に署名したあるのん、あんたの奥様の手工やいうことお認めになりますやろなあ」いいますのんで、「なるほど、見たとこではたしかに家内の手工のようですが、それより先に伺いたいのんは、ここに署名してると男は何処の人です」いうてやつたら、「それは僕です、僕が綿貫自身です」というて、まだその皮肉悟^{さと}らんみたいに平氣な顔してゐる。

「この署名の下に捺してあるもん何ですか」いうたら、それはこないこないの訳でと臆面ものうその時のこと細こうに話し出すのんで、みんなまで聞かんうちに腹立つて来て、「これ読んで見ると、あんたと、光子さんと、園子との関係は委しいに規定してあるが、園子の夫である私については何の考慮も払われておらん。私ちゅうもんは全然眼中に置かれてん。あんたも此處に署名しておられる以上当然責任分たれるもんと考えるのんで、一往あんたの立場からその弁明求めたい。まして今のお話のようやと、この誓約書は園子の意志から出たんやのうて、半ば強制的に結ばれたようと思われるが」いうてやつた、そしたら恐縮するかと思いのほか相変らずニヤニヤ笑てて、「その書付にもある通り僕と園子

さんとは徳光光子に依つて結ばれてるのんで、その関係は園子さんの夫であられるあなたの利害とは始めから衝突してます。もし園子さんがあんた眼中に置かれたら、光子とあないな間柄になることもなかつたやろし、こんなもん交すまでもないし、それこそ僕の何より望むとこですけど、妻たる人が自ら進んでしなさるもんを他人の僕がどないすることも出来しません。僕にいわしたらこの書付のような関係認めることが、既に園子さんに対して非常な譲歩してるのんです」 いうて、あべこべに夫の監督の不行き届き恨むような口ぶりで、兄弟の約束したいうのんは密通したのんと訳が違う、そやら自分は不道徳なことしたとは思てエへんいうのんです。

その二十六

そんで夫は、そんな書付手工に触れるのんも汚らわしい思いましてんけど、何せ相手が非常識な人間のことやさかい、この男にこんなもん持たしといたら何するか分らん、これはどないぞして取つてしまふ方がええ思て、「お話はよう分りました、あんたの仰つしやる通りやとしたら、頼まれいでも夫たるもんの責任として放つとけません。けど僕としても、あんたとは今日始めてお目にかかつたばっかりやし、一往家のいうことも聞いてみんこと

には片手落ちになる。就いてはこの書付_{しばら}暫く貸しといてもらえませんか。これ眼の前い突き付けてやつたらきつと白状しますやろけれど、そうでもなかつたら、なかなか強情な奴ですさかい」 いましたら、貸すとも貸さんともいわんといて、急に大事そうにそれ膝_{ひざ}の上に置いて、「しかしあんたは、もし園子さんが白状しなさつたらどういう処置お取りになるのんです」 いいますのんで、「どういう処置取ろと、その時の都合次第やさかい、今から明言する訳に行かん。僕はあんたに頼まれたから家内を詰問_{きつもん}するのんやない。僕はあんたの利害のために動くのんやいうことを承知しの面目、自分の家庭の幸福のために動くのんやいうことを承知して下さい」 いうたところが、何や嫌ア_{いや}な顔して、「僕かて何も、

自分のために働いて欲しいというのんやあれしませんが、今度の事は、あんたの利害と僕の利害とが偶然一致してゐたのんで、伺うたのんです。あんたかてそれは認めなさるやろ」 いいますよつて、「そんなこと僕は考える余裕もなし、また考えとうもありません。失礼ながら、僕はあんたと、ぐるになつてそんな事件の中ま
い捲き込まれとうないのんです。僕は自分の自由意志で自分の妻を処分するだけです」 いうてやつた。すると「ああ、そうですか、そんなら仕方ありませんが」 いうて、「ほんまいうたら、僕かてあんたには縁もゆかりもないのんですから、こんなこと頼みに来られる義理やないのんですけど、そいでも僕、もし園子さんが光子と一緒に逃げるようなことあつたら、困るのんは自分ばかりや

ない、それ知つてながら黙つてたらあんたに対しても不親切や思
て来たのなんですが」いいながら、ジロジロ人の顔のぞき込んで、
「そないなつたら、あんたかて嫌いやでも応おうでも事件の中に捲き込ま
れてしまひますで」いいますのんで、「いや、御好意は分ります
た。御親切に對しては感謝します」いうてやりますと、「ただ感
謝するいわれただけでは困るのんです。一体あんたは、まさか園
子さんに逃げられるようなへマな事しなさらんやろ思いますが、
そいでも万一逃げられた場合にはどないなさいますか、逃げたも
んには未練ないいうてアキラメておしまいになりますか、それと
も何処までも追いかけて行つて取り戻戻そういうおつもりですか、
そこのとこをハツキリきめといて下さい」いいますよつて、「僕

は自分の行動について、その時になつて見んと分らんこと今から他人に約束したり、それに撃^{せい} 肘^{いちゅう} しられたりするのんイヤやのんです。まして夫婦のあいだのことはあくまで夫婦のあいだだけで解決つけます」いいましたら、「しかしあんたは、どんな事あつてもよもや園子さんを離縁なさるようなことがありますまいな」というのです。そのいい方が変に厚かましいて、ひとつこうにねちねち絡み着いて来ますのんで、自分の妻離縁しようとしまいと、余計なお世話やないか、何もあんたがそんな心配する必要ありますまいいうてやりましたら、「いや、そいでもあんたは園子さんの実家に恩義あるはずや」とか、「ちよつとやそつとの不都合があつたからいうて、園子さん追い出したら義理が済まんやろ」と

か、多分光子さんから聞いたのんですやろが、そんな内輪の事情までちゃんと知つてて、「あんたも立派な紳士やよつて、まさかそんな不徳義なことしなされへんやろ思います」いうたりするのんで、夫もしまいには腹に据えかねて、「あんたは一体何しに来たのんや。何のためにそんな関係もないこといつまでもべちゃべちやしやべつてるのんや、あんたに注意してもらわんかて僕は僕で紳士の道守りますけど、それがあんたの利害と一致するかどうかは保証する訳に行けしませんから、どうぞそのつもりでいて下さい」というたら、「ふん、そうですか、そんなら折角ですがこの書付お貸しだす出来ません」というて、膝の上に置いてあつたのん丁寧に封筒い入れて、内ぼところい収^{しま}うのんやそうです。夫

はそれが欲しかったことは欲しかったけど、そんな行きがかりになつてしまらもうしようがない、かいつて弱味見せたらあかん思て、「ええ、ええ、僕も強いて拝借しようとは思いませんから、御自由にお持ち帰り下さい。但し一言いちごんお断りしておきますが、あんたがそれを、僕の手工経て僕の家内に示すことを拒まれる以上は、家内が事実を否定した場合に、僕としてもその書付に信を置くこと出来んかも知れない。僕は当然、初対面のあんたより家内の方を信じますから」というてやつた。そしたら独りごとのようには「とにかく夫が細君に甘いのが間違ちがいの起おきる原もとやのんですな」いうて、「なあに、この書付と同じひともんが園子さんのとこいも行つてますよつて、何処ぞ搜しなさつたらきつと出て来ますで。尤も

そんなことしなさらんかて、腕を出さして見なさつたら証拠が残つてるはずです。」——と、そないな憎まれ口いうて、「お忙しいとこえらいお邪魔しました」と、わざと落ち着いて挨拶して出て行きますのんで、それを廊下まで送つて行つて、呆れた奴や思いながら部屋に戻つてほつとしてますと、ものの五分ぐらいした時分、またコツコツとドーアをノックして、「やあ、只ただいま今は失礼しましたが、ちょっと、あのうもう一遍お邪魔さしてもらいます」というて、何と思ったのか、今度は妙にニコニコとあいそ笑いしながら、そのほん五分ぐらいのあいだにまるで人間変つたみたいな表情して這入つて来ましてん。それが夫にはまた気味わるうて、ぎよつとしながら黙つて見てましたら、テーブルの前い来る

て、お辞儀して、「おかげなさい」ともいわんうちに今腰かけて椅子にかけて、「さつきは僕が悪かつたです。僕は今、命にかけてもと思う人を取るか取られるか、大事な瀬戸際にあるもんでから、自分のことにばっかり眼工くらんで、あんたの感情尊重する余裕失うてました。何も惡意あつてあんなこというたんやありませんから、さつきのことは水に流して下さい」いいますよつて、「それをわざわざいいに来なさつたんですか」いいますと、「はあ、そうです、外い出てから考えてみたら、自分が悪かつたいうこと分りましたのんで、何や知らん氣イ済まんもんですから詫まりに来ました」いうて、「それは御丁寧なことです」いうてやつても、「はあ、……」いうたなり、まだモジモジと腰かけて、

けつたいな作り笑いして、「実はあのう、こうしてこんなことを
お願ひに来たりお詫びに上つたりしますのんも、よくよく苦しい
立場に置かれて思案に余つた結果やのんですが、どうぞ僕のこの、
切ない、遺る瀬ない、泣くに泣けん胸の中を推量して下さい。そ
れさい察してもらえたさつきの書付お貸ししてもよろしいのん
です」いいますのんで、「察してくれいうて、どんな工合に察し
たらええのんですか」いいましたら、「正直なとこ、僕は何より、
あんたが園子さんを離縁しなさるようになるのんを恐れるのんで
す。そないなつたら園子さんヤケ起してますます邪魔するさかい、
光子と僕が結婚する望みなおのことないようになつてしまふ。僕
かてあんたがめつたにそんなことしなされへん思いますけど、ど

ない考へても心配やのんは、園子さんが光子連れ出して逃げる場合です、何遍も何遍もくどいようですが、よつほど監督嚴重にして下さらんと、きっと近いうちに逃げるにきまつてますのんで、一遍そんなことあつたら、たといあんたが心のうちでは園子さん赦^{ゆる}してやろ思いなさつても、世間の手前そうも出来んようになるかも分らん。それ考へたら僕は危険がもう眼の前い迫つてる氣にして、夜もおちおち寝られへんのんです。」——そないうて、「どうぞ、どうぞ、お願ひします」と、額をテーブルい擦りつけようにして、「そういう訳ですから、自分の都合のええことばつかりいう勝手な奴やとお思いになりますやろけど、僕の窮境察して下さつて、これから後、どんな事あつても園子さん逃がさん

ように責任持つて監督する、そいでもまさか括り着けとく訳にも行けしませんさかい、逃げられることがないとは限りませんけど、そないなつても追いかけて行つてきつと家い引き戻すということ約束して下さい。それさい『うん』いうて下さつたらこの書付お預けします」いうて、「今更こんなこと念押さんかて、あなたは園子さん非常に愛してなさる、決して離縁しなさらんことはよう分つてるのですが、それを一と言あんた御自身の口から聞かして欲しいのんです。あんたかて僕を哀れんで下さつたら、お腹の中でちゃんときまつてるこというて下さつてもええやありませんか。」——夫はそれ聞いてるうちに、つくづくこの男イヤ味な奴^やツちや、初めからもつと素直に、人の感情害さんようにいえるもん

を、わざとほじくり返すような余計なこというて、顔色見い見い態度いろいろに変えたりして、何ちゅうけつたいな男やろう、これなら女に好かれるはずないよつて、光子さんかて厭になんなさつたかも知れん、よっぽど損な性質に生れついた人間や。そない思たら今度はほんまに可哀そうになつて来て、「そしたらあんたも、この書付将来明るみい出すようなことせんいうて誓うてくれますか、そして僕が必要と認めるあいだ保管さしといてくれますか、それ承知なら、僕もあんたの条件容れてもよろしいです」いうたら、「この書付は、そこにも書いてある通り双方合意の上でないと人に見せられんようになつてるのんですが、既に園子さんの方に背信行為あつたと認めますのんで、僕があんた方困らして

やろいう氣イあつたら、これ種にしてどんな事でも出来んことあれしません。けど僕そんな卑怯な真似する人間でないことは、これわざわざあんたのとこい持つて来てお預けするのでも分るやありませんか。なあに、相手に誠意なかつたら何ぼこんなもん書かしても反古ほうぐと同じですよつて、お役に立つのんならどうぞ持つて行つて使って下さい。僕の方はただ、さつきの二力条さい約束して下されば満足やのんです」いいますさかい、そんならそれと、何で初めからいわんのんやろ思いながら、「そいでは確かに預りします」いうて受け取ろとしますと、「ちよつと待つて下さい」というて、「はなはまだ恐縮ですが、後日のために一と筆預かり証文書いてもらえませんやろか」いうのんやそうです。それも承知しまし

たいうて、「右正ニ御預り致候也」と書いてやりましたら、「その後いもう一と筆書き足して下さい」いうのんで、「何を書くのんす」いうたら、「下名ハ右証書ヲ保管中左ノ条件ヲ 遵_{じゅん}守_{しゆ}スルコトヲ誓ウ、一、下名ハ下名ノ妻ガ妻タル者ノ行為ニ悖ルコトナキヨウ責任ヲ持ツテ監督ス、二、下名ハ如何ナル場合ニオイテモ決シテ妻ヲ離縁セズ、三、下名ハ所有主ヨリ請求サレタル時ハ何時ニテモ保管中ノ証書ヲ提示シ、モシクハ返却スベキ義務アルモノトス、四、下名ガ保管中ノ証書ヲ紛失シタルトキハ、何ラ力他ニ所有主ヲ満足セシムル保証ヲ与エザル限り、第一条及ビ第二条ニ規定シタル義務ヨリ解除セラルコトナシ、——」それを一遍にすらすらいうのんと違_{ちが}て、一つ書いてしまうとまた考えて、

「あ、もう一と筆願います」いうて、だんだんそんな工合に書き足さずのんで、何や、馬鹿々々しい、三百代だいざい言みたいたこという奴や思て、面白半分に好きなよくなこといわして、その通り書いてやつて、「ではこの後ただい但ただし書きを一つ入れますで。——但シ、下名ノ保管スル証書ガ虚構ノ事実ニ基もとづケルモノナル時ハ凡ベテノ約束ヲ無効トス、——なあ、こない書いといても差支いあれしませんやろ?」いうて、はつとしたらしゆうどぎまぎしてる様子でしてんけど、さつさと構わんと書いてしもて渡してやつたら、急にまた未練出たようにぐずぐずしながら、そいでも仕方なしに書付置いて行きましてんと。夫はそこまで一と息に話して来て、「どうや、この書付お前書いたのんに違ひないのんか。お前の方

にもこれと同じもん行つてゐのんなら出して見なさい」いいなが
ら、じつと返答待つてますのんで、私は黙つて立ち上つて、鍵の
かかつて**る抽出**ひきだあし開けて、そこに隠してあつたもう一通の方持つ
て来て、無言のままテーブルの上い置きましてん。

その二十七

「ふーん、これある以上はこの書付ニセ物やないのんやなあ？」
そないいわれても、やつぱり黙つて頷いて見せますと、夫は私が
どんな気持でいるのんか見当つかんもんですさかい、疑がい深そ

うに眼工ぱちぱちさして、「そしたらこの証書に書いたあることみんなほんまの事実やのんか」いうのんです。「そら、ほんまのこともあるねんけど、うそのこともあるねん。」——私はさつき夫の話聞きながら、もうこないなつたら隠し立てしたかてしようがない、いつそ綿貫の計略の裏搔かづいて、自分に都合ええことも悪いことも、何でも彼でも残らず打ぶッちやけて、あとは成り行きに任してやろ、ひよツとしたら案じるより生むが易やすうて、どんなうまいことあるかも分れへんと、すつくり腹きめてましたのんで、先ず第一に綿貫の秘密すっぱ抜いてやつて、そやさかい光子さん妊娠してはるいうのんうそやいうこと、さつき夫が会うた時はお腹にいろいろもん詰めてなさつたのんやいうこと、あの笠屋町

の家にしたかて、常時彼処にいなさるのんでも何でもないこと、この証文書かされた時は綿貫にあんじよう嵌められて、脅迫しられたのんやいうこと、自分が欺だまされてたことから夫欺してたことまで、なんでも二時間ぐらいかかつて 一切合財話いつさいがっさいしてやりましたら、「ふん、ふん」ときどき溜たため息いきつきながらしまいで聞いてしもて、「そしたらお前の今いうたことちよつともうそないねんなあ? 綿貫いう男にそんな秘密あること確かやねんなあ?」 いうて、「ほんまいうたら、自分の方にもちやんと調べ届いてる」 いうのんです。それが、夫が綿貫に会うたのんは四五日前のことですのんに、そいから今日まで知らん顔して事件伏せといったいのんは、何や綿貫いう奴の素振り怪しい、何ぞもつ

と深い訳あるのんやないかいう気イしたのんで、私に打つかる前に一往取り調べてやろ思て秘密探偵に頼んだとこが、そんな商売大阪にかつて 仰ぎょう山さんあれしませんさかい、こないだ光子さんが頼みなさつたのんと同じとこい行つてしまひたのんで、「その人なら大概のこと分つてます、前に調べたことがあります」というで、その場アで直きに答えてくれた。そこで綿貫たが訪ンねて來た日の夕方には、もう一と通り種上つてしまひたのですが、夫はあんまり意外やのんで同名異人の間違いやないか知らん思いましてんけど、探偵の方には光子さんとのいきさつまで分つてて疑がう余地あれしませんし、……そないなつて來ると、今度は光子さん妊娠してなさるいうことや、笠屋町の家のことや、私と光子さんと

の関係や、なんとも腑に落ちんことだらけですよつて、また改めて光子さんの方調べさした。その報告の届いたのん今朝けさのことでのいでも夫はまだ半信半疑でしたさかい、自分で様子見て来てやろ思てさつき不意に笠屋町訪たンねてやつたいうのんです。「そしたらあの時、お腹に物詰めてはつたこと分つてたん?」私はわざと打ち解けた調子でそないうてやりましたけど、夫はそれには答えんと、「僕はお前の今日の態度いつもより柔順で正直なこと認める。けどその正直さは過去の罪悪後悔してたためやのんかどうか、それハツキリいうて見なさい」いいますねん。「お前かて自分の過去の行いが、どんなに道に外れてたかいわんかて分つてるやろ。僕もそんな不愉快なことほぜくり返す気イないねんよつ

て、こいから後、本氣で罪の償つぐないする決心あるかないか、それ聞かしてくれたらええ。どうせ綿貫との約束やかい真面目に守る必要もないねんけど、とにかく僕はお前離縁せんいうことあの男の前で誓うた。それに考えてみたら僕自身にも手落ちあつた。夫としての監督怠おこたつてたいう綿貫のいいぐさにも一往理窟りくつないことないし、光子さんの方から苦情申し込まれたら、お前より先に僕手工ついて詫あやまらんならん思てるぐらいやし、こんな事になつたのんは夫婦共同の責任みたいに感じてる。第一新聞にでも出ることあつたら、何とお前の親たちに言いいわけ訳しよう。それも普通の意味での恋愛やとか三角関係やとかいうのんやつたら、まだ話しよも同情のしよもあるけど、この証文に書いたあるようなこ

と、誰が読んだかて氣違いとより思工へんで。ま、そない思うの
 ん身^{みび}龜^{いき}肩^{かた}かも分れへんが、お前のいうのん聞いてみたらもともと
 綿貫^{みび}いう奴から起つたことで、ほんまに悪いのん彼^あの男一人や。

お前かて光子さんかてあんな男に係り合わなんだら、まさかこん
 なことにもならなんだやろし、徳光さんの家かて、それ分つたら
 どない思やはるやろ。僕今まで光子さん悪いのんや、あの児^こ不良
 少女やよつてお前に口クでもない感化及ぼすのんや思ててんけど、
 親の身イになつたら綿貫^{みび}いう男八つ裂きにしても飽き足らん思や
 はるやろ。何処い出しても恥かしない器量自慢の娘持つてて、あ
 んな奴に見込まれるやんて、僕とこよりも一つ不仕合わせや。
 ……」夫は私の激しやすい性質に逆ろうたらいかん思てますのん

で、理性に訴えるより感情的に動かすよう努めてて、それが一種の手工やいうこと見え透いてますねんけど、親のことやかい持ち出されて、殊に光子さんのこと、そないに不憫らしゆういわれましたら、自分の胸に思ってことと一緒やのんで、急に悲しいになつて来て、眼工に一杯涙溜め溜め聞いてますと、「なあそやないか？」と夫は涙で光つてる頬べた視詰めながら、「泣いてばつかりいてても分れへんさかい、よう分別して、今度こそ最後の、うそのないお前の考いうてみなさい、僕はお前がどうしても家出するいうのんなら、そら仕方ない思てる。けど、ほんまの僕の気持いうたら、憎いのんあの男だけで、お前も光子さんも可哀そうな目工に遇うたんや思てるねん。かりにお前と離別せんならんこと

になつても、お前が今みたいな真似まねつづけてたら、いつまで立つてもその『可哀そうな』いう心持残つてて、僕も長いこと苦しまんならんし、お前にしたかてまさか光子さんと結婚する訳にも行けへんやないか。僕の監督離れたかて、いつまで世間が許しとくはずないさかい、仰山の人に心配かけた上自分も恥搔かいて压制的に止めさせられるか、そないならんうち自分で悟つて直すようになるか、孰方どっちなどお前の心がけ次第やで。」「そんでもうち、……こないになつたのん因果やさかい、……死んであんたに詫あやまります！」夫はビクリとして飛び上るような恰好かっこしましてんけど、その時私はわッと泣きながらテーブルに俯伏うつぶしてしまってん。

……「どうせうち、こないになつたら誰にかて見放されるのん当

り前やし、生きてたかて世間に顔向け出来へんさかい、……どうぞ死なして頂戴、こんな腐った人間にあんたかて未練ないやろし、……」「……誰がお前見放すいうた？ 見放したもんなら意見するはずないやないか？」「そないにいうてくれはるのん有難い思いますけど、今更うち一人ええ児になつて光子さんあんなりに放つてしまもたら、どんなに難儀しやはるこつちやら、……あんたかて一番光子さん可哀そうやいやはつたやないか。」「そういうた、いうたからこそお前ら救い出そうとしてるのんや。……まあ、お聞き、お前えらい考え方違ひしてるで。お前みたいな意味でどんなに愛情捧げたかつてちよつとも難儀^{ささ}_{すく}救てやることになれへんで。僕はお前のことばつかり心配してゐるやあれへんで。徳光さんと

こいも行て、よう訛話して一切あの男近づけんように厳重に監督して、お前との交際も遠慮してもらうように注意するのんが、僕の義務やと思ってるねん。そないにしてこそ光子さんのためやないか。」「あんたみたいなことしなはつたら、うちより先に光子さん死にやるし。……」「なんでや？ なんで死ぬのんや？」

「なんででも死にやるし。……今までかつて死ぬ死ぬいうてはつたんようようのことで止めててんもん。……そやさかいうちも一緒に死ぬわ。死んで社会に詫^{あや}まるわ。」「馬鹿なこといいな！」

そんなことして僕や親たちに迷惑かけて、それが何で謝罪にならねん！」

その二十八

私は夫が何ちゅうても耳に入れんと、「いいえ、死にます、死なして 頂ちょう戴だい」 いうてテーブルに俯伏うつぶしたなり、やんちゃな児こ才みたいに泣いてましてん。もうこの場合「死ぬ」 いうてやるのん一番ええ。それより外に方法ない。……私の頭の中にあるのは、どないしたらこいから先も今までのようになくこと出来るやろかと、そればつかりですのんで、正直にいうたら、夫に離縁こわしられるのん一番恐こわい。どうせ此處ここまで知れてしまふ以上、自分と光子さんとの間あいだがら柄 納得さして、それ承認してくれたら、

自分は夫大事にする、きっと夫婦仲も円満に行く、綿貫の奴どん
 な妨害したところで、証拠の書付こつちに取つてしまつたあるし、
 あんな男のいうことやつたら信用するもんないやろし、たとい光
 子さん何處どこぞい行きやはつても、ちゃんとした家庭の奥様同士ど
 ないに仲好よしてたかて誰が何ちゆうもんあるやろ。前とちよつ
 とも変つたことないばっかりか、前よりしつくりと行くのんやし、
 むやみに事荒立てるよりもその方が何ぼ優まさしか分れへん。夫は私
 に無鉄砲な事しられたら、第一に心配やのんで、お腹なかの中では私
 以上に離縁恐れてて、事ことなか勿れ主義に傾いてることよう分つてま
 すさかい、「そないに束縛するのんならほんまに家出してやるぞ」
 いうとこ見せて、そいからそろそろ注文持ち出して、——と、私

はあらかた思案をきめて、二日かかつても三日かかつてもきっと
 しまいにはいうこと聴かしてやるつもりで、なるべく反感挑発せ
 んように、何いわれてもただ大人しいに無言のうちに涙ぐみなが
 ら、堅い決心隠してゐみたいに割りと落ち着いてましたので、
 それが夫にはなお氣味悪うて、その晩はどうど夜の明けるまで一
 睡もせんと傍そばに着いてて、便所いまで一緒に来るのんです。そい
 で明くる日は一日事務所休んでしもて、御飯も二階に運ばすよう
 にして、じつと睨にらみ合いしたなり、ときどき顔色うかごうては、
 「こないしてたら体づけへんさかい、一と寝して頭休めてから、
 ゆっくり考え直して御覧」とか、「とにかく死ぬやの家出するや
 のいうこと、思い止まるいう約束してくれ」とかいいますねんけ

ど、私は黙つていやいやして見せるばかりで、心のうちでは、此処まで来たらもう大丈夫や思てましてん。ところがそのまた明くる日の朝、夫はどうしても一時間か二時間事務所い出んならん用あるのんで、留守の間は絶対に外い出工へんし、電話もかけへんいうこと誓うか、それイヤやつたら大阪い連れて行くいいますよつて、「うちかてあんた一人で出したら心配やさかい附いて行きます」 いいましたら、「何が心配やのんや」 いいますのんで、「うちに内証で徳光さんとこいいつけ口でもしに行かれたら、それこそ生きてられへん」 いいますと、「僕かつてそんな、お前に納得させへんうちに無断で不意討ち喰わすようなこと絶対にせ工へん。僕がそれ誓ちこたらお前も誓うてくれるか」 いいますねん。

そいで私も、「あんたさい意地の悪いことせ工へんいうのんなら、留守のあいだぐらいじつと待つてますさかい、安心して仕事して頂戴。うちもその間アに一と休みしますわ」いうて、夫出してやりましたのんが九時頃のこと、^{しばらく}寝台に横になつてましてんけど、妙に興奮してしもてて寝られるどこやあれしません。それに夫から、大阪に着いたら直ぐ電話かかつて、そいから三十分置きぐらいにチヨイチヨイかかつて来ますさかい、何や知らん気分落ち着かんと、部屋の中往つたり来たりしながらいろいろなこと考えましたら、そのうちにふつと思いついたいうのんは、毎日々こんな工合に根競こんくらべしてたら、綿貫がどないなわるさせんとも限らんし、光子さんかて、一昨日あんなり別れてしまつてどない

思てるか、昨日かて一日待つてはつたやろ。どうせ口先で「死ぬ、死ぬ」いうたぐらいでは威嚇し利けへんさかい、いつそ早よ^は尙明くように、それもあんまりえらい騒ぎにならんように、奈良とか京都とか、何處ぞ近いとこへ逃げたらどやろ。そこでお梅どん頼んで、わざとビツクリしたみたいに夫のとこへ駆け込んでもらって、「今お宅の奥さんと家のとうちやんと何處そいい逃げはりました。家い知れたらえらいことになりますさかい早よ^{つか}掴まえとくなはれ」というて、もうちよつとで死ぬいうとこへ夫連れて来てもらう。……それやつたら、今日置いたら機会あれへん。……と、そない思いましてんけど、外い出る訳に行けしませんさかい、「あのなあ、^{くわ}委しい話会うてからするよつて、大急ぎでちよつと家まで来てほ

しい」 いうて電話で光子さん呼んどいて、「旦那さんにいうたら
いかんで」と、女子衆おなごしゆに口止めしといて待つてましたら、そい
から二十分ぐらいして来やはりましてん。

電話かかつて来るうちは夫大阪にいるちゅうこと確かやのんで、
かいつて安心ですねんけど、そいでも不意に帰つて来たら裏口か
ら出てもらお思て、光子さんの日傘と草履庭ぞうりの方い廻しといて、
逃げる時の用心に下の座敷で会うたのですが、光子さんは初め
から心配そうな青い顔して、昨日一日見なんだ間にえらい寝やつれて
なさつて、私の話聞きなさるともう涙ぐみながら、「そしたらあ
れから姉ちゃんの方にもそんなことあつてんなあ」いいなさつて、
自分もあの日イの夕方から昨日にかけてさんざん綿貫にいじめら

れた。綿貫のいうのんには、「あんたと姉さんとグルになつて僕
 欺だまそうとしてるさかい、僕の方もその裏搔かいてこないだ今橋の事
 務所い行つて、姉さんのことみんな柿内氏に話して来てやつた。
 そやさかい笠屋町い様子探りに来たのんや。あないして姉さん連
 れて行かれてしもたら、もうなんぼ待つてたかて来るはずあれへ
 ん。」

その二十九

そないいうて綿貫は、「僕と姉ちゃんと証文換えことしてたこ

と、あんたかて薄々知つてたやろが、もうあんなもん反古になつたさかい、証拠のために今橋い預けて来た。ここに預り証書ある」
 いうて、懷から出して見せて、「そら、この通り書いたあるやろ、
 ——下名ハ下名ノ妻ガ妻タル者ノ行為ニ悖ルコトナキヨウ——」
 と一々箇条書き読んで聞かして、それも自分の都合悪い但し書きのどこ手工で隠してて、「柿内氏からこの書付取つた以上は、もう姉ちゃんの方心配ないよつて、あんたも僕に証文入れなさい」
 いいながら、また懷からその文案みたいなもん出して見せますねんと。それ読んでみると、光子さんと綿貫とは永久に一心同体やとか、死を以て綿貫に従わないかんやとか、その約束に背いたらこないこないしられるやとか、何ぼでも虫のええこと書いたあつ

て、「これでよかつたら此処い名ア書いて判捺おしなさい」いうの
 んですけど、「そんなことするのんイヤや」いうて断りなさつて、
 「あんたみたいに何ぞいうたら証文書け証文書けいう人あれへん、
 そないしてはそれ種に使フコて人オドスつもりやねんやろ」いいなさ
 つたら、「あんたさい心変りせ工へなんだら、恐がる道理ないや
 ないか」いうて無理にもペン持たそとするのんで、「お金の借り
 貸しやあるまいし、証文で人の心括くくつとくこと出来る思てるのん
 やろか。何ぞ外に目的あるねんやろ。」「あんたこそ判つくるのん
 イヤやなんて、心変りする氣イやねんやろ。」「ふん、そら、な
 んぼ判ついたかて先のことは分れへん」いうてやんなさつたら、
 「そない僕に楯たてついたら今に難儀することあるで。あんたが証文

書かんかて、オドスつもりやつたら此処に何ぼでも材料あるねん」
いいながら、紙入れの中から小さい写真出して見せるのんやそうです。それがビツクリしたことには、私の夫が取り上げてしまつたあの誓約書の写しやのんで、こないだ今橋い持つて来る前に、ちやんと写真に映しといた、柿内氏はもうあの書付返さんつもりかも知れんけど、そんな手工に乗るような僕やあれへん、この写真と、預り証ど、この二つ新聞記者にでも見せたら、売つてくれいうて飛び着いて来るやろ、僕かて必要に迫られたら何するや分らん。——そないいうて、何でも僕のいうこと聴け、聴かなんだらあんたの前途真つ暗にしてやるいいますよつて、「それ見なさい、その通りあんた卑劣やないか。あてかて覚悟してるさかい、それ

だけ材料あるねんやつたら、この上人イジメたりせんと、新聞に
でも何にでも売んなさい」いいなさつて、そんなり喧嘩別れにな
つた。そいであんまり弱いとこ見せたらいかんよつて、今日は笠
屋町いも行かんといて、どないするか様子見てやろ思てなさつた
ら、私のとこから電話やつたんで、飛び立つ思いで顔見に来たい
いなさいますねん。

まさか綿貫かて、いよいよあかんいう見きわめも付かんと自分
の損にもなるようなことせエへんやろけど、こないなつて來たら
なおのこと夫味方に入れるのん第一やいうのんで、そいから私の
考えてた計略実行することになりましたのんですが、光子さんは
「何處ぞ近いとこへ逃げるのんやつたら、あて所の浜寺の別荘が
どこ

ええし」いいなきつて、彼処あつこは今年留守番の夫婦行いてるだけやさかい、海水浴して来るいうてお梅どん連れて行くのんなら、四日や五日泊つてたかてちよつとも家の方心配ない。そこで私の方はそうツと此処の家抜けて出て、難波駅なんばで光子さん待ち合わして、三人で浜寺い着く時分には、夫は私のいんようになつたのん氣付いて、何は措おいても光子さんの家い電話かけるにきまつたある。そしたら直ぐ居所いどこ分つて浜寺の方いまたかけて来る。その時お梅どん電話口い出てもろて、「今お宅の奥様と家のとうちやんと薬飲んで昏睡こんすいしてはる。ちゃんと書き置きまで書いたあるのんで、覚悟の自殺にきまつてます。今本宅とあんたさんとこい電話かけよとしてたところです。直きに来とくなはれ」いうたら、き

つと慌てて飛んで来るやろ。——このお梅どんの口上も大役です
 ねんけど、それより昏睡して見せるちゅうこと、なんぼ狂言にし
 たかてやつぱりほんまにそんなもん飲まんなりませんのんで、お
 医者はんが見てもこれなら生命に別ツ條ない、二、三日安静にし
 といたらええいわれる程度にするのんには、どれぐらい飲んだも
 んやら分量分れしませんねん。けど常時使てるバイエルの薬やつ
 たら、そない恐いことあれしませんし「小ツちやい方のタブレッ
 トやつたら一ト箱飲んでも死ねへんいうし。そやさかいあれもう
 ちよつと控え目工に飲んだら大丈夫やし。あて姉ちゃんと一緒や
 つたら間違うて死んだかて構うことあれへん」いいなさるのんで、
 「ふん、そやとも、あてかてかめへん」いいましてん。——そい

で夫が駆け着けて来たら、「まだこの通りぼんやりしてはりますけど、お医者はん絶対に心配ないやはりますし、もう大分正気づいて来やはりますて、ときどき眼工開いたりしやはりますのんで、ほんまは本宅の方いお知らせせないきまへんねんけど、そしたらどうちゃん叱られはりますし、私かてどない御寮人ごりょうにんさんに叱られまッか分れしまへんさかい、電話かけんと置きましたんだす。何卒どうぞあんたさんもそのお積りで内証にしといとくなはれ。どうせ今晚帰りやはる訳に行けしまへんよつて、奥様御加減ようなりやはるまで、此処い遊びに来てなはる体裁にしてゆつくり逗留とうりゅうしてとくなはれ」と、そこはお梅どんにあんじよういわして、二日でも三日でもじいツとしたなりで、寝たふりしながら譴言うわごと

いうたり、眼工覚^さまして泣いて見せたり、そのあいだにはお梅どんからも「お二人さんの命助ける思て願い聴いたげとくなはれ」いう工合^{ぐあい}に口添えしてもらたら、なんぼ夫かてしヨことなしに承知するやろ。「そしたらそれ何日^{いつ}にしよう?」「何日^{いつ}いうたかて、こないに監禁同様にしられてたら、今日より外に機会あれへん。」

「あてかて早^はよしてもらわな、また綿貫が何の彼のいうて来るし。
」——と、そんな相談してゐるうちにも何遍でも電話かかつて来ますので、これやつたらなかなか逃げる隙^{ひま}ないし、逃げたところで浜寺い行かん間に分つてしまふ、逃げてから掴^{つか}まえられるまで何ぼ少うても二、三時間の余裕なかつたら都合わるい。最初私は、「夕方まで昼寝するさかい起したらあかん」いいつけて、夫にも

電話で断つといて、寝室のドーア中から鍵^{かぎ}かけて、窓から飛んで降りて逃げよ、と、そない考えましてんけど、外側が洋館の白壁になつてて足がかりもあれしませんし、前の浜には仰^{ぎょう}さん海水浴の人行^いてますし、そんな人目につくようなこと出来^{でけ}しませんよつて、また相談し直して、いつそのこと此処二、三日大人^{おとな}しいにしてて、夫や家の者に油断さしてから、海い泳ぎに行くよう見せて逃げ出してやろいうことになりますん。そいでそないするのんには、二、三日して氣イ許すようになつた時分、「毎日家の中に閉じ籠^{こも}つてたら病人みたいになるさかい、海い這入^{はい}ることぐら^い許して頂戴。海水服一つ着たなりで、何処いも行かんと前の浜にいますよつて」と、夫が出かける時に断つといて、ほんまに

海水服着ただけで海岸い出る。同時に梅どん光子さんの着物持つて、浜で待つて、直きに着換えさす。着物は海水服の上からスツポリ被かぶ^{ふち}れるようなワンピースの洋服にして、帽子もなるだけ縁の下つた顔の隠れるようなのがええ。浜には人がウヨウヨしてて、かいつて氣イ付けへんやろけど、洋服やつたらこの頃めつたに着たことないのんで、尚更誰に見られても私やいうこと分れへんやろ。待ち合わす時刻は朝の十時から十二時までの間、——その時分やつたら夫きつと大阪い行てる。日イは、雨さい降らなんだら今日から三日目、その日イいかんだら四日目も五日目も、毎日来てもらう。と、そんな相談してましたら、またええ智慧ちえ出て来て、光子さんの方は二日目の晩あたりに一と足先浜寺

い行てる。そないすると夫から問い合わせの電話かかつたとき、「光子は昨日から別荘の方い行つてます」と、本宅の方でもいうやろし、光子さんの方いかかつて来ても、「うちこつちい来てること姉ちゃん知りやはれしませんさかい。来やはるはずあれしません」いうて、自身で電話口い出てやんなさつたら、これは遠い所い逃げたんやない、海で死んだのんかも分れへん思て、何より先に海の方捜索するやろ。そいでええ加減たつた頃に、「実は今さつき奥様お見えになりまして、うつかりしてる間アにえらい事になりますて、……」とお梅どんから知らしてやる、この計略で時間計算してみましたら、家の者ら氣イ付くまでに一時間半か二時間はかかる。そいから大阪い知らせ行つて、問い合わせの電話

かけたりして、夫香櫞園こうろえんい帰つて来るのんざつと一時間、海搜
したり近所尋たねたりするのん一、二時間、お梅どんから知らし
て来て香櫞園から浜寺かい駆け付けるまでが一時間二、三十分、—
—都合五、六時間余裕あるのんで、それやつたらちやんとその間
アに支度出来る。ただ氣の毒やのんはお梅どんで、前の日イから
光子さんに附いて浜寺あそこい行つて、彼処から十時までにわざわざ
香櫞園い出て来て、暑い盛りに一時間も二時間も海岸に待つてん
ならん。それもひよツとしたら待ちぼけ喰くわされて、二日も三日
も来んなりません。けど「あの児こやつたらきつとしてくれるわ、
そんなことするのん好きやねんし」いいなさつて、何から何まで
洩もれのないよう手筈てはずきめて、お互に「巧いことやつて頂戴」い

うて、光子さん帰つて行きなきつたのん一時頃でしたけど、それと殆んど入れ違いみたいに夫戻つて来ましたのんで、ほんまにこ
れやつたら今日でのうてよかつた思いましてん。

その三十

はあ、……逃げたのんはそいからやつぱり三日目のことで、日ひ
和の都合も時間の工合もすつくり予定の計画通り行きましたのん
で、私は十時ちよつと過ぎに海水服着て海岸い出て、お梅どん見
ると眼工で合図しいしい黙つて浜七、八丁走つて、そこで更紗模
サラサ

様のヴォイルの服頭から被つて、お金の十円這入つて手提げ受け取つて、パラソルで顔隠しながら、お梅どんとは別々に急ぎ足で国道い出ましたら、運よくタクシー來ましたのんで、それに乗つて一と息に難波なんばまで行きました。そいですきかい十一時半前にはもう別荘い着いてしもてて、お梅どんの方が三十分も後れてやつて来て、「えらい早よよおましたなあ。ほんまにこない巧い工合に行たことあれしません。さあ、さあ、今の間アにしやはらんと、ぐずぐずしてはつたら電話かかつて来まつせ」というて、母屋おもやから大分離れた庭の中に建つてる「何とか庵あん」たらいう葛屋葺くずやぶきの家の方い二人追い立てるようにして、そこい這入つたらもうちやんと枕まくらもと許ゆに薬やら水やら用意してあるのんで、私は洋服浴ゆ

衣に着換えて差向いにすわつてみましたもの、これがこの世の見納めやないか、ほんまに死ぬのんやないやろか、「もし間違うてあて死んだら光ちゃん死んでくれるなあ?」「姉ちゃんかてそうやわなあ?」と、互に抱き合つて涙流すばつかりでしてん。その時光子さんは両親に宛てたのんと、私の夫に宛てたのんと、二通の書き置き出して見せなさつて、「これ読んでみて頂戴」いいなさるのんと、私も書いといたのん出して互に読み比べてみましてんけど、それかてほんまの書き置きのつもりで、殊に私の夫に宛てたある光子さんの手紙には、「あんたの大事な奥様一緒に連れて行くのん何とも申訳ありません。これも運命や思てあきらめて下さい」と、夫が読んだら恨みも忘れて心動かすに違ひないよ

うに書いたありましたさかい、それ眼工の前い置いて見る自分らまでが本気にさせられて、もうどないしても死んで行くもんとか思われしません。そないして一時間ぐらいたつてしましましたら、パタパタと庭下駄にわげたの音してお梅どん駆かけ込んで来て、「どうちゃん。どうちゃん! 今やつと今橋から電話だす。まだだしたらどうちゃんちよつと出とくなはれ」いうのんで、慌あわてて飛ふんで行きなさつて、その電話済んでしまうと、「これで何も彼もあんじょう行つた。さあ、もうぐずぐずしてられへん」というて、そいからもう一度別れ惜しんで、互にぶるぶる顛ふるてる手工振り合いながら薬飲みましてん。

完全に意識失うてたのんは半日ぐらいの間らしいて、その晩の

八時頃にはときどき眼工開いてあたりキヨロキヨロ見廻したりし
 出したいうこと、あとで聞きましたのんですが、私自身ではその
 後二、三日ちゅうもん一つもハツキリした記憶ないのんで、……
 何やこう、頭抑えつけられるような、胸苦しい、ムカムカ吐き氣
 するような感覚が、枕もとに据わってる夫の姿とごちやごちやに
 幻影みたいに眼工に映つてて、つまりその間が数限りもない夢の
 連続になつてますねん。私と、夫と、光子さんと、お梅どんと、
 四人が何処ぞい旅に出かけて、宿屋の一と間に蚊帳吊つて寝てて、
 それが六畳ぐらいの狭い座敷で、同じ蚊帳の中に、私と光子さん
 中に挟んで両端に夫とお梅どん寝てる。……そんな光景が夢の場
 面の一つのようにぼんやり頭に残つてますねんけど、部屋の様子

から考えたら、ほんまの事が夢に交り込んだのに違いないのんで、これもあとで聞きましたのんに、夜遅うになつてから私の布団隣りの部屋い引っ張つて行きましたら、光子さん眼工覚ましなかつて、「姉ちゃん、姉ちゃん」と譖言みたいにいいづけて、「姉ちゃんいてへん、うちの姉ちゃん返して！返して！」いうてポロポロ涙こぼしなさるのんで、しょことなしにまた同じところに寝さしたんやそうですさかい、それが夢では宿屋の座敷になつてるのなんですが、まだその外にもいろいろ不思議な夢あるのんで、これも宿屋みたいな所に私が昼寝してましたら、傍に綿貫と、光子さん小声で内証話してて、「姉ちゃんほんまに寝てはるねんやろか。」「眼工覚ましたらいかん。」いうて、ヒソヒソしゃ

べつてるのんが切れきぎ切れに聞えますのんを、私はうとうとしながら聞いてて、此処は一体何処やねんやろ！ きっといつもの笠屋町の家に違ひない、生憎其方い背中向けて寝てるのんで、二人の様子見えへんけど、見えんかてもう分つてる。自分はやつぱり欺されたんや、自分にだけ薬飲まして、こないな目工に遇わしといて、その間アに光子さん綿貫呼びやはつたんや、エエ、口惜しい、口惜しい、今跳び起きて二人の面皮剥はいでやろ！ と、そない思うのんですけど、起き上ろとしても体の自由利けしません。声出してやろ思て一所懸命になればなるほど、舌硬張つて動けしませんし、眼工あくことすら出来でけませんので、エエ、腹立つ、どないしてやろ思てる間アにまたいつやらうとうとしてしもて、

……それでも話声まだ長いこと聞えてて、その男の方の声が、お
かしいことに綿貫でのうて夫の声に変つてしまつて、……こない
なとこになんで夫いるねんやろ？ 夫あないに光子さんと親しい
のんか知らん！ 「姉ちゃん怒りやはりますやろか？」 「なあに、
園子かてその方が本望ですやろ」 「そしたら三人仲好（はい）うして行き
まひよなあ」と、——そんな工合（ぐあい）にポツリポツリ耳に這入（はい）つたの
んが、今考へてもよう分れしませんねんけど、二人の間でほんま
に話してたもんやのか、それとも夢の中ながら想像で事実補うて
たのんか、……それがあのう、……こいだけやつたらみんな自分
の心の迷いで根工も葉アもない幻見たんや、そんな事実あろうは
づないと打ち消してしまいますねんけど、その外にもまだ忘れる

ことの出来ん場面覚えてますし、……それも初めは阿呆らしい夢や思てましたのが、薬さめて意識ハツキリして来るにつれて、外の夢だんだん消えてしまいますのに、その場面だけかいつて頭い焼き付いてて、疑がう余地ないようになつて来ましてん。いつたい薬の分量は同じように飲んだのんですけど、私の方が長いあいだ昏睡こんすいしてたいうのは、光子さんは十一時ごろに朝昼兼帶の御飯たべはつてお腹なか大きかつたのんに、私は朝御飯もろくさまたべんと飛び出してえらい活動しましたさかい、胃袋空からツぽになつてて薬完全に吸収されたのんやそうで、私の方はまだ夢うつつの境迷うてた時分、光子さんは飲んだもんみんな吐いてしまやはつたお蔭で、よつほど前から意識恢復かいふくしてなさつたらしいの

です。それでも後になつてからの話に、「あて知らん間アに、傍にいる人を姉ちゃんと間違うたのんや」と、そない自分でいやはりますのんで、それやつたら罪は夫の方にあることになるのんですが、夫の自白聞きましたら、二日目の昼過ぎお梅どん母家の方い行つて、夫は私の寝顔見ながら団扇で蠅追うてた、そしたら光子さんが寝惚けたように「姉ちゃん」いいながら私の方寄つて来うとしなさるのんで、眼工覚まさしたらいかん思て、間に這入つて光子さんの体抱き上げるようにして引き離して、枕外しなさつたのんを直したげたり、掛け布団掛けたげたり、……そんな風にして、寝てはるとばつかり思い込んで油断してましたさかい、知らず識らず、気イ付いた時にはもうどないしても逃げること出

来んようにしられてた、何せ夫ちゅうたらそないな事にかけたら
経験のない、子供みたいな人ですよって、私は夫の話の方がほん
まに違ひない思いますねん。

その三十一

まあ、そんなこと、どつちが先や詮議立せんぎだしてしたとこで無駄です
ねんけど、一ぺん間違いあつてからは、私に済まん思いながら同
じ過ち繰り返してたらしいのんで、それ考えたら全然夫に責任な
いともいわれしませんのんですが、私としたらその点に同情出来
あやま
じ

るいうのんは、前にもたびたびいいました通り、夫と私とは肌合
工へんのんで、私がいつも愛の相手外に求めてたように、夫にし
たかて無意識のうちにそれ求めてたのんに違ひあれしません。お
まけに外の男みたいに芸者遊びするやとかお酒飲むやとかして、
物足らなさ充みたすちゅうこと知らん人だけに、なおのこと誘惑に
陥りやすい状態にあつたのんで、一旦そないなつてしまもたら、堰せき
切つた水みたいに、盲目的な情熱が意志や理性の力踏みにじくつ
て燃え上つて来て、光子さんより夫の方が十倍も二十倍も夢中に
なつてしまつたのんです。そんな訳で、夫の心持の変化は大概諒
解かい出来ますねんけど、いったい光子さんどういうつもりでいな
さつたのんか、そらまあ、ほんまに半分は寝惚ねぼけてなさつて、ほ

んその時の出来心やつたのんか、それとも或るハツキリした目的持つてなさつたのんか、——つまり綿貫放^ほる代りに夫とそういう風になつて、私との間に嫉妬起^{しつと}さして、思うままに操^{あやつ}つてやろ、——どうせ自分の崇拜者一人でも仰山寄せ着けときたい性分ですさかい、またしてもその悪い癖出しなさつたのんか、そやなかつたら「氣イついてみたら済まんことした思てんけど、そいでもこないなつた方が味方につけるのんに都合がええのんで」いうてなさつたように、夫引き入れる手段やつたのんか、なんせえらい複雑で裏には裏ある人の気持なかなか分れしませんけど、多分そんないろいろの動機に時のはずみも加わつたのんやろ思いますねん。ま、二人が自白しましたのんはづつと後のことですさかい、初め

はそんな深いとこまで考へんと、寝ながらぼんやり「裏切られた」
 いう感じ持つてて、お梅どん 枕まくらもと 許ゆき いやつて来て「奥様おくさん、もう
 安心だつせ、あんた所の旦那様おとねさま何も彼も聴いてくれはりました」
 いうてくれた時も、嬉しいのん半分と口惜しいのん半分で、そな
 い喜びもせえしませなんだのんで、二人も私に感付かれたこと薄
 々悟つてたらしいのんです。そこでお医者はんに「もう起きられ
 ても大丈夫です」いわれたのん三日目工の晩で、浜寺引き揚げた
 のんは四日目工の朝でしてんけど、その時も光子さん「姉ちゃん、
 もう心配せんでもええし。委くわしいこと明日あんたとこい行つて相
 談しようなあ」と、口ではそないいながら、氣きイ咎とがめると見え
 て妙に態度余所々よそよそして、夫の方も何や知らん光子さんと打ち

合わせしたあるらしゅう、私連れて香櫞園い帰つて来ますと、

「用事溜たまつてるさかいこいからちよつと事務所い行て来る」いう
て直きに出て行つて、晩の八時過ぎに戻つて来てからも、「晩の
御飯済まして來た」いうたなり、私に話しかけられるのん恐こわがる
ようにしてますねん。私は夫が人欺だまして平氣でいられる人間でな
いことよう知つてますさかい、今に何とかいい出すやろ、困らさ
れるだけ困らしてやれ思て、無理に知らん顔して、時間になつた
らさッさと先い寝てしまひましたら、夫は尚更なおさら落ち着かん塩あんば
梅まいで、十二時になつても寝付かれんらしい寝返り打つて、とき
どき薄眼工開あきながらそつとこつち見守つて寝息うかごうてる
のんが、真つ暗い中でも分るのんです。そないして暫くたちまし

たら、「おい」いうて私の手工取つて、「どうや、気分えのんか? もうちよつとも頭痛いことないか? まだ起きてるねんやつたら、僕話したいことあるねん」いうて、「お前、……知つてるねんやろ?……どうぞ堪忍してくれ、運命や思て^{こうら}拯えてくれ。」

「ああ、そんなら夢やなかつてんなあ。……」「堪忍してくれ、なあ、堪忍すると一と言いうてくれ。」そないいわれてもしくしくしく泣いてばつかりいる私を、いたわるように肩さすつてくれながら、「僕かたあれ夢と思いたい。……悪夢や思て忘れてしまいたい。……けど、僕、忘れること出来んようになつてしまつた。僕は始めて恋するもんの心を知つた。お前があないに夢中になつたのん無理ないいうこと今分つた。お前は僕のことパッショ

ンないないうたけど、僕にかてパツションあつたんや。なあ、
 僕もお前許す代り、お前かて僕許してくれるやろ?」「あんた、
 そないなこというて復讐ふくしゅうする氣いやねんなあ。今にあの人と
 グルになつて、うち独りぼっちにさそ思て、……」「馬鹿なこと
 いいな? 僕そんな卑劣な男やない? 今になつたらお前の気持
 かて分つたさかい、何で悲しい思いさすもんか!」自分は今日も
 事務所の帰りに光子さんと会うて相談して來た。私さい承知して
 くれたら、あとは自分が一切引き受けて、綿貫の方もちよつとも
 心配ないよう片附けてやる。光子さんも明日は家うちい来なさるや
 ろけど、私に会うのん極きまり悪がつてなさつて、「あんたから姉
 ちゃんに詫あやまつといて頂戴ていだい」いわれて來た。と、そないにいうて、

自分は綿貫みたいな不信用な男やないよつて、綿貫に許したこと自分にも許してくれたらええやろいうのんですが、そら、なるほど、夫の方は人欺すようなことせんとしても、気がかりやのんは光子さんですねん。夫にいわしたら「自分は綿貫と違うよつて大丈夫や」 いいますねんけど、私の身イになつたらその「違う」いうこと心配の種やのんで、なんせ光子さんは始めてほんまの男性ちゅうもん知んなさつた、そんだけ今までより真剣になんなさるかも分れへんし、そのため私捨てなさつても、「不自然の愛より自然の愛貴い」 いう立派な口実ありますし、良心の苛責かしゃくも少いですやろし、……もし光子さんにそんな理窟りくついわれたら、夫にしたかつて間違うことしなさいいう訳に行けしませんし、ひ

よツとしたらあツちやこツちや説き伏せられて、しまいには「光子さんと結婚さして欲し」いい出さんとも限れしません。「僕とお前とは誤まつて夫婦になつたのんや。性の合わんもんこないしてたらお互の不幸やさかい、別れた方がええ思う。」——と、いつぞそないいわれる日イ来るのやないやろか？ そしたら常時恋愛の自由口にしてながら「イヤや」いうこと出来しませんし、世間の人かて私みたいなもん離縁しられるのん当り前や思うやろ、今からそんな行末のこと考えて、取り越し苦労したどこでしヨうないようなもんの、どうも私にはきっとそないなる運命みたいな氣イするのんですが、そうかいうて、今の場合、夫の頼み聴かなんだら自分も明日から光子さんの顔見られんようになるのんで、

「あんた信用せえへんのやないけど、何や知らん悲しい予覚して、
 └」 いうて、しくしくしくしくいつまででも泣いてますと、
 「そんな馬鹿なことあるもんか。そらみんなお前の妄想や。誰ぞ
 一人でも不幸になつたら三人で死のやないか」 いうて、夫も泣き
 出して、とうとう二人で夜が明けるまで泣き通してしまいます
 ん。

その三十二

さてその明くる日から夫は光子さんの家の方の諒解運動と、綿

貫の方の解決とえらい奔走し始めたんです。先ず第一に徳光さんとこい行て、お母さんに面会求めて、僕はお宅のお嬢さんの親友である園子の夫として、お嬢さんから頼まれたことある。実はお嬢さんは悪い男に付け狙ねらわれてなさつて、……と、そんな場合に切り出して、尤もその男はこないこないの人間やのんで、お嬢さんの貞操は汚されてエヘン、ただその男ちゆうのんが卑劣な奴で、お嬢さんがその男の種宿してなさるやとか、お嬢さんと僕の妻とが同性愛やとか、跡形もないこといい触らして、強制的に証文に判つかしたりしましたさかい、今にお宅の方いも脅迫がましいこというて来るかも分れしませんが、絶対にそんなことお取り上げになつたらいきません。お嬢さんの身の潔白は誰よりも僕

が知つてます。取り分け僕の妻との交際がそんな醜いもんでないことは、夫たる僕が証明します。就いては僕も友人の立場として、御依頼のうても何とかせんならん思てた際ですから、どうぞこの問題僕に一任してもらえませんか。お嬢さんの安全僕お引き受けしますよつて、たといその男何いうて来ても「今橋の事務所い行け。」いわれて、直接お会いにならんよう。——と、めつたにうそついたことない人が、恋のためにはそないなことまでするのんですやろか、巧いこというてお母さん円めてしもて、そいから綿貫のとこい出かけて、結局この方はお金で埒明いたいうて、例の新聞い売るいうてた証文の写真と、種板たねいたと、夫から渡したあつた預かり証と、証拠になるもん全部取り返して来てましてん。そ

れが二日か三日のあいだにバタバタと片附いてしもたのんで、なんぼ夫が一所懸命になつたにしても、あの綿貫がそないやすやす手引いたいうのんが、私も光子さんも何や腑ふに落ちんような氣イして、写真の種板たねいたんおこしたにしたかて複写したあるかも分れへんし、何企たくらんてるかも知れん、「なんぼお金やんなさつた」いいましたら、「千円いうのん五百円にさした」と、あいつ彼奴かれからカラクリの種こツきり僕に握られてしもてて、もうこれ以上オドシ利かん思たのんで金にする氣イになつたのんや」と、夫は安心し切つてるのんです。そこでその時はすつくり私らの計画通りに行つた形で、たつた一人貧乏びんぼうくじひ闊抽くつきいたのんお梅どんで、「そんなことになつてたのんに、お前附いてながら主人に知らさ

んいう法あるもんか」いわれて、暇出されてしまつて、えらアい私
 ら恨んでて、——そら、まあ、あないに骨折らしどきながら、其
 方の方つちい飛ばしり行くのん考えなんだのんは何といわれても手落
 ちですさかい、出て行く時にいろいろなもん買うてやつたりして
 機嫌取りましてんけど、このお梅ひまどんから後で意趣返しされるや
 なんて、夢にも思い寄りませなんどん。

夫は光子さんの家の方い、「もう御安心です」いうてやりまし
 たのんで、お父さんわざわざ事務所にお礼に来なさるやら、お母
 さんも私のとこい来なさつて、「どうぞどうぞ、あの通りの我わ
 優ままでもんですさかい、ほんまの妹や思て面倒見てやつとくなはれ。
 家ではあの児がお宅さんいさい上つてたら安心してます。何処い

行きたいいましても、あんたさんと一緒にないと出せしません』
いいなさるやら、えらい信用しられてしもて、お梅どんの代りに
お咲どんいう女子衆おなごしゆつれて、毎日おおびらに遊びに来やはつて、
たまには泊つたりしなきつても、お母さん何ともいやはれしませ
ん。けどそないにして外部の関係万事都合よう行くようになりま
したら、今度は内部の関係が、綿貫の時よりも一層お互に疑がい
深うさされて行つて、日一日と地獄の苦しみ重ねるようになつた
のです。それにはいろいろ理由あるのんで、前は笠屋町いう便
利などこありましたのに、今ではそんなとこあれしませんし、
あつても一人だけ放つといて二人が外に出ることならんといいます
し、そしたら結局家にいるよりしょうないのんですが、そないす

ると私が夫か孰方どつちぞが邪魔にしられるようになつたり、そうでないまでも自分の方から気イ利かさんならんようになつたり、そこいさして光子さんが、いつでも出しなに「こいら香櫞園かい行きます」いうて、今橋の方い知らしやはるよつて、夫は直き帰かつて来る。それもお互に隠し立てせん約束やのんで、知らすのん仕方あれしませんけど、そんならそいで、もうちよつと早う朝のうちからでも来てくればつたらええのに、大概二時か三時頃に来やはるさかい、二人ぎりでいる時間いうたら、ほんの何ぼもあれしません。夫にしたかて光子さんから電話かかつたら用事放つといても飛んで帰つて来るのんで、「そないせんかつてよろしやないかうちちよつとも話してゐ間アもあれへん」といいますと、「もつ

とゆつくりしてよ思てんけど、事務所の方暇やさかい帰つて來た」とか、「離れて想像してゐる方が気が揉める。一つ家にいてたら安心やよつて、邪魔やねんやつたら階下しだい行いてもええ」とか、

「お前は二人ぎりでいる時間あるのんに、僕にはちよつともな
いいうこと察してくれんと困る」とか、だんだん問い合わせると、

「ほんまは光ちゃん『電話かけたのんに何で早はよ帰つて来えへん
ねん! 姉ちゃんの方がよつほど實意ある』いうて怒りやはるね
ん』いいますねん。いつたい光子さんの焼餅ちゅうのんが、何処
までが本氣で何処までが手管てくだか分れしませんねんけど、それがま
たいかにも氣違ひじみて、たとえば私の夫のこと「あんた」い
うたらもう眼工に涙溜ためはつて、「今では夫婦でもないのんに、

あの人のこと『あんた』いうたらいかん』いいなさつて、人のいる前ではともかくも、内輪では何ぞ外に呼びようあるやろ、「孝太郎さん」とか、「孝ちゃん」とか、いうて欲し、夫にしたかて私のこと「園子」やの「お前」やのいわんと、「園子さん」いうか、「姉さん」いうかせないかん、それぐらいはまだええとして、睡眠剤と葡萄酒持つて来なさつて、「二人ともこれ飲んで寝なさい、あてあんたらの寝ついたん見てから行ぬ^い」いうて聴きなされしません。初めは冗談か思てましたら、なかなかそやないのんで、「特別によう利く薬調合してもらって来た」いいなさつて、粉薬の包二つ出して、夫と私の前い置いて、「二人ともあてに対して忠実誓うねんやつたら、その証拠にこれ飲みなさい」いいなさるや

あれしませんか。けどこの薬に毒でも這入つて、自分だけ永久に眠らされるのんやないか知らん?——と、はつとそんな氣イ起りましたら、「飲め飲め」いいなさるほどなおのこと疑わしいになつて来て、じーっと光子さんの顔みつ視詰めてますと、夫もやつぱり同じ恐怖に襲われたらしゅう、白い粉薬手工の上に載せたまま、私の手工にある薬の色と見比べるみたいにして、光子さんの顔と私の顔とジロジロうかごうてるんです。すると光子さんは「なんで飲めへんのん? なんで飲めへんのん?」いうてヤキモキしながらつて、「ああ分つて、あんたらあて欺しててんなあ」と、身イふるわして泣きなさいますし、もうしょうない、殺される覚悟で飲んでやろ思て、薬の包口イ持つて行きましたら、私の様子

黙つて眺めてた夫が「園子！」といつていきなり手工^{つか}掴んで、「まあ、待つてくれ！ こないなつたら孰方^{どつち}がどうなるか運試^{だめ}しや。その薬換えことして飲もやないか」いいますのんで、「ふん、そうしよう、そんに二人とも一、二の三で一緒に飲も」と、どうぞしないして飲みましてん。

その三十三

この光子さんの計略図にあたつて、夫と私とはどんなにお互に疑がい合い、嫉妬^{しつと}し合うことですやろ。毎晩々々薬飲まされる

たんびに、寝さされるのん自分がけやないか、夫はうその薬飲んで寝た真似^{まね}してゐるのん違うやろかと、そない思たら、飲んだ風して放つてしまおとしますねんけど、光子さんいうたらそんな胡麻化^かしささんようにじツと手もと視詰^{みつ}めてて、まだそんだけでも心配やのんか、しまいには「あて飲ましたげるわなあ」と、寝台と寝台の間に立ちなさつて、恨み合いせんように、同時に両方の手工に薬持ちなさつて、二人仰向^{あおむ}けに臥^ねさしといて、あーんと口開かして、薬入れてしまいなさると、今度はあるの、病人の水飲ます嘴^{くち}の長^いアいガラスの容れもんありますやろ？あれ二つ両手に持つて、そろそろと、孰^{どつち}方が先にもならんように、同じくらいに傾けて行つてお湯飲ましなさるのんですが、「たあんと飲んだ方が

利き目ある」いいなさつて、あの容れもんに二遍も三遍も入れ替えては注ぎ込みなさいますねん。こつちは一所懸命に、ちよつとでも余計起きててやろ、寝たふりして見ててやろ思いますねんけど、寝返り打つたり横向きになつたりしたらいかん、ちやんと顔見えるように仰向きになつてて欲しいいうて、両方の寝台のあいだに腰かけて、脇眼わきめも振らんと二人の寝顔見守りながら、寝息うかごうたり、眼まばたきさしてみたり、心臓に手工あててみたり、いろいろなことして試しなさつて、ほんまに寝入つてしまふまでは傍離そばれなされしません。そないにせんかて何で今更夫婦の語らいしますやろ。夫も私も今では放つとかれたかて手工触れる気いも起れへんくらいで、これほど安全な男女いうたらあれしません

のんに、「そいでも何でも一つ部屋に寝るのんやつたら薬飲ます。」いいなさつて、だんだん利かんようになると、分量や調合取り換えなさるのんで、その強烈な薬の感じ覚めたあとまでも残つてて、朝床の中で眼工開いた時の気持の悪さいうたら、頭の後の方痺れてて、手足抜けるようにひだるうて、胸がムカムカして、起き上る元氣もあれしません。夫も同じように病人臭い青才い顔して、まだ薬の味残つてるみたいに口の中にちやにちやさしながら、「こないしてたら、今にほんまに中毒起して死ぬかも分れへん」というて溜め息^{た いき}つきます。私はそんな様子見ると、さては夫もほんまに飲まされたのんか思て、かいつて安心しますねんけど、疑がい出したらそれがまた狂言みたいな氣イしますのんで、「な

あ、うちら何で毎晩薬飲まされんならんねんやろ?」 いうてやりますと、「何でやろなあ?」と、夫は夫で、やつぱり疑がい深そくに人の顔ジロジロ見ますねん。「うちら二人寝さしといたかて心配ないこと知れたあるやないか。何ぞ外に目的あるねんし。」「どんな目的やお前には分つてるのんか?」「うち分れへん、あんたには分つてんねんやろ?」「僕には分らん、お前こそ知つてるのやないか。」「そないお互に疑ごうてたら切りなけれど、うちどないしても、自分だけ寝さされてるような氣イするねんし。」「そら僕かて同じことや。」「それかて浜寺のこともあるやないか。」「あれがあるさかい、今度は僕の番やないかいう氣イするねん。」「あんた光ちゃんの帰る時まで起きてたことないのんか

？ どうぞほんまのこというて欲し。」「僕はない、お前はどうや！」「あんな強い薬飲まされたら、起きてとうても起きてられへん。」「ふーん、そんなんやつたら、お前もたしかに薬飲むねんなあ？」「当り前やし、この青い顔見て御覧。」「僕の顔も見て御覧。」そんな話してゐる間に、朝の八時頃になるときつと電話かかつて来て、「さあ、もう起きないかんし」いわれて、夫は睡ねむたい眼工擦こすり擦り起されてしまつて、しょことなしに事務所い出て行くが、よつほど睡とうて溜たまらん時でも、「八時過ぎたらあんたは寝室にいてることならん」いわれてますのんで、下の部屋い来て縁側の籐椅子とういすか何ぞで寝なりません。そないな工合で、私は何時までも寝てられましてんけど、夫の方は一層疲れかた非道ひど

うて、事務所い行たかて頭役に立てしませんさかい、自分は休みたいのんですが、あんまり休むと「姉ちゃんの傍にばつかりいてたがる」いわれますよつて、大概の日イは用事あつてもうても「昼寝しに行て来る」というて出かけますねん。

私はその時分から「光ちゃんうちのこと何にもいわんと、あんたのことばつかり、ああしたらいかんこうしたらいかんいうやないか。あんたの方が愛しられてる証拠やし」というてたのんですが、夫にいわしたら、愛してるもんこないにいじめるはずない、僕を疲れさせて、情慾も何も起らんように麻痺(まひ)させといて、二人で好きな真似(まね)しようという計略やないかいいます。そいでおかしいのんは晩御飯の時やかい、お互に睡眠剤で胃イ悪うしてて、食慾ちよ

つともあれしませんのに、お腹空なかすいてたら早う薬循まわりますさかい、なるだけ余計た喰べとことして、孰どつち方も相手の御飯の数勘定して競争で詰め込みますのんで、「そない喰べたら薬利きへんよつて、二人とも二饅ゼン以上喰べることならん」いいなさつて、しまいには光子さんお膳の傍に眼工光らして、監督してなさるようになつたんのんです。何せあの頃の生理状態いいましたら、今考えでも無事でいられたのん不思議なぐらいで、胃イ衰弱してるとこい毎日飲まされる薬の分量多いのんで、一時に吸収出来へんせえか、お昼になつてもしょツちゅう意識ぼんやりしてて、生きてるのんか死んでるのんか分らんみたいに、顔色ますます青うなる。体は瘦やせて来る。それより困るのんは感覚鈍うなつて来る。ところが

光子さんの方は、そないに二人苦しめて御飯の制限までしどきながら、自分いうたら何ぼでもおいしいもん喰べて、つやつやしい血色してなさる。つまり私たちは光子さん一人が太陽みたいに輝いて見えて、どんなに頭疲れてる時でも光子さんの顔さい見たら生き返つたようになりますのんで、ただそれ一つ楽しみに命ついでいる。光子さんもまた、「なんぼ神經麻痺してたかて、あてに逢うたらハツキリするやろ？」そやなかつたら熱情足らんねんし」いいなさつて、興奮の程度で孰方どつちパツション強いか分る、そやさかい睡眠剤飲ますこと尚なおさら更止められへんいいなさいますねん。まあいうてみたら、普通のパツション捧げられても面白い、薬の力で情慾鎮静させてしまても燃えるような愛感じるので

なかつたら満足出来へん。——結局二人藻抜けの殻みたいにさして、この世の中に何の望みも興味も持たんと、ただ光子さんいう太陽の光だけで生きてるよう、それ以外に何の幸福も求めんようにさしたいということになるのんで、薬飲むのん厭がつたりしたら泣いて怒んなさるのんです。そら、まあ、自分がどのくらい崇拜しられてるか試してみてそれ愉快がるような心理、前から光子さんにあつたことはありましたもんの、そない極端に、ヒステリーめたいなこといい出しなさつたのんは、何ぞ別に理由あるのんに違いないのんで、多分綿貫の感化やないか思いますねん。とうのんは、最初の経験から健全な相手では物足らんようにさされてなさつて、誰^{つか}掴まえても綿貫と同じようにさしたかつたのんや

ないか？ そやなかつたら何でない残酷に人の感覚^{まひ}麻痺^{まひ}さす必要ありましてんやろ？ よう昔の話に、死^{しにりよう}靈^{いきりよう}や生^{いきりよう}靈^{いきりよう}乗り綿貫^{おんねんたた}の怨念祟^{すき}つてるみたいに日増しに荒んで来なさつて、ぞうツと身の毛のよだつようなことがありますのんで、そない思たら光子さんばっかりやあれしません、あの健全な、非常識なとこ微塵^{みじん}もなかつた夫までが、いつや知らん間に魂入れ替つたように、女みたいなイヤ味いうたり邪推したりして、青オイ顔ににたにた笑い浮べながら光子さんの御機嫌取つたりしますのんで、そんな時の物のいい方や表情のしかたや、陰険らしい卑屈な態度じつと見てましたら、声音^{こわね}から眼つきまでとんと綿貫生き写しになつてゐる

やあれしませんか。ほんまに人間の顔いうもん心の持ちようでその通りに変つて来るもんやとつくづく思いましてんけど、それにしたかて怨靈の祟りいうようなこと、先生どない思やはりますやろ？ 取るに足らん迷信や思やはりますやろか？ なんせ綿貫はない執念深い男ですやさかい、蔭で私ら呪(のろ)てて、何ぞ恐い禁まじな厭ういでもして、夫に生靈取り憑ついてたかも分れしません。それで私「あんた段々綿貫みたいになつて来るわなあ」いうてやりますと、「自分でもそない思てる」いうて、「光ちゃん僕を第二の綿貫にするつもりやねん」といいますのんで、もうその時分の夫いうたら凡すべての運命に従順になつてしまつて、自分が第二の綿貫にさされること拒まんばかりか、かいつてそれ幸福に感じてるら

しいて、薬飲むのんも、しまいには進んで飲まされること願うようになつて来ましてん。光子さんにしましたら、どうせ三人こないになつたら無事に収まるはずあれしませんさかい、もうどないでもなれいう氣いで、焼け糞^{くそ}半分になつてなきつて、事に依つたら夫と私だんだん薬で衰弱^よさして殺してしまお、……と、心の底ではそんな企み持つてなさつたのんやないか。……そない思たのん私だけやのうて、「僕かてそれ覚悟してる」と、夫もいうてましたぐらいで、ほんまいうたら、もう直き二人幽靈のように細うなつて死んでしまうのん待つてなきつて、その時限り自分は巧いこと手工^ひ退いて、すつくり眞面目^{まじめ}な人間になつて、ええ婿さん搜そ思てなさるのんやろ、「僕もお前もこないに青い顔してゐるのん

に、光ちゃん一人丈夫そうにぴんぴんしてる様子見たら、どうやらそうに違いない氣イする」 いいますねん。そんで夫も私も、衰弱の余り楽しいことも嬉しいことも感じんようになつてしまったら、もうその時がこの世の終りやと觀念してて、今日死ぬか明日死ぬか思いながら生きてましてん。

ああ……ほんまに私、その予想の通りになつてあの時一緒に殺されたらどない幸福でしたやろ。それがこないな思いかけぬ結果になつてしまたのんは、あの新聞に記事出たのん第一の原因ですのんで、なんでもあれ九月の二十日頃でしたやろか、或る朝夫が「ちよつと起きてくれ」 いいますよつて、何や思たら、「誰やこんなもん送つて來た奴ある」 いうて、いつも見たことない新聞の

三面のどこ広げて、そこ覗いてみましたらあの綿貫に書かされた書付大きな写真にして載せたあつて、仰山なこと書き立ててある見出しの上に、赤インキで二重円の印附けたあるやあれしませんか。それも一日だけやない、記者の手許（てもと）に材料たんと集まつてるさかい、連日にわたつてこの醜惡なる有閑階級の罪状を摘発すべしという予告したありますのんで、「それ見なさい、やつぱり綿貫に欺されてたんや」といいましたもんの、もうその時は案外度胸すわつてしまつて、口惜しいとも忌ま忌ましいとも思わんと、「いよいよ最後の時來た」いう感じ、真つ先に来ましてん。「ふん、馬鹿な奴（う）ッちや、今更こないなこと書かして何になる」と、夫も血の氣工失せた頬べたに冷やかなほほ笑み浮べてるだけ

で、「構めへん、構めへん、放つといたらええ」いいましてんけど、そいでもその新聞いうたら信用のない小新聞ですさかい、まさか世間が真に受けるはずないやういうのん頼みにして、何は措おいても光子さんとこい電話で知らして、「これこれの新聞家いも送つて来たよつて、光ちゃんとこいも来てへんか」というたげましたら、慌てて搜して見なさつて、「来てた、来てた、ええ 塩梅 あんぱいにまだ誰アれも見えへなんでん」といいなさつて、その新聞懷ほどころに入れて、「どないしたらええやろ」といいながら駆け込んで来なさいましてん。

最初私らは、綿貫の売り込んだ材料やつたら自分に都合悪いこと書けへんやろし、私と光子さんとの事なら今に始まつた噂うわさやな

いし、大した問題にはならんかも知れへん、まあ、まあ、そない慌てるにも及ばんやろ思てましたのんで、二、三日目工に光子さんの家い知れた時にも、「また例のわるさやつてるのんです、偽筆の署名まで拵えて写真に出すやんてあんまり悪辣あくらつですさかい、訴えてやつてもよろしいんですけど」と、夫の口でええよういいいくるめさして、ほつと一と安心してたところが、記事はそいから何日たつてもしまいにならんと、一層深刻に真相に触れて来て、綿貫に不利な事実かて遠慮なしに発あばき出したばつかりか、笠屋町の宿のこと、奈良い遊びに行つたこと、光子さんお腹なかに物詰めて夫に会いなさつたこと、……それが、綿貫の知つてるはずないことまでも分つてらしくて、この調子やつたら、浜寺のこと

から狂言自殺のこと、夫渦かちゅう中に巻き込んだこと、何から今まで素ツ葉抜きそうな勢いやのんです。それにおかしいのんは、光子さんも私もお互に遣り取りした手紙大事にしもといて、誰にかけて見せたことあれしませんのんに、私の方から上げた中の一通が、——えらい猛烈な、動きの取れん文句並べたある一通が、——いつの間にやらちゃんと窃ぬすまれてて、れいれいしいに写真に出されましたのんで、取つたとしたらお梅どんより外にないさかい、さては綿貫とグルになつてゐること始めて氣い付いたのんですが、そないいうたら、光子さんとこ暇出されてからも二、三べん私どこい遊びに来て、用もないのんにウロウロしてたことあつて、何や様子けつたいな、するだけの事はしてやつたのんにまだお金

でも欲しいのんかいな思いましてんけど、そないにしてやるにも及ばん思てつい放つたらかして置きましたら、何でも新聞に記事載り出す二、三日前にやつて来て、妙なこというて光子さん冷かしたりして行んでしもたなり、ぷツつり姿見せしません。「何ちゅう恩知らずやろ、家にいた時かて奉公人みたいなことあれへん、まるきりあてときようだいみたいにさしといたのんに、……」

「あんまり我が儘さし過ぎてんやわなあ。」「飼い犬に手工咬まかれるとはこの事こツちやし。姉ちゃんにかてあない色々してもらおいて何不足やねんやろ。」「そしたらやつぱり綿貫に買収しられたんやろか。」——まあ想像しますのんに、新聞社では最初綿貫の材料に基づいて調べ出してみたら、それからそれいと隠れた事

実分つて來たとこい、折ようお梅どんちゅうもん見つけて捆^{つか}まえたのんか。そやなかつたら綿貫の奴初めからお梅どんと連絡取つて、破れかぶれに自分の秘密までサラケ出して売り込んだのんか。
 孰方^{どつち}にしたかてこないなつたらもう一刻も猶予出来へん、グズグズしてたら光子さん一步も外い出られんようになるよつて早う兼ねての約束通り覚悟きめよいいましたもんの、そいでもどうしうこうしよういうて毎日相談してましたら、そのうちにどうぞ浜寺のこと出始めましてん。

そいから先の出来事は孰の新聞にもあない委^{くわ}しいに出ましたぐらいで、先生かてよう御承知ですやろし、もうもうそないに管^{くだく}だ々しいに過ぎ去つた日のことお聞かせせんかて、……何や私も、

あんまり長いことしゃべつたせえかけつたに興奮して、辻 棲の合わんこと話したような氣イしますねんけど、……ただ新聞に洩れてることいいましたら、あの時第一に「死の」いい出しなさつて最後の手筈てはずきめなきったのんは光子さんでしてん。たしかお梅どんに手紙盗まれたこと分つた日イに、「こないなもん家い置いといたら危険や」というて、証拠になるような文殻ふみがら全部私とい持つて来なさいましたんで、「焼いてしまおか」といいましたら、「いや、いや、あてらいつ何どき不意に死なんならんか分れへんさかい、書き置きの代りにこの記録遺のこしこ。どうぞ姉ちゃんのと一緒に大事に預かつといて頂戴」いいなきつて、私らにも身イの周りのもん整理しとくようにいつけたりして、そいから

二、三日目工の、十月二十八日の午後一時頃「いよいよ家の様子おかしい、今日帰つたら出られんようになりそうな」いうて来なさつて、逃げて捆まえられたりしたらあかんさかい、いつそいつもの部屋で死のいいなさいましてん。それで枕もとの壁にあの觀音様の画像飾つて、三人寄つてお線香^{せんこう}上げて、「この觀音様の手引^{びき}やつたら、あて死んだかて幸福や」と、私がそないいましたら、「僕ら死んだら、この觀音様『光子觀音』いう名アつけて、みんなして拝んでくれたら浮かばれるやろ」と夫もいうて、彼の世い行つたらもう焼餅喧嘩^{げんか}せんと仲好^よう脇^{わき}仏^{ぼとけ}のように本尊の両側にひツついてまひよと、光子さん真ん中に入れて枕並べながら薬飲みましてん。……はあ？ そら、そうですねん、何でその

時、私だけ一人残されるということ思いましたやろ、明くる日眼工
 覚ました時にも、直きに二人の跡追おう思いましたんけど、ひよ
 ツとしたら、生き残つたん偶然やないかも分れへん、死ぬまで二
 人に欺されてたのんやないやろかいう氣イしましたら、あの手紙
 の束預けなさつたことにしたかて疑がわしいになつて来て、折角
 死んでも彼あの世で邪魔にしられるのんやないかと、ああ、……先
 生、（柿内未亡人は突然はらはらと涙を流した。）……その疑が
 いさいなかつたら、……今日までおめおめ生きてる私やあれしま
 せんねんけど、……そうかて死んでしもた人恨んだどこで仕方あ
 れしませんし、今でも光子さんのこと考えたら「憎い」「口惜し
 い」思うより恋しいて恋しいて、……ああ、どうぞ、どうぞ、こ

ない泣いたりしまして堪忍して下さい。

⋮⋮⋮

青空文庫情報

底本：「ヰ（あい）」岩波文庫、岩波書店

1950（昭和25）年5月20日第1刷発行

1985（昭和60）年12月16日第18刷改版発行

1990（平成2）年4月25日第20刷発行

初出：「改造」改造社

1928（昭和3）年3月～1929（昭和4）年4月、6月～10月、
12月～1930（昭和5）年1月、4月

※「懐」に対するルビの「ハムハム」又「ヒムヒム」の混在は、
底本通りです。

※表題は底本の目次では「卍（まんじ）」、「中扉」では「まんじ」となっています。

入力：kompass

校正：酒井和郎

2017年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

卍（まんじ）

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>